ピンボケ宇宙戦争
塩谷隆志
ソノラマ文庫

ピンボケ宇宙戦争

遠い宇宙の果てでは、ゴラム機械軍団とオーラ星精神体との戦いが終末の段階を迎えようとしていた。ワープ反動砲、反物質砲を操ってのゴラム軍の猛攻に、念力バリヤーで必死に防戦していたオーラ星も壊滅寸前だったのである。力には力を、物質には物質をと、オーラ星は援軍を求めることを決定した。使命を帯びたオーラ星精神端末は限りなくテレポートを重ね、遙か彼方の島宇宙のはずれ、ちっぽけな恒星系の第三惑星に知的生物の存在を発見した。それは地球だった。そして彼が接触を試みた最初の生命体こそ、真純、竜介、美可の仲良しトリオだったのである。――《妖怪流刑宇宙》に続く奇想天外な痛快ＳＦ!!

絵■祐天寺三郎

ピンボケ宇宙戦争

塩谷隆志

ソノラマ文庫

SF

ピンボケ宇宙戦争

塩谷隆志

ソノラマ文庫

143

￥340

朝日ソノラマ

340円　　8193－726143－0049

塩谷隆志（しおや・たかし）
敗戦の混乱時に中学生活をおくり、朝鮮動乱勃発の年に高校生となる。その間、妖怪の研究をする一方、柔道・空手等の格闘技に熱中。大学は文学と無縁な学部に入りオートバイに明け暮れる。その後小説に手をそめて、種々の筆名でＳＦ、推理小説を発表し現在に至る。日本推理作家協会会員。ソノラマ文庫収録作品に**「エスパー・オートバイの冒険」「妖怪流刑宇宙」「エスパー・オートバイ苦戦す」**がある。

ピンボケ宇宙戦争

塩谷隆志

朝日ソノラマ

ピンボケ宇宙戦争

塩谷隆志

ソノラマ文庫

ピンボケ宇宙戦争

塩谷隆志

朝日ソノラマ

目次

第1章　謎の交霊会

「真純、わしは、また大変な研究テーマを見つけたのだ。ぜひ、つきあってくれ」
急に部屋のドアが開くと、興奮した声とともに祖父が入って来た。甲斐真純(かいますみ)は聴いていたステレオのスイッチを切ると、思わずしぶい顔になり、「やれやれ、もう、おじいさんのおつきあいはごめんだよ」と呟いたのだが、
「この研究の成果が上がれば、ひょっとすると、あの異次元の捜査官に、また、会えるかもしれんぞ」という祖父の次の言葉に見事にのせられ、調子良く答えたのである。
「そうか、おじいさん。ざしきぼっこを呼び出せるなら、よろこんで手伝いますよ」
彼は、古都・鎌倉にある鎌北学園中等科の三年生で、柔道部の主将をつとめる元気な少年であった。あだなは《柔道一直線》。変人の元昆虫学者である祖父・甲斐重吾(かいじゅうご)の手伝いをして、近次元の宇宙からこの日本にやって来た《ざしきぼっこ》、実は極秘捜査官と大活躍をした。だが、無事に任務を果たし、また遊びに来るといって母宇宙に帰った彼から、その後なにも連絡がなく、

いらいらしていたのだ。（『妖怪流刑宇宙』参照）

もう年も変わり、この春からは高等科に進むのに、《ざしきぼっこ》が気になって勉強に身が入らない。高校まで続いている学校だから受験の心配はなかったが、どうにも落ち着かない毎日を送っていた。

おまけに、一緒に異次元妖怪と闘った親友・陣馬竜介まで、「なあ、真純よ。おれ達、本当にあんな冒険したのかねえ？　集団幻想を味わったんじゃないか」など、もっともらしい顔でたずねる。さらに許せないことに、ガール・フレンドの木暮美可さえ、お得意の悲鳴で捜査官を助けたのも忘れ、「そうよ。ざしきぼっこもＣ調だわ。また、必ず来るって約束したくせに、どうしたのさ」と見当違いにも真純を責めるのだ。祖父の話に彼がとびついたのも当然だった。

「そうか、そうか。やはり、わしの孫じゃわい。前回もよく働いてくれたしのう。今度の研究は、なんと交霊会なのじゃ、真純――」

孫の顔に、ありありと不信の色が浮かんだのにも気づかず、

「……霊媒、これぐらいは、もう、お前も十分に理解しとるだろう。その優秀なのを、あの阿部さんが見つけてくれてな、明日の夜、初の交霊会出席と決めたのじゃ。

なんと、真純。霊界との交信を行うのだ。思えばあのざしきぼっこも、一種の霊体と考えられる。コンタクトできる可能性は大きいぞ。まあ、お前も明日の晩を楽しみにしなさい。

おお、そうじゃ。今月の小遣いをまだ渡しとらんかったな。これをとっときなさい。おとうさんには黙っとりなさい」

満足しきったニコニコ顔で続けると、祖父は五千円札を一枚、真純に渡したのである。

祖父が部屋を出て行った後、彼は、またステレオを鳴らし始めると、思わぬ収入にほくそ笑んでピン札を頭の上にかざした。

「前回は、冗談から駒という感じでとんだ冒険をしたけれど、そうそう、うまい話が続くかねえ。異次元世界というのと霊界とは違うと思うんだがな。だけど、万一、あの刑事さんを呼び出せたら、竜介にも美可にも、文字通りデカい顔ができるぞ。よし、また、おじいさんにつきあうのだ！」

真純は本棚に歩みよると、祖父から借りたまま、というよりは読むように押しつけられてほうりこんであった本を取り出した。こげ茶色のハード・カバーの古書は紙が黄ばみ、いまにも分解しそうであったが、祖父にいわせると心霊術に関する貴重な資料とのことである。背には、ハゲチョロケの金箔で『霊界の神秘』と書名が押してあった。勉強机に向かって座ると、もっともらしく表紙をながめる。

「そうか。今度は交霊会ねえ。おじいさんの道楽も、ついに来るところまで来た感じだね。ぼくは神だって信じないのだから、霊界なんかあると思わん。だが、他次元界と連絡がつくかもしれ

ないので、手伝うのだ。そう、神がかりではなく、あくまでも科学的、理性的にな」

まだぶつぶつ言っている。今まで霊の世界なんて馬鹿にしきっていたのに、急に態度を変えたので自分に弁解しているのだ。

「しかし、阿部さんて人も、実に物好きだねえ。会社のえらい人ってのは、やっぱり、ヒマなんだな。だけど、もう少しまともなことを思いつかないのかなあ」

だが、大枚五千円のてまえ、明日の夜は祖父のお供で交霊会とやらに行き、感心したふりをしなくてはならない。

バサン

祖父が見たら涙をこぼしそうな乱暴さで本を机にほうると、真純は手を首の後ろに組んでそっくりかえった。あまり勢いよく椅子を傾けたので、危うく倒れそうになり、あわてて机のはじにつかまる。神秘的な霊の世界をバカにしたので、早くもたたりが起こったのかもしれない。きちんと座り直した彼は、やっと本を開いた。

霊界からの通信記事や、心霊の写真——読むに従って真純の疑いは深くなったが、どんなインチキを見れるのかと、かえって霊媒に関する興味も増したのである。

「さあ、先生。お迎えに参りました。いよいよ今夜こそ私達は、未知な神秘の世界、そう、霊界

の住人に会えるのですぞ」

次の日の午後遅く、真純の家に自家用車を乗りつけた阿部重役は、重吾にオーバーな挨拶をした。おまけに、横にぼんやり立っている真純にまで、

「おや、これは、これは。真純君も一緒とは驚きました。やはり、血は争えませんな。出現される霊も、きっと、よろこばれるでしょう」

と、おあいそを言ったのだから、いくら世慣れた重役さんとはいえ、調子がいい。

三人を乗せたベンツは、すべるように東京に向かい、一時間たらずで都心の高層ビルに到着した。大きなガラス窓が夕陽に映えて光る、まことに近代的な建物である。

「えっ、ここで交霊会をやるんですか。驚いたなあ。ぼくは神社かお寺、そこまでいかなくても、古めかしい日本家屋が会場になると思ってたんですよ、阿部さん」

「ワッハッハッ。古い古い、真純君。今や交霊会も時代の先端を行くのだ。この近代的ビルの中で開かれてこそ、過去の陰気で迷信じみた感覚を離れた、コンテンポラリーなスピリチュアリズムのミーティングといえるのだ」

すっかり得意になった阿部重役は、真純にはさっぱり意味の判らない説明をすると、二人をビルの入り口へ案内した。重々しい厚く大きなガラスのドアがスーッと開いたので、真純は、一瞬、ギョッとした。早くも霊が働き始めたのかと思ったのだ。しかし、なんのことはない。ただの自

動ドアにすぎなかった。

ロビーに並ぶエレベーターの一つに乗ると、一気に二十二階まで上がった。真純は、またまた驚いたが、考えてみれば、高くなればそれだけ天国に近くなるのだ。〃霊が出やすくなるんだ、うん〃勝手な理屈をつけて納得する。この論法だと、地下で会を開けば、それだけ地獄に近くなるのだから、悪霊しか現れぬことになるが、そこまでは考えない。予想もしないモダンな場所を使うのに、ただただ感服している。

エレベーター内の数字が二十二の所で光って止まると、ドアが開き、厚いカーペットを敷きつめた廊下が続くのが見えた。三人は、その上をゆったりと歩いた。廊下の突き当たりに、これまたシックに黒く光るドアがあった。壁にあるブザーを阿部重役が軽く押すと、下にある網目のスピーカーから、もったいぶった声が応じた。

「どちら様でしょうか、このミディアム・センターにお越しとは？　霊界の神秘に、当センターが誇る大霊媒（ミディアム）・吉岡格二先生を通されて触れられたい、清いお心の方でしょうが」

「ハイ。今夕の交霊会に参加させて頂きたい旨、先般お願いした清い心の持ち主・阿部でございます。やはり、高貴な心霊のお姿に触れたいとのご希望を持たれる昆虫学の大家・甲斐先生をお連れして参りました」

〃ヘッ、阿部さんが清い心の持ち主だって〃思わずふき出しそうになったのを、真純は必死になって抑えた。

「これは、これは、よくぞお越しを。しばらくお待ち下さい」

返事が戻るのとほぼ同時に黒光りするドアはすぐに内側に開いた。これまた黒いダブルをぴったりと着た太った小男が、おあいそ笑いのつもりか目をほそめ、口をパクパクさせて三人を迎えた。テラテラと光った真ん丸な顔の中心で、チョビヒゲがいかがわしい感じに動く。素早く三人のみなりに視線を走らせる。〃なんだい、カッコつけちゃって。こうすぐドアが開くんじゃ、後ろにいたにきまってらあ。もったいぶってスピーカーなんか使う必要ないのに〃

小男を負けじとながめまわした真純は、このセンター主催の交霊会がインチキだという確信を持ったのだ。

「いや、どうも。今日は貴重なミーティングに参加させて頂きましたこと、まことに有り難く御礼申し上げます――」阿部重役は、むやみにへりくだった挨拶をすると「……こちらは蜉蝣目（ふゆうもく）の世界的権威・甲斐先生ですが、近年、民俗学にもご関心を持たれ、学術的見地から今夕の交霊会へご出席を希望なさった次第でして。そして、こちらの学生がお孫さんの……」

照れ切った真純は、その後を続けて、

「真純と申します。どうか、お手やわらかに」

まるで柔道の乱取りの前のような、馬鹿デカい声を出した。大声でも張り上げなくては、なんとも落ち着かない。だが、チョビヒゲは少しもあわてず、

「これは、これは、元気なお孫さんで。高校三年というところですかな。この若さで、こうした神秘の世界に関心を持たれるとはたのもしい。甲斐先生もお楽しみなことでしょう」

阿部重役も顔負けな調子良い応対をしたので、真純は鼻白んで黙りこんだ。

「いや、阿部さんから貴会のことをしばしばうかがっており、私も、是非、交霊会なるものに出席したいと望んでいたのですが、いや、今夜が楽しみですわい」

おまけに重吾まで調子を合わすので、真純は、すっかりめげてしまった。さすがの祖父も、他次元から来た極秘捜査官を助けて子供達と活躍したことなど、阿部重役に話してはいなかった。誰にも絶対に信じてもらえず、とくに銀行支店次長で常識の見本である息子に意見されるのが落ちぐらいなことは判っていたのだ。

小男は、ますます、いかがわしい笑顔になり、

「では、立ち話もなんですから、こちらにどうぞ。まだ、他の会員の方は一人もお見えではありませんが」

こういいながら、三人を奥の部屋に案内した。

大きくきれいな部屋であった。間接照明が柔らかくモダンな家具を照らし、ベージュ色の壁に

はたくさんのパネルが掛けてある。すべて、このセンターの交霊会の時に撮った心霊写真なのだ。

部屋の中央にある大きな、まがいものの大理石のテーブルを囲んで置かれた、本皮そっくりに見えるビニール・チェアに三人は座った。

〃さすが、コンテンポラリーなスピリチュアリズムのミーティング場だけのことはある〃

部屋の様子に驚いた真純が、相変わらず意味不明であったが、阿部重役のセリフを思い出して感心している間に、小男は部屋の隅のシェルフから、ポケット電卓を持って来た。

「では、当センターの規約に従いまして、まず、ミーティング参加費を頂戴致したく存じます。大霊媒(ミディアム)・吉岡先生のご体調、参加なさる方々のご誠意、それに、もちろん、出席者の人数も加味して算出されますので、多少、複雑な計算になりますが――」

こう弁解しながら、まるまっちい指でしばらく電卓をピーピー鳴らすと、

「ご三人で、十三万五千円頂戴致します。ああ、お孫さんの分は、学割ということで五十パーセント割引きのサービスになっております」

ひどくインチキめいた口調で言った。どうにも、ガセネタ売りの香具師(やし)という感じである。

〃なにが学割だい。十三万五千円だって! あまりとはいえ、暴利だぞ。チョンボの親だ〃

こうした真純の思いにかまわず、阿部重役は、背広の内ポケットから、しごく当然といった顔で小切手帳を取り出した。どうやら、この会費の件について前もって知らされていたらしい。少

しもあわてた様子はなかったが、今度は祖父が狼狽した。

「待って下さい、阿部さん。ご紹介までは願ったが、会費も出して頂いたのでは、私の立つ瀬がない。孫と私の分は」

といいかけたのに、阿部重役は、

「まあ、まあ、先生。お気を楽になさって。私が強引におさそいしたのですから、参加費は出させて下さい。なーに、社の接待費でおとしますから、私としてもやりやすいのです。

それに、この会の規約で最初の時は、ここで参加費を払いませんと、ミーティングに出席できないのですから」

と、公私混同の妙な説明をした。あいにく現金の持ちあわせがない祖父は、その言に従わざるをえなかったが、「では、後日、きっとお返し致します」と念を押したのである。

「横線は引きませんよ」阿部重役は、またまた真純には訳の判らぬことをいうと、言われただけの数字をさらさらと小切手に書き、サインをして小男に渡した。

「いや、どうも、どうも。お会いした途端に参加費をとは失礼と思いましたが、私どもの真面目なミーティングをインチキ呼ばわりして、ヒヤカシ、いや、ひどいのになると妨害に来る者がおりましてな。それで、最初の方からは前金を頂き、真意を確かめるのが、当センターの基本方針でして。たとえ、相手がどなたであっても、この規則は曲げられませんので、お気を悪くなさらず——。いえ、次回からは、こんなご無礼は致しません。月会費の形で頂きます」

今度は、正真正銘、インチキ・モグリ賭博場のマネジャーそっくりの口ぶりになったので、真純の不信感はいやがうえにも増したのであるが、大人達二人は、逆に感心したようにうなずいていた。

「では、他の方がお見えになるまで、お待ち下さい。皆さんがおそろいになりましたら、軽いご夕食などでくつろいで頂き、その後で吉岡先生の交霊会を始めたく存じます」

〝夕飯つきか。じゃ、少し考え方を変えるかな〟と、真純が現金な感想をいだいた時、

ビー、ビー

ブザーが鳴った。小男はいそいでドアに駆けよると、横に開いている網目をはったあなに向かい、

「どちら様でしょうか。このミディアム・センターに……」

と真純達に言ったのと同じセリフをくり返し始めた。客の声が続く。

〝なーんだ。スピーカーじゃなくて、ただの通話口だったのかい。これじゃ、すぐにドアが開くわけだ〟

コンテンポラリーにしてはいい加減なのに真純はあきれたが、小男はおかまいなしにドアを開けると、次の客を招き入れた。ヒョロヒョロと痩せたやや猫背のうえに、ゴルフ焼けにしては不

健康な茶色の顔をのせた男が入って来た。まるで、インディアンのミイラみたいな感じがする。

小男はミイラマンを真純達の所に連れてくると、「こちらは当センター名誉会長の小松様です。このご三方は……」と紹介をした。電卓を持って来ない所をみると、本当に名誉会長で入場無料なのだろう。

小松は三人にあごをしゃくって挨拶すると、隅にあるソファに座りこんで新聞を読み始めた。あいその悪い男だ。

小一時間もすると四十人ほどの人が集まり、さすが広びろとした部屋も、人いきれで息苦しい感じになった。皆、ひまをもてあましてむやみに煙草をふかすので、部屋には白い煙がこめ、小松の姿が茶色のしみのようにかすむほどであった。

真純はその間、壁を飾っているパネルの写真に見入った。いずれも変テコな代物ばかりである。暗闇の中に白く人影が浮いているのが多かったが、阿部重役の説明によると、吉岡霊媒の力でミーティングに出現したスピリットを赤外線カメラで撮った、いわゆる心霊写真とのことである。写真には、ちっとも驚かない真純が、

「それにしても、世の中にはヒマ人が多いね。腹はへってくるし退屈だし、そろそろメシにしてくれないかな」

と、ぼやき始めた時、タイミング良く、それまで姿を消していた小男が現れると、言った。

「それでは、隣室に軽い食事を用意致しましたので、どうぞ、こちらへ」

入り口と反対側のドアが両側に開くと隣室は食堂になっており、テーブルには山海の珍味が並んでいた――といいたいのだが、真純のがっかりしたことには、サンドイッチの大皿が二十枚ほど置かれ、ジュース入りのグラスが並んでいるという、まことに貧弱な立食形式だったのである。

〝なるほど軽いや、軽過ぎる食事だよ〟食物の恨みは怖い。彼は、このセンターに対する不信感をさらに強くした。

ものの十分としないうちに、サンドイッチもジュースも、全部、消えてしまった。小男は、如才なく言った。

「吉岡先生は今夜の交霊会にそなえ、ずっと深い瞑想にふけっておられました。おかげ様で体調もよく、きっと皆様のご期待に応える中身の濃い有意義なミーティングを持つことができましょう。

これも、当センターの趣旨を信じられて、かくも熱心にお集まり下さった皆様のお力によるものと感謝申しあげます」

どうやらこの男は、如才なさであらゆる物質面での不足分を、カバーするつもりらしい。やはり、スピリチュアリズムの使徒である。

真っ暗闇の室内には、古めかしいバイオリンの調べが流れていた。霊媒吉岡がトランスという一種の失神状態におち、霊を呼び出すにふさわしいムードを創るため、こうしたメロディーの助けがいるのだそうだ。

しかも気分を盛り上げるためと称し、なんと骨董モノのSPを手回し蓄音機でかけたのだから、真純は驚いた。なにせ、レコード、カセット、FM放送――すべてがステレオ世代の子なのだ。ロックマニアの美可の影響で、最近になって聴き始めたジャズだって、モノのLPは珍しい。それが、七十八回転のシェラック盤なのだ。見るのは初めてだし、いまどきの再生装置にこんな回転はついてないのだから、たとえ持っていても聴くことはできない。

〝なんだか、コンテンポラリーなモットーと反するね〟

いくら真純でも、この言葉が《現代の》という意味であることは知っている。ただ、阿部重役の話がとっぴすぎたので、ピンと来なかったのだ。〝どうせやるなら、四元立体音でもやりゃいいのに〟と思っていると、音楽はやんだ。

SP片面一曲は三分ちょっとだから、霊媒はこの時間でトランスに入り、霊とコンタクトできるようになるのだ。まるで、『お湯をそそいでさっと三分、これでおいしい出来上がり』のカップ・ヌードルなみの手軽さである。コンテンポラリーだったり古めかしかったり、重々しかったり安直だったり、どうにもチグハグな感をまぬがれない。

真純は、会が始まる前に見た吉岡霊媒の顔を闇の中で思い浮かべた。彼のマネジャーであるチョビヒゲの小男とは対照的に、ギクシャクと骨ばった身体つきをし、顴骨が高く出張った下に、こけた頬が気味悪いほど蒼白かった。いつも暗闇の中で仕事をしているからに違いない。両端が吊り上がった眼鏡をかけ、その奥で金壺眼が落ち着かなく泳いでいた。これまたスピリットとコンタクトをするには、まったくふさわしくないフィーリングの持ち主である。

マネジャーの説明によると、心霊は吉岡の身体からエクトプラズムとかいう霊素を抽出し、それを物質化して姿を現したりするそうだ。また暗い中でも見えるように夜光塗料をぬってある実験物を動かしたり、宙に発声器官を創り上げて話しかけたりもする。

交霊会には、三十平方メートルぐらいの洋間が使われた。部屋の片隅に一メートル四方ぐらいの黒布が天井から吊るされている。

「初めての方もおられますのでご説明申し上げますが、この黒布の四角いかこみをキャビネットといいます。吉岡先生は中にある椅子に座られ、さらに俗世界との縁を断ってトランスに入られるのです」

マネジャーが説明を始めた。

「そうして種々の神秘現象を起こして頂くのですが、会の最中には絶対に明かりをつけぬよう、また、実験物が寄って来ても手で触れぬよう、固くお断り申し上げます」

まるで珍奇な生きものを展示する動物園のガイドめいた調子で続ける。
「と申しますのは、もし光が当たったり人体に触れたりしますと、エクトプラズムは損傷し、抽出源である吉岡先生のお身体に重大な支障をきたします。場合によっては先生の死を招く恐れもありますので、以上のご注意、特に初めての方に申し上げますが、十分に守って下さい」
これでは霊媒というのは、やっと生きている天然記念物の動物みたいである。それから丈夫そうなロープと大きなマスクをキャビネットの中から取り出し、祖父と阿部を招くと、にこやかな顔つきで頼んだ。
「最初の方は、とかく疑いの念が深く、心霊のお働きを信じようとなさらない。先生は、もう中の椅子に腰かけておられますから、このロープで動けないように、固定なさって下さい。そして、口にこのマスクをお当て下さい。そうすれば、これから起こる不思議な現象や、頂く有り難いお言葉が先生によるものでないことが、ご納得頂けましょう」
せま苦しいキャビネット内の椅子に、もうきちんと座っている吉岡を、祖父と重役は苦労してしばりあげ、口にきっちりとマスクをかけたのである。
その後、黒布が閉じられ、霊媒はキャビネットの中に隠れた。天井の電灯が消え、代わりに部屋の隅で豆ランプが赤く光り始めた。マネジャーのぷっくりした指先がその赤さに染まって動くと、手回し蓄音機がスクラッチの強いバイオリンの音を響かせ、交霊会が始まったのだ。

ともすれば眠りこみそうになるのを懸命にがまんしていた真純は、この時、ドキリとした。夜光塗料のおかげで冷たい感じに白く光る紙製のメガホンが、キャビネットの前にあるテーブルの上から、急に舞い上がったのだ。
〝いよいよ、心霊のご出現かよ！〟
彼がこう思った時、
「おおー、うおー、おお、うおおおー」
食用蛙がうなされて出すような音が、メガホンの先からもれ始めた。インチキだと考えてはいたものの、その場のムードで妙な気になっていた真純は、つい、「ウェッ」と叫んでしまった。
「お静かに。いよいよスピリットが吉岡先生のお招きに応え、この場に現れましたぞ」
マネジャーに注意されて、彼は、あわてて口を抑えた。だが、一度、狂わした気持ちは、元に戻らなかった。ざしきぼっこ事件だって、ウソとしか思えないのに本当に起こった。今度も、ひょっとすると実際に心霊が現れ――と思い、やたらと厳粛な気持ちになったのである。
「みーな、よーく来た。わしは、インドの聖者ガーナの霊である。ニホンにも熱心な信者がおり、わしは幸せだ。なやみごとあらば相談せよ」変なふくみ声が続いた。
「さあ、皆様、またガーナ聖人がご出現になりました。そうそう、今日、初めての方にご説明致しますと、この方は紀元前三世紀のインドの大行者ガーナ様で、吉岡先生の招霊にいつもお応え

下さる格の高いスピリットなのです。いや、有り難いことです。

不肖(ふしょう)、私めが間に入り会員の方のおなやみ、ご質問、いや、そればかりではなく、亡くなられた方とお会いしたければ、そのみたまをお呼びする労までとらせて頂きます——」

マネジャーが、テレビのなんとかショーの司会者みたいにきどった声を立てた。

「……では、最初に今日初めてこの会にご出席の甲斐先生から、ガーナ聖人になにかおたずね願うと致しますか」

突然の指名に祖父はびっくりした。ほんのオブザーバーのつもりでいたのに、いきなり発言を求められるとは予想もしなかった。しかし、蜉蝣目の世界的権威なのだ。あまり、モタモタしてはいられない。といって、くだらないことを口走ってインドの聖者に笑われたら、日本の学界の恥でもある。

「さようですなあ。私としましてはインド哲学の奥義などについてうかがいたいのですが、なにせ、初めてのことでありますし、もっと一般的な問題の方がよろしいと考える次第で、ここはひとつ、私をこの場に御案内下さった阿部さんにおまかせしましょう」

さすがは大学者。少しもあわてず阿部重役にバトン・タッチした。今度は彼が狼狽する番である。日本の実業界の恥、などと気負いはしなかったが、何も聞くことが思いつかない。日頃の如才のなさもどこへやら、

「えー、うー、あのー、そう、そう。インドの方が、どうしてそのように巧みな日本語をば話されるのでありますか?」

実にくだらない質問をしてしまった。真っ暗な会場内に、クスクス笑いが起きる。だが、インドの元聖者は真面目であった。ふくみ声が、すぐに答えた。

「なに、やさしいことである。この優秀な吉岡霊媒(ミディアム)の能力を使えば、日本語は母国語と同じように話せる。彼の全知識を、わしは利用できるのだからな」

感心した阿部重役が「はあ、これは失礼を致しました」といって黙った後、待ちかねていたように質問が続いた。

『今年度の日本経済の見通しについて』といった高度なものから、『今度の巨人・阪神戦はどちらが勝つか』など次元の低いものまでいろいろである。

ガーナはすべての問いに、メガホンの奥に吉岡のエクトプラズムで創った口を使い、要領よく答えた。だが、聞いている真純は次第に馬鹿らしくなって来た。実験の初めに感じた妙な気も失うと、変にしらけてしまったのである。なにせ、こんな調子の答えが続いたのだから——

『日本経済の動きは政府の方針により左右されるので、見通しにつき知りたければ、政治をよく研究せよ』

ぐらいなら、まだ許せたが、要領がよすぎて結局なんだか判らない答えが続いた後で、

『巨人・阪神戦の勝敗だな。勝つと思うな、思わば負けよ。つまり、勝ったと思った方が試合の本質においては負けているのである。この理をつきつめれば、いずれが勝ちを得たといえるか、判るであろう』

というふくみ声を聞いた時には、がまんできなくなった。おまけに質問をしているいい大人連中が、皆、ふかく感心したように礼をいうので、余計、面白くなかったのである。

〃あんないい加減な答えならば、ぼくだってできらあ。これで十三万五千円は、やはり、暴利だ。ガセネタのインチキだ〃

興奮すると「ガーナ聖人、質問！」まるで教室で出すような叫び声を発した。インドの行者も一瞬ひるんだらしく、メガホンの夜光塗料が白く流れたが、すぐおさまるとふくみ声に重味をつけて応じた。

「おー、なにごとかね。どうやら君は、まだ少年のようだが、受験の悩みかな。試験などは時の運。合格すると思うな、思わば落第よ。この気持ちを忘れず努力することだ」

あまりにもひどい返事に、ますますほてった真純は、いっそう大声になった。

「ぼくの聞きたいのは、そんなことではありません。もっと高度なもの、つまり、他次元世界に関する難問なのです」

「しっ、もっとお静かに。そんな大声を出されるとエクトプラズムに傷がつき、吉岡先生の扁桃(へんとう)

腺(せん)が腫(は)れます」

相変わらず霊素にこだわって注意するマネジャーにかまわず、

「つまり、ざしきぼっこはどうなったのか教えてもらいたいのです。インドの大聖者だったそうですから、すぐお判りでしょう」

会場の人には、それこそ訳の判らないことを訊いたので、あわてた祖父は孫の口をふさごうとしたが、真っ暗闇の中である。間違って阿部重役の鼻を抑えてしまった。

「ギャーッ！　ガーナ聖人。このおろかな質問をしたのは私ではありません。この霊手をお離し下さい」

エクトプラズム製の手につかまったと思った重役はつぶれた叫びを上げ、会場内は騒然としたが、

フッ、フッ、フッ、フッ、フッ

というガーナ聖人のふくみ笑いが続き、やっと静けさが戻った。

「なにを聞くかと思えば、そんなおろかなことか。その件ならわしはよく知っておる」

余裕たっぷり自信に満ちた声に、真純は逆に仰天した。まさかインチキそのものとしか思えない自称霊媒が、他次元の極秘捜査官について知るはずがない、ここでボロを出すだろうと確信していたのに。

だが、続いてメガホンから流れ出た言葉に、彼はホッとすると同時に腹を立てた。いまや吉岡が縄抜けをしマスクをはずしてしゃべっているとしか思えぬ声は、すまして、

「あの土俗的な化けものはだな、確かに江戸時代には東北地方におったのだ。霊界とは関係ない、いたずらな子供だったわい」

と言ったのである。いくらデタラメとはいえ、あれだけ気の合った《ざしきぼっこ》を、こうボロクソにいわれては黙っていられない。

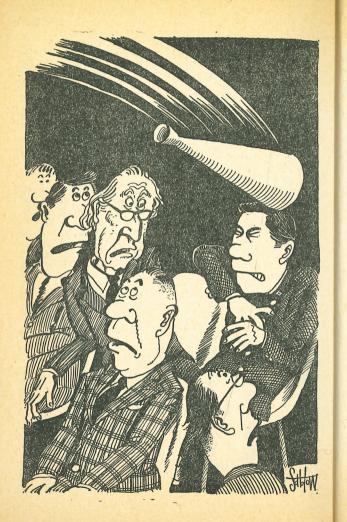
「冗談じゃないすよ。いたずらな土俗的な子供のお化けですって！　冗談にしてもきつすぎますね。ガーナ聖人、あなた本当に……」

この瞬間に、いきなりメガホンは高く舞い上がると、突如、真純の頭に撃ち下ろされていた。見事な《お面、一本》であった。分厚いボール紙製の、しかもかなり大きくて長い代物だ。

イテッテテ

彼は思わず頭をかかえてうずくまった。やや冷静になると、じっくり相手の出方を見てから反撃しようと、素早く計算したのだ。

「ここな無礼者め！　わしをなんと心得る。インドの聖者、ガーナ様を侮辱して、ただですむと思うか。深く反省せよ」

真純が急におとなしくなったので、メガホンは誇らしげに叫び始めた。

「甲斐先生のお孫さんですか。弱りますなあ。せっかくの神秘なムードをこわされては」
マネジャーが、また、文句をつけたが、真純は黙って言わせておいた。そのうち、必ず吉岡の化けの皮をはいでやる。なーに、今に見てろよ——
「よろしい、反省の気持ちが感じられるわい。では、答えを続けるとしよう。どこまで説明したかな。おおそうか。ざしきぼっこというのは、いたずら好きな子供の化けものという所まであったな。
このわるさに困り果てた当時の者達は、僧侶に頼んでお祈りをしたり、神官に願ってお祓いを行ったりしたが、どうしても、この化けものを退治することはできなかった。
東北地方の農民が弱り果てている所に通りあわせたのが、全国武者修行の侍……」
だんだんと話がおかしくなって行く。
「……地元民の訴えを聞くと、よっしゃ、まかせと胸を叩き、ざしきぼっこが出現する古屋敷の奥の間に立てこもる」
こりゃ、まるで安手の時代物映画だ。メガホンでマネジャーの頭に切りつければ効果満点なのだが、そこまでの悪乗りはせず、いっそうピッチを上げて続けた。
「草木も眠る丑三つ時、家の棟三寸も下がろうという頃、部屋の外の廊下をなにものかが歩く、サッサッという軽い音が近づく。すわ！　と構えた侍の前に、ふすまも開かぬのにすっと入って

来たのは、年の頃は七、八歳の白い着物の男の子。おのれ妖怪と手練の抜き打ちをあびせたが、こはいかなることか、まともに刃を受けた怪童はビクともせず、したたかに柱に切り込んだ侍をあざ笑うとすっと消えた」
ここまで聞いた真純は、霊媒吉岡の前身は三流映画俳優、それも時代劇専門だったに違いないと確信した。その昔、柔道映画と二本立てで見たチャンバラものの侍と、話しかたがそっくりなのである。今や映画は、完全にテレビに食われた斜陽産業だ。この男はそのテレビからも声がかからず、仕事に困って演技力を生かし、霊媒稼業を始めたのだ。縄抜けなど、タレント仲間に教わることができる。
こう判れば作戦も立つぞ——
その間にも、吉岡の講釈は延々と続いていた。「ここにいたり、おのれが剣の力に疑問をいだいた件の侍、じっとことの成り行きを考えるや、はたとひざを叩いた。相手は妖怪だ！
妖しのものに対するには、やはり妖しの刃でなくてはならぬ。我が用いしは剛剣とはいえ虎徹である。おお、そうよ。妖しの剣といえば、あの村正。徳川家に代々たたりをなしたという妖刀・村正を用いてこそ、化けものを討ち果たすことができる……」
真純の隣で、祖父があきらめきった嘆息をもらした。これじゃ、いくら妖怪大博士でも涙なしには聞いていられない。インドの行者から、日本刀の講釈をぶたれるとは思わなかった。それに

したって虎徹も新選組隊長、近藤勇が、さんざん勤王の志士を殺した人切り包丁である。妖怪退治には、ピッタリだろうに――こんな嘆息に気づかず、ガーナ聖者こと吉岡は、

「こう悟るや、翌朝早く江戸表にたち戻った侍は、そこは名だたる武芸者のこと、十分にコネを生かして、さる神社に奉納されていた村正一振り借り受けるや現地にはせ帰り、例の屋敷につめきりとなると、妖怪再度の出現を待ったのであった」

この辺から、すっかり地を現した吉岡は、自分の名調子にすっかり酔ってしまった。あのメガホンの夜光塗料が、またもや暗闇の中でひくつき始めた。真純は、そっと身構えた。

「待つや遅しと行燈の光を見つめる侍の耳に、またしても聞こえるのは、サッサッと廊下をすべる軽い足音。刀の鯉口を切った面前にざしきぼっこが現れたから、なんじょうたまろう。『妖しの一剣、受けて見よ――』」

ここで、あまりにも話に感情移入しすぎたのが、吉岡の運のつきであった。ついつい、えいやっとばかり、真純の頭上にまたもやメガホンを撃ち下ろしてしまったのだ。先刻も叩いているから、位置の見当はつく。

しかし今度は、真純も油断していなかった。メガホンを左に流すと、反射的にその後方に手を伸ばす。明らかに人間のらしいやせてゴツゴツ骨ばった手首をしっかり握っていた。

次の瞬間真純は、《柔道一直線》の名に恥じぬ動きを見せた。左ひざを床につき、右脚を延ばすと背負落としくずれの体落としをかけていた。

あとの会場は、どうしようもない混乱におちいった。とにかく真っ暗では仕方がないのだが、投げ飛ばされたインチキ霊媒には幸いした。

やっと天井の電灯がついた時、会場は乱れに乱れ、マネジャー、吉岡、そして小松の姿まで消えていた。これには、阿部重役も恐縮しきったのであった。

数日経って、真純が同ビルを訪ねた時には、ミディアム・センターはどこかに引っ越した後であった。

このお粗末きわまりない交霊会騒動について、もちろん真純は竜介と美可に意見を求めた。だが、今度は科学的な他次元世界の話ではなく、インチキもいいところである。当分、異次元生物とのコンタクトを諦めた三人は、期末試験が終わると、中学と高校の間の休みをのんびりと楽しむことにした。神秘現象とも縁を切り、新高校生にふさわしい、もっと明るい生活を送ることにしたのだ。その気になれば、古都鎌倉の春である。楽しいことはいっぱいあるのだ。

暖かい陽を浴びてぶらついている途中、鎌倉・小町通りのレコード屋に入った真純は、思いもよらず美可が、ジャズのレコードをあさっているのを見て驚いた。

「おい、ミカロン。確か君はロック専門で、《ガキのキャッキャッキャッ》だったのに、こりゃ

どうしたんだい。それも、ブルースじゃないか。ぼくが君の影響でジャズを聴き始めたら、今度は本家本元の君がブルースとはね」

「そうなの、甲斐君。私、あなたのレコードを聴いているうちに、やはり、いまどきのロックは底が浅いということに気がついたのよ。結局、ロックの原型はニグロ・スピリチュアルでしょう。そうなると、やはりブルースよ。なかなか味があるわ」

感心しきった真純は言った。

「ふーん。やはりミカロンはなみの女の子とは違うな。おたがいに黒人ジャズを楽しもうぜ。これで竜介が、ラブロマンス・テーマをやめればいいのだがね」

しかし竜介は、意地になって心温まる愛のメロディーにしがみついている気配だった。

そんなある日、三人は鶴岡八幡にある博物館で特別に開かれた日本名刀剣展を観に行った。誰一人、刀なんて代物に興味は持っていなかったのだが、真純の頭の中に、例のインチキ交霊会で聞かされた妖刀村正のことが深くしみついていたのである。あの会の話は、ほとんどでたらめであったが、その後調べたところによると、村正に関するかぎりは真実だったのだ。

地味な企画のうえに平日のため、他に観客はいなかった。三人は何をおいても、まずは、魔剣村正にながめ入ったのである。

かの正宗を陽の剣、正義の刃と評すなら、村正は陰の剣、邪悪の刃といえた。吉岡がいった通り、代々、徳川家にたたりをもたらし、ひとたび抜けば、血を見ぬかぎりさやに収まらぬといわれ、また、それだけ不気味な光を放っていたのである。

見る者の精気を吸い取るような刀身をながめているうちに、真純は妙に背筋が寒くなるのを感じた。ざしきぼっこがこの刀で切られたというのは、吉岡のまったくのデマカセであったが、なみの刀剣にはない妖気を発しているのが感じられたのだ。

ノンビリムードの竜介は、なにも感じなかったらしいが、割合デリケートな美可は、真純同様、村正を見た瞬間、体がゾクッとするのを覚えた。背筋に冷気が走る。

他に人影のない薄暗い会場内には、無数の日本刀が、銀色を帯びた金属的な光を並べている。かなり不気味になった三人は、いそいで出口に向かったが、そこで意外な人物に会った。

なんと、あのイカサマ霊媒、吉岡だったのである。例の大失態の後、姿をくらましたが、生活費稼ぎにまた昔の仕事に戻ったのだ。彼は真純が予想した通り、三流のチャンバラ俳優だった。いつぞやの背広姿はどこへやら、乱髪にかなり日焼けして疲れの見える和服を着て、ふところ手でぶらりと入って来たのだ。

「あっ、君はあの時の乱暴な少年」

眼鏡の奥で金壺眼をぎらつかせた吉岡は、一瞬、怒りの表情を現したが、すぐに消すと言った。

「やはり、あの時、わしがいった村正が気になったのかね。そりゃ、ざしきぼっこについちゃ、でたらめをいったが、事の成り行き上、生活がかかってるんで仕方ないんだ。あの席でつまらん質問をした君の方が悪いよ。おかげでおれは霊媒失業さ。また俳優に戻って、新しい役をやる計画なんだ。

しかし、映画では食えんからな。そこで、あの時にでっちあげた『ざしきぼっこ対妖刀村正』という話をレパートリーにしてテレビ局に売り込むつもりなのさ。そしたら、ここで刀剣展をやってると聞いたんで、参考のため、見に来たのだ」

ついで、美可と竜介に向かうと、

「君達はこの少年、甲斐君といったかな――の友人かね。変わった仲間を持ってるね。お嬢さんまで一緒とは、最近の高校生はうらやましいな」

まだ、甲斐を高校生と思っているらしく、ちょっとひがんだ眼で彼を見ると、

「どーら、ここの説明文だけでは、村正の妖刀ぶりは十分に判るまい。これも何かの縁だ。よく話してやろう。こちらも、役がらを煮つめるのに役立つからな」

こう言うと、気の進まない三人を鶴岡八幡境内のお茶屋にさそい、うんざりするほどたっぷり、村正やその他の日本刀に関する怪異談を聞かせたのである。おかげで美可はすっかり気分が悪くなり、気張ってたくさんとったオデンをほとんど残してしまった。

子供達三人を完全に打ちのめし、多少は交霊会での恨みを晴らして満足した吉岡は、端の吊り上がった眼鏡の奥で金壺眼を光らすと、勘定も払わず姿を消してしまった。やはりいい加減な男である。

「ああ、参った、参った。こんな所で奴に会うとは」

真純はうんざりした声を上げた。

「あれが、例のインチキ霊媒（ミディアム）かい。あの眼の光り具合、どう見てもまっとうじゃないぜ。ちょっと、おかしいのと違うかなあ」

竜介が相変わらずのんびりと言った。

「でも、村正って日本刀、本当に不気味だわ。ざしきぼっこさんなら、たとえ他次元の生物でも正義の味方でしょう。しかし、この妖刀は私達の国の製品で、しかも、訳の判らないたたりをするっていうじゃない。この方が、ずっと怖いわ」

美可の結論に、ボーイ・フレンド二名も同意した。

三人は気分を変えるつもりで、小町通りをブラブラと歩き始めた。ここ一年で、気のきいたブティックやアクセサリー・ショップ、変わった土産物を売る店が増えている。元気そうな若者達が楽しそうに歩きまわっており、そのせいか、彼等も村正の妖気を忘れることができた。

「あれ、ちょっと、面白いじゃない」
ショーウインドーをながめていた美可の声にB・F(ボーイ・フレンド)二人は、いそいで頭を寄せあう。ゴツンと頭をぶつけたのにもかまわず、彼女の指さす方をのぞく。新しいアイデア商品だろうか、超小型で、ちょうどサイフのアクセサリーになるメタル・ピストルがたくさん可愛らしげに並んでいた。銃把(グリップ)の端からチェーンが伸び、キー・ホルダーに使えるようにもなっている。
「ねえ、日本刀よりかは、やはり、ピストルの方が強いんでしょう」
美可は妙なことを言った。目は相変わらず、ミニミニ・ピストルを見つめている。
「まあね。なんたって飛び道具だからな。離れて闘えば、まず、負けんだろう。第一、あの鞍馬天狗だって、いよいよって時には短銃(たんづつ)を使ったじゃないか」
真純が答えた。
「よかった。私、これ一つもらおうっと！ あの村正の話、変に本当らしくて気味悪いでしょう。やはり、たたりがある気がするのよ。私、一つ買って、おまもりに定期入れにつけようと思うの。それに、変わったアクセサリーになるじゃない？」
「うん。鰯(いわし)の頭も信心から——というしね。それで気がすむなら買ったらよかろう。いろいろあるから、中に入って見てみようや」
店内に入った三人は、あまりにも多種類のモデルがあるので驚いた。ピストルなんて、警官の

武骨(ぶこつ)なのや、西部劇のむやみに銃身の長い旧式なもの、スパイアクションのポケットタイプ——ぐらいしか知らなかったのだ。それが、なんと、コルト、ワルサー、S&W、ブローニング、ルガーと、びっくりするほどの名前があり、しかもそれぞれに自動式だとか回転式、おまけにどこが違うのかワン・タイプに何種類ものバリエーションがあるのだ。真純と竜介がキョロキョロしていると、
「ねえ、これ見て。可愛らしいでしょう。私、これに決めたわ」
美可が早くもモデルを決めたらしく、二人の背中に声をかけた。ふりかえった目の前に彼女は右手をさし出し、指で金色の変わった形のピストルをつまんで見せた。
「変な格好」つい竜介が言ったのに、美可はちょっと気を悪くしたらしい。
「変じゃなくて、ユニークと言ってよ。これ、昔、女の人が護身用に使ったピストルよ。私みたいなレディーのアクセサリーにぴったりじゃない」と口をとがらした。
彼女の選んだのは、デリンジャー拳銃のモデルであった。まるまっちいグリップに、短い上下二連の銃身がついた、いかにもあいきょうのある形をしている。
「ふーん。レミントン・ダブル・デリンジャーねえ」
売り場まで行き説明文を読んだ竜介は、変に感心した声を上げた。
「なるほど、もともとが超小型のピストルなんだね。なに『銃身が短いので命中率が悪く、護身

用に使われた』だって。なるほど、こりゃ、ミカロンにピッタシだぜ」
続いて、真純がミニチュアをいじりながら、
「なんだって。婦人がガーターにはさんで使用したことも多い、か。だけど、今はパンストの時代だから駄目だね」
くだらない発言をしたので美可は赤くなった。
B・F二人もおつきあいでミニチュア・ピストルを買うことにした。G・F（ガール・フレンド）が夢中になっているので調子を合わせて、点を稼ごうと思ったのである。真純がコルト・オートマチックとS&WM59という、きわめて近代的でスマートなモデルを買って支払いをすませたのに、竜介は、まだ、ガサガサと売り場をかきまわしている。あげくの果てに、西部の保安官やFBIが持つようなゴツいのばかり五点も買ったので、真純と美可はあきれた。彼としては、ライバル真純に差をつけたつもりなのだ。
「これ持ってれば、村正のたたりなんて怖くないわね」
美可にしては珍しく、妖刀にこだわったことを言うと、三人は店を出た。よほど、あの不気味な白刃が印象に残ったらしい。三人は近所のコーヒー店に入ると、買ったばかりのミニチュア・ピストルをひろげ、おしゃべりを楽しんだのであった。もっとも、全員、拳銃についての知識はなかったから、つい、あの交霊会の話になったのだったが――。

第2章　機械軍団VS精神体

グォーッ
巨大なテレスクリーンに、小型戦闘艇の群れが銀色に散開した。エイのひれに似た形で側面にはり出した翼に並ぶレーザー・ガンは、驚異的な力を持っている。乗員は二名だが、ワープ航法もできる高性能機であった。敵軍最後の切り札だ――
次の瞬間、銃口からいっせいに蒼白い閃光がほとばしる。だが、この宇宙艇を厳重に囲んだバリヤーにさえぎられ、暗い宇宙空間に吸われ、空しく消えていった。
「ふん、バカどもが！　あんな、おもちゃみたいな小型機でわがゴラム機械軍団に反撃するとは。みな、宇宙の塵（ちり）にしてやる」
二メートルをはるかに越す長身も、広い肩幅のためにさほど目立たぬたくましいロボットは、軽蔑した調子で言った。続いてメタリック・シルバーに輝く右手を、テレスクリーンの下に広がる金色のパネルに乗せる。心地良い手応えを味わいながら、彼は敵戦闘艇が全機、ふっと消える

のを見つめた。

ゴラム機械軍が誇る特殊兵器が、見事な戦果をあげたのである。ワープ航法を行う時には、空間を四次元的に折り曲げて目的地に飛び移る。この原理を使って敵周辺の空間をゆがませ、相手を宇宙のかなた、いずことも判らぬ果てに転移させてしまう、画期的な武器であった。

「グフフフフ、やったぞ。これで、もう敵はまったく無防備だ。では、いよいよ全滅させてやるか、グフフフ」

右手が、パネルをさっとなでた。テレスクリーンが灰色に変わる。亜空間に入ったのだ。今度は、彼の宇宙艇がワープを開始した。今、敵戦闘隊のまわりの空間をゆがませた力の反動を利用した、無駄のない作戦であった。しかし、すぐスクリーンは明るくなり、紫色に輝く巨大なスペース母艦の姿が、暗黒の宇宙空間をバックに、くっきり浮かんだ。わずかのワープを行っただけで、逃走を続ける敵主力に追いついたのである。

「グフフ、ついにベスパ星の虫ケラどもに、最後の時が来たか。たかが蜂の進化した生物にすぎないのに、生意気にも文明などをつくりおるから、われわれにほろぼされる羽目になるのだ。

それに、おとなしく母星で戦っておればいいのに、小癪にも宇宙艇などで逃亡をはかりおるから、こんな星雲のすみでみじめな宇宙塵と化すことになる。あわれな奴らよ」

「では閣下。今こそ、とどめの一撃を――」

横から、へつらった声がかかる。

「よろしい。では、ゴラム機械軍団の取って置きの最新兵器を使い、ベスパ星蜂族の最後をかざってやろう。グフフフフ――

まだ、この威力をフルに発揮したことがない。この際、全能力をためしてみるか」

巨大なロボットは、こういいながら、横手にある、やはり金色のデスクに目をやった。もったいぶって、太く長い指を伸ばししながら彼は続けた。

「マックス。これで、この星雲の知性体は全滅だな」

指先に力が入り、銀の輝きが増す。

テレスクリーンに浮いた紫色のベスパ星宇宙母艦は、その言葉も終わらぬうちに赤い塵となった。

「閣下、やはり、最新兵器が全能力を発揮すると、物凄い迫力ですな。先刻、小型戦闘艇をはね飛ばしたワープ反動砲も威力がありますが、急に敵が消えるのですから、もう一つ、パンチに欠けます。ただ、見えなくなるのでは、いかにもつまらないです。

それにくらべると、この最新、いや最終というべきでしょう――兵器は見応えある。あれだけの質量を持つ巨大宇宙艇が、一瞬で塵になるのですからな。いや、すばらしいスペクタクルでありました」

横から、またもや、ゴマをすった声が上がる。実際には、

ブルブルルーン、ブブーン

と、こわれたバイクの排気音としか聞こえないのだが、これが彼等ゴラム機械軍人の標準語である。

グォー、バッバッバッ、ギューン

メガフォン・マフラーのレーサーが発する爆音のような響きが応じた。あの雄大なロボット、実はゴラム機械軍司令長官のナマの声である。彼の名、アリエル・スクエヤホアは、その勇猛な攻撃ぶりと負けを知らぬ巧みな戦略で、星雲中にとどろいていた。

「よく言った。マックス。やはり、敵軍が完敗する有り様をこの眼で見ないことには、真の勝利感を味わえぬわい。貴官も、わしが眼をかけただけあり、戦闘の楽しみ方を知っておる。感心したぞ」

ゴマスリに成功したゴラム機械軍参謀総長ゲレンデ・マックスは、ステンレス・スティールみたいな顔を白く光らせた。こわれバイクの排気音が、さらに高まり、広い司令室内の空気がビリビリと震える。

「はっ、閣下。有り難いお言葉を頂き、感謝の申し上げようもございません。やはり、ゴラム機械軍、いや、アリエル司令長官のお力はたいしたものであります。

だが、これで闘う敵がいなくなったとしますと、我が軍は、今後、なにをするのですか。まさか、マスター達の警察になることもできませんし、ちょっと困りますな」

マックスの言う通り、この星雲に、もう知的生命体はいなくなったのだ。たった一つの生きものをのぞいて——

「うーん。そうか、マックス。まさに貴官の言う通りだ。闘う敵がいなくなった以上、我が軍団の存在する意味も無くなる。

あまり簡単に勝ち続けたのも、こうなってみるとまずかったわい。もう少し、ゆっくり、じわじわと楽しみながら敵を撃破するべきであった」

テレスクリーン上で、薄くなって行く赤い塵を見ながらアリエルはぼやいた。キーッ、キッキッキッキ、ギー

また、マックスが言う。

「さようであります。閣下。我々は戦争だけを目的に造られたのですからな。お説の通り、百倍も時間をかけて勝つべきでした。そうすれば、マスターも、きっと心配し、いろいろと悩まれ、その結果、大勝利に大よろこびされ、効果満点でした」

「そうだ。マスターといえば、どうして、戦争に加わろうとなさらぬのだろう。ゴラム機械軍の目覚ましい勝ちぶりをご覧になれば、闘争本能を呼び起こされると思うのに！」

アリエルがくやしげに呟くのを聞き、参謀総長は顔色を白から灰色に変えた。彼等が軽蔑した時に示す表情である。

「おことばではありますが、閣下。本当のところを申しますと、私はマスターのような腰抜けが勇猛なゴラム機械軍を造ったのを、無念に思うのです。

彼等は、この星雲の支配者になりたかった。しかし、他にいろいろな生命体がおり、うまくいかない。そこで、他種族をすべて滅ぼす必要が生じたが、マスターには自分で戦う勇気がなかった。頭をひねったあげく、我々を造りあげ、長い時間をかけて星雲を制圧した。そうでしょう、閣下——」

ゲレンデ・マックスは、見事な五段論法で続けた。アリエルは、びっくりした目で部下を見つめた。きれるロボットだとは思っていたが、こんなにも筋の通った意見を述べるとは予想しなかったからである。

「……それなのに、どうですか。この最後の戦闘にさえ、参加されないのですぞ。きっと、安全な母星基地でのんびりと、我々の戦闘報告を見ているに違いありません。そうです。まさに腰抜けです」

自分の言葉にあおられて、さらに激したマックスは、テレスクリーンの正面にすえてあるアーム・チェアみたいなものを指さし、「マスターがあそこに座り、我が軍団の奮戦ぶりを、直接、

味わったことがありますか。最初はそのつもりだったのでしょう。この宇宙艇の戦闘能力を落としてまで、我々には不要な装置を加えたのですからな。そのくせ、一度も利用しない。マスターは、おろかな腰抜けぞろいです」と言い切った。

あまりにも大胆な発言に、呆気（あっけ）にとられたアリエルは、なだめるように言った。

「まあ、そう興奮するな、マックス。マスターは、なんといっても、我々の創造主なのだ。そして、今や、この星雲唯一無二の知的生命体である。貴官も、少し、ことばをつつしめ」

だが、逆効果であった。マックスの顔は茶色になった。どうやら、完全にのぼせたらしい。けたたましい声を上げた。

「そこです、閣下。問題は、そこなのです」

「なに、そこのなにが問題なのだ？」

ますます仰天した司令長官は、参謀総長の機嫌をとるように低くたずねた。ブル、ブル、ブル、ブルン？

「閣下はお考えになったことはないのですか？　たとえ、創造主とはいえ、連中がこの星雲の支配者になるのは、不合理きわまりない。もっと、ふさわしい存在がいるのに」

「げ、なにものか、その存在とは？　まだ、わしの知らない知性体がこの星雲におったとは信じられない」

「なにをいわれます、司令。その存在とは、我々のことであります。勇猛な知的機械体であるロボットが、マスター達を倒し、星雲の支配者になるべきですぞ。

閣下。今こそ決断の時です。さあ、号令をかけて下さい。『マスターを撃滅せよ』と。全軍団は、一瞬のうちに腰抜け創造主に襲いかかり、彼等を消しさり、この星雲はロボットの世界となるのです。すばらしいではありませんか」

しばらく呆然としていたアリエルも、この大熱弁に感服したらしい。「そうだ、マックス、マスターを倒せ」と叫んだのであった。

ゴラム機械軍団は、ふたたび、ワープを行った。数万光年のかなたにある母星に戻るので、今度は、テレスクリーンの灰色の時間が長くなった。三次元空間を四次元的に折り曲げて目的地に飛び移る――と簡単にいったが、距離が遠ければ、エネルギーも多く必要とするし、手間もそれだけかかる。便利な方法だったが、ワープにも限界があった。

「ごらん下さい、閣下。はや、母星が見えますぞ。どうやってマスターを全滅させましょうか？」

突如、テレスクリーンいっぱいにピンク色の星が現れたのを見つめ、マックスは聞いた。もう興奮はおさまっている。

「そうよなあ。彼等を皆殺しにするのはよいが、母星までこわしてしまったら、我々の住む場所がなくなる。他の星に移住するのは気が進まん。やはり、造られた地がなつかしいからな。うまい戦法を考えよ、参謀総長」

造ってくれたマスター達は、なつかしくないらしい。アリエルは勝手な注文をつけた。

「今の転移でたまったエネルギーを利用すれば、ワープ反動砲はこの上ない威力を示しますが、母星はとんでもない空間に消えてしまいましょう。といって、ベスパ星を宇宙塵にした最終兵器も使えない。なにせ、反物質をぶつけて大爆発を起こさせるのですから、あんなに質量のある星をねらったら、はずみで我が軍団まで粉ごなになってしまいます。

そうだ。ランブレッタ星の爬虫類生物を滅ぼした時の武器で攻めましょう。あれでしたら、マスター達だけが死んでしまい、母星は、どこもこわれずに手に入ります」

「そうか、さすがはマックス。細菌ミサイルのことをいっておるのだな。しかし、爬虫類生物には猛毒となったが、マスターには効果があるだろうか？　意外に無害だったりして、ケロリとしたままだったら困るが」

「その点は心配ご無用です、閣下。あの細菌は、マスターにも猛威を発揮します。もう昔の話になりますが、私は、彼等が細菌ミサイルの試作を始めた時、何千人となく死ぬのを見ました。あわを食った連中は、その後の開発をロボット研究団にまかせて、二パーセクも離れた衛星ルナで

完成させたのであります。

細菌ミサイルの一発——これでマスターは全滅し、我々が母星に乗りこむ。生きものには猛毒な細菌でも、機械には何もできない。そして、ロボットが星雲の支配者となるのです。ゴラム機械軍団の未来に栄えあれ。アリエル司令、バンザイ——であります」

感心した司令長官は、猛毒細菌をたっぷり仕込んだミサイルを、母星めがけて発射する準備をさせると、発射パネルにメタリック・シルバーの手をかざした。その途端、

「痛い、いててて、おー、頭が割れそうに痛む。これはどうしたことだ。脳の電子回路がショートでもした感じだ。痛い！」

頭を押さえて床に倒れると、彼はF・1（フォーミュラワン）レーサーもかなわぬ爆音を立て始めた。二メートルを越す巨体が、ゴロゴロと転がる。はずみで足をさらわれたマックスは、パネルの角に激しく額を叩きつけた。しかし、超高性能ロボットだけのことはある。平気で立ち直ったが、司令長官の苦しみように驚いて叫んだ。

「どうされました、閣下。この大事な瞬間に、たかが頭痛ごときで倒れるとは。あまりにも情けないですぞ——」

だがアリエルは、ガクガクと全身をけいれんさせると、急にこわばってしまった。なんと、失神したのである。

「ケッ。勇猛なゴラム機械軍団司令長官が、なんたるざまだ。たかがマスターごときを攻撃するのに逆上して、のびてしまうとは——。ちょっと、買いかぶっていたかな？」

相手が気を失っているのをよいことに、好き勝手な悪口をならべると、今度は、マックスがパネルの前に立った。

「閣下がおねんねしている間に、ゴラム機械軍団一のきれもの、この私がマスターを全滅しておいてやろう。アリエル長官は、気がついた時には自分がこの星雲の支配者になっているので、驚くと同時によろこぶだろう。

そのうえ、今のだらしない有り様を私に見られているのだから、大いに恥じ、マックス様のいうことに従うに違いない。つまり、本当の支配者は、私ということになる」

感激のあまり、ギンギラに光り輝く顔になると、ゲレンデ・マックスは細菌ミサイル発射パネルに手を伸ばした。

「ウーム、ギョーン、ビーン、いてえ——」

突如、彼はアリエルと同じ苦しみのうめき声をあげた。しかし、全星雲の実質上の支配者になるという野望は強く、くずれそうな足をふんばると左手でパネルの端をつかみ、右手をかざし続けた。頭痛はさらに強まり、さすがのマックスの思考力も薄れたが、彼はその構えをくずさなかった。

キーン

司令室内の空気を切り裂く金属音が起こった。続いてマックスの頭の各部から、白い煙が激しく噴き出した。

ビーン、ビーン、キィーン

音が高まるとともに煙は黒味を帯び、油が焼けるような異臭があたりを満たす。

ガクッ。マックスは首を前に折った。バタッ、かざした右手がパネルに落ちた。頭脳の電子回路が完全に焼けつき、体中の配線が過熱した。こうしてゴラム機械軍参謀総長は、立ったまま焼け死んだのである。

しばらくして気を取り戻したアリエルは、思いもよらぬ光景を見て、愕然とした。背を彼に向けて、ゴラム軍団の頭脳、ゲレンデ・マックスがコンガリとこげたまま立っているではないか――

「マックス。しっかりせい。参謀総長」

我を忘れて肩に手をかけてゆすったアリエルの前で、内側から焼けただれたロボットは、ゆらりと泳ぎ、ガサッと床にのめった。

「罰だ！ 創造主を攻撃しようとしたマックスに、知的生命体の刑が下ったのだ。わしの頭痛もそうに違いない。倒れねば焼け死んでいたろう。やはり我々を造られた生きものだけのことはある。今まで滅ぼして来た下等な種族と違い、機械の知らない能力をお持ちなのだ。

ああ、やはり、創造主は偉大だ。とても、敵対はできない。だが、一度、反逆した我々を許しては下さらないだろう。やむを得ぬ。逃げるのだ。ワープを宇宙艇機能の限界までくり返し、まだ行ったことのない星雲に飛んで、姿を隠すのだ。

それ以外に、我々ゴラム機械軍団が助かる方法はない。ワープ開始、いそげ！」

全軍団が亜空間に入った時、母星ではアリエルらがいうマスター達が呆然としていた。ゴラム星が誇るロボット軍団が大戦果を上げて戻って来た。歓迎の支度をしていたのに、突然、全艇が消えたのである。

こうしてゴラム機械軍団は、ワープに次ぐワープを続け、やっとマスター達の星雲から数百万光年離れた島宇宙まで、逃げのびたのであった。ここなら恐ろしいマスターの魔力が届かぬのを知り、アリエルは安心した。この世界でロボットの文明を築くのだ。今度は平和でおだやかな暮らしを送ることに決め、皆にも宣言したのだが――。

しかし、その計画もすぐにこわれた。もともとが、戦闘だけを目的に造られたロボットである。そんなまぬるい生活で、落ち着いてはいられない。ゴラム機械軍団から戦争をとったら、後には何も残らないのだ。アリエルを筆頭に、ロボット全員がいらいらと怒りっぽくなった。なんとしても闘う相手が欲しい。

たまりにたまったエネルギーを放出するために、ワープ反動砲を何も無い空間に度々放ったりもした。ついには敵を求めて、この未知の星雲内をワープして捜索を始めた。と間もなく、今までに会ったこともない、異様な知性体にめぐりあったのだ。小惑星ひとつを中心に、そのまわりをぐるりとガス状に覆った生物に——。

ある惑星全体をカバーして生活している高度の知的精神体・オーラ星人は、端末部に妙な刺激を覚え、ビクリとした。たいしたショックではなかったが、突然のことなので驚いたのである。すぐさま端末に防御指令を送ると、用心のために知的エネルギーが宇宙空間に放出されているのも止めた。次に、得意の感応力を使うと、この刺激を加えた相手の精神を探った。

〝やや〟思わずオーラ星人中枢部はうめいた。〝なんたることだ。わしには、どんなかすかな精神でもとらえる力があるのに、なにも感じられない。無が、あのような刺激をよこすはずもないし、なに奴だろう？〟

今までも、他の生命体に接近されたり、攻撃を受けたことさえあったが、いつでも予感があり、対抗策をとれたのだ。中枢は、なおもぼやいた。

〝こんなことがあるはずがない。いつだって、即座に相手の精神を読みとれたのだ。オーラ星人の信条《絶対孤立主義》を守るために、こうして探った接近体の思考を利用して神経攻撃をかける。彼等の深層心理にひそむ本能的恐怖を見つけ、それを直接、連中の神経組織に送り込んでやるのだ。これで驚かぬ生きものはいなかったぞ。恐れおののいて逃げ去り、二度とこの近くには寄らず、オーラ星人は《栄光ある絶対的孤独》にひたっておられたのに。精神を持たぬ相手では、作戦の立てようもないわい〟

中枢は深い考えにふけった。端末もつられて、今受けたばかりのショックも忘れると、精神を持たぬ不気味な相手のことを思った。オーラ星全体が沈黙に落ちた。だが、この静寂も長くは続かなかった。

ズーン

今度は、惑星全体をゆり動かす衝撃が加えられ、さすがのオーラ星人も分裂しそうになったのである。だが、精神力の限界まで発達した知性体だ。中心にある小惑星が一部赤い霧となり凹みとなったのを、強力な精神波で埋め原形を保った。素早く対策を考える。

〝そうだ。遠くからは感じられないにしても、接近さえすれば精神をつかめるかもしれない。すぐに偵察隊を送るのだ〟

中枢の命令一下、端末の各所が切り離され、敵の居場所も判らぬまま、宇宙一帯に散って行ったのである。

久し振りに巨大な知性体、それも小惑星一つを覆っているのに遭遇したゴラム機械軍団は、よろこび勇んで攻撃を開始した。全ロボットは、急に生き生きとなり、アリエルもふるいたった。

「閣下。あの最終兵器を使いますか。たかがベスパ星宇宙母艦を撃破するだけで、あれほどの迫力を示したのです。今度の相手は、小なりとはいえ、惑星であります。さぞ見応えのあるショーとなりましょう」

今度は、マックスとは違った声が、気負った調子で響いた。ギューン、キーン、ガタッ、ビーン——マスターに細菌ミサイルを発射しかけて電子頭脳がショートし、内部から焼け死んだマックスの後をついで、ゴラム機械軍団参謀総長になった、フォックスの叫びである。急な抜擢に興奮し、さらに司令長官のおぼえをよくする発言のつもりだった。

「なにを馬鹿な。そう簡単にこの戦いを終わらせてたまるか。できるかぎり時間をかけて楽しむのだ。まずは普通ミサイルに熱線銃。そして細菌ミサイルで攻めたて奴を苦しませる。へたばりきったところを、ワープ反動砲で少しずつ、どこかの宇宙にふっ飛ばしてやる——」

話しているうちに、アリエルは自分の言葉にあおられ、激して来た。メタリック・シルバーの腕をふりまわし、二メートル余の長身を震わすと続けた。

「……この殺戮に堪能したら、初めて最終兵器、反物質をたたきつける戦法をとり、無敵ゴラム機械軍団の大勝利とするのである。

それを、いきなり最終兵器とはなにごとぞ。それで栄誉ある参謀総長といえるか！　死んだマックスの後つぎになる資格を、貴官は持っとらんとしか思えぬ。第一だな、敵はまだあんなに巨大なのだぞ。反物質同士の爆発が連鎖反応を起こしてみい。この空域にまで影響が及び、我が軍団も宇宙の塵になる危険があるのが判らんのか。参謀総長ならばそれらしく頭を働かせい！」

フォックスはせっかくの提案が仇となり、司令長官にガンガンどやされ、小さくなって黙りこんだ。アリエルの怒りから逃れるため、あたふたと動きまわり、電子頭脳の発信装置をめいっぱい使って部下に指令を飛ばすと、とりあえず、普通ミサイル発射の準備をさせた。普通とはいってもゴラム戦闘ロボットがいうのだ。いい加減な星くずなど消してしまう威力を持つ。

「アリエル閣下。ミサイル発射準備、完了致しました」

フォックスは、先刻の失言でつけたミソをとりかえそうと、またたく間に戦闘態勢に入り、得意気に報告した。

「よし、ご苦労」

重々しく答えると、アリエルはテレスクリーンいっぱいに浮かぶ、異様な知性体を見つめた。何度もくり返したセリフをまた呟く。

「小なりとはいえ、惑星一つを覆っている生物だ。相手にとって不足はない。さあ、覚悟しろよ」

メタリック・シルバーに輝く手を、おもむろに金色のパネルにかざす。数十条の銀色の線が、真っ黒な宇宙空間を切り裂いて走る。

アリエルの硬い顔が期待に満ちてゆるみそうになった時、

「あっ、閣下、ごらん下さい」

新参謀総長が驚いた調子でテレスクリーンを指さしたが、あとの言葉が続かず、代わりにガクンと大きな音がした。フォックスのあごのジョイントがゆるみ、硬いチンが、これまた硬い胸にぶつかったのである。あわてて耳の下のスクリューをしめ、あごを元に戻す。

「オッ」とアリエルもうめいた。

それまで惑星全体を、薄青いガスのようにくるんでいた知性体が、急に濃紺色になると、なにかねっとりとした感じに変わった。ミサイルの一発目が当たり、爆発もせずに姿を消した直後のことであった。続いての銀線は、そのまま、すっと濃紺の中に入ってしまう。予想したような反応は、何も起こらなかったのである。

「うぬ！　このガスの怪物め。知性感受メーターも働かなくなったではないか。敵ながらアッパレ。我が軍の攻撃を察知するやいなや、感覚遮断さえ行い、完璧な防御態勢になるとは――よし。これぞまさしく真に闘いがいのある強敵ぞ。とことん叩きのめしてやるわい」

アリエルが驚いたのも当然であった。テレスクリーンの上には精密な知性感受メーターが設置

されてあり、どんなにかすかな知力でもとらえるのだ。知性体の存在を認めるや、クリスタル・ゲージがピンクから朱とさまざまな色調で輝く。この働きの結果、アリエルは、一見、何の変わったところもない、薄青色のガスで囲まれた惑星が、そのじつ、一個の巨大な知的生物であることを知ったのである。

だが今や、そのクリスタル・ゲージは死んだような乳白色に戻っていた。他生物の知性や精神をキャッチしない時は、こういうさえない色をしているのである。

「はっ、閣下。これは、まさに恐るべき敵。必ずや絶滅させせましょうぞ」

フォックスは、すかさず調子を合わした。この言葉に、ますます意気盛んになったアリエルは、ガッチリとこぶしをつくるとテレスクリーンをぶち破りそうな勢いで突き出し、

「よし、もうミサイル細菌弾などでは手ぬるいわい。ワープ反動砲で、端から順々にぶっ欠いてしまえ」

こう叫んで、またまた金色のパネルを激しく作動させた。エネルギーはありあまるほどたまっている。しかしいくらがんばっても、テレスクリーンに浮かぶ敵の小惑星にはなんの変化も起こらないのを見て言葉を失った。余るほどあった反動砲のパワーさえ、残り少なくなっている。

ブル、ブルブルブルブル、スス―、ス―

司令室内には沈黙がみなぎった。ガス状生命体の一部がどこか、とんでもない宇宙空間に転移

され、小惑星に凹みができるはずなのに、何も変わりなく、依然として丸々と濃紺に光っている。

アリエルは、我にかえるとヒステリックに命じた。

「よし、こうなったら最終兵器の使用だ。反物質をぶつけろ。ただし、最初からまともに衝突させて、あれだけの質量を爆発させたらえらいことになる。へまするると、この島宇宙全体が破裂しかねない――」先刻より、いっそうオーバーに取り越し苦労をすると、「……よいか。うまく端の方から、ちょっぴりずつ爆破させて行くのだ。判ったな」十分に念を押した。

フォックスは、また、チョコマカと走りまわり、命令を発した。すぐにゴラム星人全員の期待の中に、最終兵器は攻撃を開始した。

やはり、アリエルが誇り、かつ、危険扱いしただけのことはあった。巨大な濃いガス体の端に反物質を撃ち込まれた奇妙な生命体は、激しく震え、濃紺から黒くなり輝きを失った。しかし、その丸い形は変わらず、いっそう、ねばっこくなったようである。勝手の違ったロボット達は、次にどう攻めるか、すっかり弱ったのであった。

こうした司令長官や参謀総長のうろたえぶりを、司令室のすみからじっとうかがっているものがいた。思わぬ奇襲に狼狽したオーラ星人が敵の様子を探る目的で切り離し、宇宙空間にテレポートさせた端末の一員である。パンシーと呼ばれる精神体は、この司令室に到着した時、何も精

神力が感じられないのに驚いた。

〝せっかく強大な機械エネルギーを感じたので、他の端末連中を出し抜いて来たのに、生命体がいないとは、当てはずれもいいところだ。他の空間を捜せば良かった〟

こうぼやいたが、圧倒的に激しい物質感に囲まれているのを覚え、気を取り直した。おまけに、自分達の精神力とは異なった力が飛びかっているようだ。すぐ作戦を立てると精神波感応力の使用を止め、物質知覚感が働くよう実体化したのである。その材料に、司令室内の金属から念力抽出した構成要素を使ったのであるから、なかなか、しっかりしている。

まず視覚器官を造り、室内の様子をうかがう。マシーンだらけでこみ入った光景が見えるだろうという予想をしていたのが、見事に裏切られ、パンシーは拍子抜けした。およそ機械らしい物のない、四角い部屋にいることを知ったからである。

まわりは、正面だけを残し、すべて銀色のスベスベした壁であり、それが赤い光を反射しているさまは、不気味さをともなっていた。ちょっとしたスイッチやレバー、簡単なメーターすらない。

〝これで、強烈な機械エネルギーに満ちているとは、どうにも判らん〟

パンシーはとまどったが、残る正面の壁を見た時、納得したのである。その壁面は巨大なスクリーンになっており、そこに、彼の母星兼本体のオーラ星が、ぽっかり浮かんで見えたではない

か。

　その下部は金色のパネルになっており、妙な形の椅子みたいなものがすえてあったが、座る生物の姿はなく、空であった。代わりにオーラ星の丸い形と濃紺の光をバックに、がっしりとした大小二体の機械がメタリック・シルバーの背を並べていたのである。

〝なんて変てこな機械だ。今まで、こんな形のマシーンは見たことがない。あの上部の丸い部分が中枢なのかな〟

　パンシーは、それまでに得ていたいろいろな機械に関する知識を総動員して推理した。

〝ボディーわきに垂れたのは、ハンドルだろう。しかし、たった二本の棒であの胴を支えるのは困難だろうて。なんだか判らないが、とにかく不細工な代物だ〟

　と、大きな方の機械が小さな方に向き、なにやら威張りかえった調子になった。丸い部分の下に、四角く突き出した金具がガクガク動く。どうやら、しゃべりかけているらしいが、精神波動が起こらないので、パンシーにはなにを言ってるのかさっぱり判らない。あわてて聴覚器官を造ると、彼等のやりとりに聴きいった。

〝ははあ、なんと、この機械どもが我が星に攻めて来たのか。ふーん。いったい、どんな生物が連中に命令を下したのだろう？〟

　すぐさまアリエルとフォックスの正体を知ったオーラ星端末は、すっかり興奮した。ゴラム機

械軍の最高首脳二体は、せっかくの最終兵器が期待したほどの効果を示さなかったので、うろたえながら次の攻撃方法について議論している。おかげで、パンシーの出現に、まったく気づかない。

「さすが反物質攻撃。かなり効果はあったが、これでは敵は参りそうもない。といって、この手段は両刃の剣なのだ。破壊力を強めることは自滅を意味する。どうしたものかな、フォックス参謀総長」

「そうですな。それではやむを得ません。なまぬるいですが、ワープ反動砲でやった方法で、はじから消して行きましょう。転移の時はうまくいきませんでしたが、最終兵器を気長に使えば効果がありましょう」

　ワープ航法とワープ反動砲の間には、微妙な関係があった。ゴラム機械軍がベスパ星蜂族をほろぼした時は、敵周辺の空間をゆがませて相手を転移し、その結果生じた反動エネルギーを使ってワープを行った。

　しかし、元来がこの砲は、ワープ航法を行った時に生じる反発パワーの利用法として発明された兵器である。宇宙艇がワープを続ければ続けるほど反動砲のエネルギーはたまり、ついには暴発する。逆に撃ちすぎるとかんじんのワープ力を失う——両者の力のバランスを考えて使わねばならなかった。

これは、ヨットと風の関係で説明すれば判りやすいだろう。帆に風を受けて海上を進むヨットは、逆に強い空気抵抗を受ける。この抵抗、つまり反動力を利用しエネルギーとして別なヨットを動かすのだ。そして、この二隻目のヨットが走行した結果生じた反動エネルギーを自艇の帆にぶつけて進むのである。

言葉を変えると、最初の空気抵抗が空間を四次元的に折る時に発生する反動力になるし、別なヨットを動かすというのが反動砲で敵を転移させるに等しい。そして、また発生したエネルギーで自艇をワープさせるわけで、ゴラム機械軍団の科学力を最高に発揮した方法である。つまり、ワープ反動砲というのは、無駄がなく効果的な兵器だった。

だが、今、この妙な敵には効果がなく、ついに最終兵器の登場となったのである。

「よく言った、フォックス。その方法なら、たっぷり時間もかかり楽しみが続く。偉いぞ」

二体の会話を聞きながら、パンシーは急いで彼等の電子頭脳を調べた。さすがは、精神進化の頂点、オーラ星人の一員だ。機械には機械を——というわけで、即席で作り上げたばかりのマシーンの全能力を駆使し、敵の正体を完全に見破ったのだから、たいしたものである。

〃なるほど。こういう訳であったか！　奴らは戦闘だけを目的に造られた、おろかなロボットなのか。いや、実に変テコな形で、ロボットにしても質が劣るのだろう——

いくら中枢が連中の意識を探っても、つかめなかったのが当然だ。精神をもたないのだからな。

下等な機械エネルギーが何を考えおっても、高い精神体であるオーラ星人が感じる訳がない。これが生物なら、話は別なのだが。いや、よく判った——〃

ここで満足気にうなずくと、

〃そこでまずミサイルを撃ち込んだのか。やはり機械にすぎない馬鹿ロボットだ。最初の変なショックの原因はこれか。我々精神体に触れたとて、あんなものが爆発するはずがない。一撃くらった途端、惑星本体には精神波障壁(バリヤー)をかけたし、皆、オーラ星人の体を突き抜け、宇宙のかなたに消えたわい〃

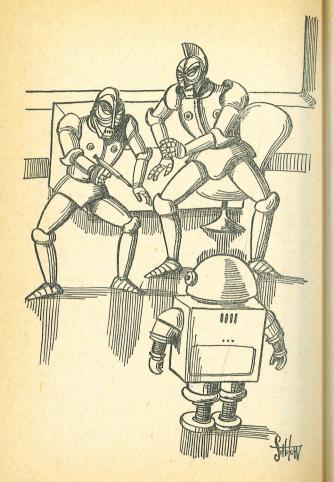
パンシーは調子に乗り、さらに続けた。

〃なになに、これは驚いた。あの強烈な衝撃は反物質をぶつけたからだと——それじゃ、いくらバリヤーがあっても母星の物質部分は爆発するわい。無知とは怖いものだ——

ふん。その前に我々を分断して転移させようとしたと？　これこそ、間抜けの証拠よ。精神体を機械力でワープさせるなど、まったく不可能なのに、そんなことも判らんとはな。可能なのは我々が行うテレポートだけなのだ〃

グォーン、ギョン、グォーン、ガーン

突然、司令室内にアリエルの物凄い怒声が鳴り響いた。彼は、それまで何もなかった部屋の隅に小さく不細工なロボットみたいなものを見て、仰天したのだ。

「お前は、いったいなに奴だ！　このチビ助め。いつ、どこから来たのか。目的は何だ！」
こうわめいたのである。
「おれか？　おれ様は、今、お前達が無法な奇襲をかけて失敗したオーラ星の勇士、高い精神体のパンシー」
「なに、すると敵側のスパイか！　おのれ」
次の瞬間、フォックスの手が、分子破壊銃をにぎっていた。銃口が上がる。
「待て、フォックス」
アリエルが止めた時は遅かった。眼に見えぬビームは正確にパンシーの仮の姿を射抜き、即席ミニチュア・ロボットの姿は消えた。
「やりましたぞ、閣下」
得意気に言うフォックスに、アリエルの雷が落ちた。
「馬鹿めが。このスパイを捕らえれば敵の様子を聞き出せたのに。消してしまうとは、愚の骨頂である。せっかく、この上ない情報源が手に入ったのに——。それで、マックスの後を継げるか！」
またまた前参謀総長を引き合いに叱られたフォックスは、すっかり落ちこんだが仕方がない。彼自身も遅まきながら、自分の早とちりを後悔したからである。

〝ウヘー、驚いた。機械の奴め。考えが判らぬのに行動するから始末におえん〟
分子破壊銃のビームをあびる寸前に仮の姿から離れたパンシーは、また精神だけに戻るとぼやいた。もし、ミニチュア・ロボットに同化している時に消されたら、いくらオーラ星人でも一緒に無になるところであった。つまり、単車に乗ってダンプに激突しかけた人間が、危機一髪のところで飛び降り、自分だけが助かったのと同じといえる。ただ、視聴覚は使えるよう、部屋のすみに小さな装置を作った。
「待って下さい、閣下」
その時、参謀総長がよろこびの声を上げた。
「何事かね、フォックス」
アリエルは、まだ怒りを含んだ声で応じたが、「あっ」というと絶句した。それまで敵スパイに気をとられて感じなかったのだが、いつの間にか、テレスクリーン上の知性感受メーターのクリスタル・ゲージが、まばゆいほどの鮮紅色に輝いている。
「そうか！　この光り具合から察すると、あのチンケたスパイめはまだ、この室内にいるに違いない。気をつけろ、フォックス」
「さようですな、閣下。そういえば、先刻から妙に室内が赤くなっていたようで。奴はかなり前からここにひそんでおったに違いないですぞ。閣下が気づかれなかったとは、意外や意外――」

フォックスはいや味をいった。たまにはあげ足を取らないと面白くない。
〝やばい。こりゃ、長居は危険だ。早く母星に戻り本体と合致しよう〟
パンシーがうろたえた時は遅かった。今度もロボットは、考える前に行動していた。参謀総長が素早く手をひるがえした時、部屋の壁がギラギラと赤紫に光り始めた。
「グフフフフ、この防御波さえ張れば、我がものよ。テレポート妨害器があるとは、いかなスパイでも知らなんだろう。これで、もうお前は袋の鼠だ。グフフ、グッフフフ」
勝ち誇ったアリエルの声に、ど胆を抜かれたパンシーはあせって転移を試みたが無駄であった。
ズビーン
テレポートしかけた彼の精神体は、防御波に激突した。スピリット・エネルギーに反応し、その壁面のキラメキが強まる。
「そうか、スパイめ。そこにおるな。よーし、待っておれ。いかに姿をくらまそうとも、このハンディ知性感受器があれば、即座に居場所を押さえられるわい」
アリエルはこういうとパラボラ・アンテナみたいな器具をパネル下から取り出し、パンシーの方に向けた。ハンドルについた乳白色のゲージが朱色に変わる。
「ほう、ほう、そこにおったか。お前の使ったゲージは判らないが、姿を消したことだけは確かだな。無駄なことを、グフフフフ」

精神だけの知性体の存在など想像できぬロボットは、敵スパイがなにか特殊な手段を使って透明になったのだと決めると、

「もう、お前も終わりだ。諦めて姿を現せ。さもないと、今度こそ分子破壊銃の霧としてやる。グフフ、グフフフフ」

と言ったが、姿を現すにもなにも、実体を持たぬパンシーのこと、いくら気張ってもアリエルの期待にそうことはできない。

「ほれ、どうした。いつまでも透明になっておっても、時間の無駄にすぎんぞ。いい加減で降参しろ。そうすれば、命だけは助けてやる」

ゴラム機械軍団司令長官は調子に乗って言いつのり、パンシーは弱りきった。もちろん、いくら分子破壊銃のビームをあびたところで、精神だけなのだからこわされるものがなく平気なのだが、いつまでもこの司令室にカンヅメにされていなくてはならない。得意の機知を生かすと、うまい策略をたてた。

〝なーんだ。ちょろい、ちょろい。また、ミニチュア・ロボットを作ればよいのだ〟再度あたりの金属から構成要素を抽出しようと念力を使ったのだが〝しまった。テレポート妨害波は、こんな働きもするのか!〟と、あわてきったのである。

アリエルが誇ったのも当然であった。妨害波はテレポートを防ぐのであるから、カバーした物

質の元素が抽出されるのまで阻止する力を持っていたのだ。

「グフフ、早くせい。チビ・スパイめ。グフフフ」

馬鹿笑いをしながらフォックスから分子破壊銃を受け取ろうとしたアリエルは、何に驚いたのか「グォーン」という声を立てた。ガタン。銃は床に落ち硬い音が室内に響く。

「やや、なんと。これは、小型アリエル閣下。驚きましたなあ。敵スパイの真の姿が、ゴラム機械軍団司令長官のミニチュア版とは!」

フォックスも驚いて叫んだ。

「何をいうか、馬鹿め。いくらわしを小型にしたとて、こんな不細工で粗末なオモチャにはならんわい」

プライドを傷つけられたアリエルがどなった時、ミニチュア・アリエルが口を開いた。

「まず、テレポート妨害器の作動を止めてくれ。君らだって、そのたくましく見事なボディーにチェーンを巻かれたとすれば、楽な気にはならんだろう。私にとって、妨害波に囲まれているのは、それと同じことなのだ――」

周囲の壁から実体化に必要な元素が抽出できず、やむを得ず当面の敵アリエルの金属を一部拝借し、その結果、出来損ないゴラム司令長官の形になってしまったパンシーは、相手が思いもよらず驚きあわてたので、すっかり楽な気分になると続けた。

「……私は、何も特別な装置は持っていない。物体透明化薬を飲んだので姿は消えたが、もう使えんだろう。なにせ、私の動きよりも早くテレポート妨害波を発生させた、恐るべき能力の持ち主なのだからな、諸君は！　いや、参った。もう、降参するよ」

すっかり持ち上げられて気分を良くしたアリエルは、調子に乗って妨害波を消してしまった。

「そうか、そうか。それほど、わし、アリエル閣下は敏腕かね、スパイ君。わしの参謀総長は、君がわしに似とるなどくだらんことを言ったが、なに、わしに比べるなら、君などスクラップの破片にもならん」

ミニチュアの自分に得意になって話しかけたが返事はなく、知性感受器のゲージさえ乳白色に戻っているのに仰天した。

「うぬ、卑怯者が。やはりスパイなどというのは、精神が下劣なのだ。高貴で正直な機械をだまして逃げおった」

自分には、その精神さえないのを棚に上げてアリエルは怒ったが、後の祭りである。

〝なに、精神を持たぬ機械だけが攻めて来たと！　信じられん〟

その頃、無事に本体にテレポートしたパンシーの報告を感じ、中枢は仰天していた。

〝だが、たかが鉄くずを相手に、我々精神体が本気になる必要もなかろう〟

無理に平静なふりをして、時間をつぶしたのが悪かった。その間に、ゴラム機械軍団は、攻撃体制を整えていたのである。

やっとアリエルの逆上がおさまった時、フォックスは、壁の一部を開きトランシーバーを引き出すと頭につけた。思わず驚いた呟きをもらす。

「なんと、奴、いや、奴らというべきか、は実体を持たぬ精神だけの存在だ。こんな奇妙な知性体がおったとは、あのマスターでも知らんだろう」

次いでアリエルに向かうと、

「閣下。見事に敵の正体をつきとめました。敵は実体がありません。中心になっている惑星さえ破壊してしまえば、勝利は我が方のもの。だが、あまりあっさりと戦闘を終わらせたら、後が退屈です。じっくりとこわして参りましょう」

彼が使った器具は、テレビのVTRみたいなもので、この室内での状況を、物質、知性の両面から記録し再現する働きをした。スローモーション、駒落とし、逆回し、早送り、と、できないことはなく、見事、パンシーの記録からオーラ星人の性状を解明したのである。

〝よし、ただちに攻撃だ〟

ズーン

またもや惑星全体をゆるがすショックが加わり、オーラ星人は分解寸前になった。

〃無知なロボットめが。また反物質攻撃を始めたか。早く対策を立てぬと大変なことになる〃

無理に平静さを保っていた中枢は、狼狽した。彼等の核である小惑星をぶっ飛ばされたら、精神体だけのオーラ星人は、糸の切れた風船と同じである。無限の宇宙空間を散りじりになり、さまよわねばならない。そうなれば、テレポート能力も弱まり、他の星雲はおろか、この宇宙の中を精神移動することもできないだろう。みじめな、さすらい精神、宇宙ルンペンになってしまう。

〃精神波エネルギーを強化しろ。反物質の衝突を食い止めるのだ〃

中枢は、全端末に命じたが空しかった。実体のない精神力では、強力な反物質の飛来を阻止することは無理であった。

ズズーン、ズーン、ズズーン

小惑星は、少しずつ爆発を起こし、赤い塵となり、いびつになり始めた。もう、平静なふりなどしている余裕はなかった。

〃そうか、精神力だけでは敵対できぬか。よし、やはり物質には物質。実体の力をうまく使ってやる〃

中枢は、安心した調子で言った。これまでにやって来た他星人の攻撃は、精神波バリヤーだけ

で十分に防げた。しかし、今度は考えたこともない強力な機械が相手らしい。だが、それならばそれで、打つ方法はある。あわてることはないのだ。

念力抽出した物質要素を、従来のバリヤーに少しまぜてやれば、スイカを食べる時に塩をかけると甘味が濃くなるように、防御力は強まるのだ。この原理を使えば、作戦は簡単にたつ。

〃わし等の中心になっている小惑星の力を使うのよ。この星から物質要素を取り出し、実際に形のあるバリヤーを造り、反物質をそこで食い止めるのだ。

パンシー、こらパンシー。お前がリーダーになり端末どもを使って、さっそく実体障壁(バリヤー)を造るのだ。急げ〃

ところが、ここでさすがの中枢も大誤算をしたのである。彼等の核である小惑星は、ほとんどが泥と石で出来ている。パンシー達はここから抽出した要素でバリヤーを構成したのだから、あまりにも考えが甘かった。せっかくオーラ星体のまわりをすっかり障壁で囲んだのだが、なんら効果はなかった。

〃そうか、連中は金属なのに、こちらは泥と石だ。防げるはずがない〃当てがはずれた中枢は、あらためて愕然とした。これでは、優秀なオーラ星が劣等なロボットに負けるのも、そう遠くはない。〃なにか手を打たぬと――〃中枢は必死になって考えた。スイカに塩をかけたようにうまくはいかなかったのである。

第3章　大仙人の出現

甲斐真純、陣馬竜介、木暮美可のトリオは、明るく心地良いパーラーで話に夢中になっていた。もうすぐ、高校生である。それに春休みで私服なのだから、喫茶店に入ってもまずくはない。店内は、相変わらず古都見物の若者達で込みあっていたが、三人は一杯のコーヒーで長居を続けていた。

「私、あのミニミニ・ピストル持つようになってから、妙に気が強くなったみたいよ」

それでなくても気が強く、B・F（ボーイ・フレンド）をやりこめるのが上手なのをどこへやら、美可はうれしそうに言った。

「へーっ、そんなもんかね。ぼくなんか、あの時のオモチャ、どっか引き出しのすみにほうり込んじまった。まだ定期につけてるとは、高校生になろうってのに、ミカロンも幼稚だね」

これは、真純の失言であった。美可の顔がふくれ始めたので、あわてて言い訳しかけた時、

「ぼくなんざあ、あん時買った五点、ちゃんと持っているぜ。その日の気分により、型を変えて

持ってんだ。ほれ、見てみな」

竜介がこう得意気にいうと、上着の内ポケットから定期入れを出した。端にチェーンがついており、先に銃身がバカ長いミニミニ拳銃がぶら下がっている。

「あら、陣馬君、意外じゃない。私、あなたの方が、もうどこかにほっぽらかしにしたと思ってたのに、甲斐君て、あきっぽいんだわ」

美可の顔がふくらむのを止めたら、ライバル竜介をほめ始めたので、真純は面白くない。

「実にチンケた形だな。どうしてこんな不細工なの買ったんだ、竜介」

とケチをつけたが、

「これだから、無知な者は困る。コルト・バントライン・スペシャルといって、あの有名な保安官ワイアット・アープ、ほら、知ってるだろうが、OK牧場で大銃撃戦をやった勇者さ――に特製して贈った歴史的な型なのだ。それをチンケだとはね」

いつの間にか西部劇に詳しくなった竜介に、あわれむような口調で言われ、真純はくさった。

〝ラブ・ロマンス専門のくせに、ひそかに人を出し抜いたな、うぬ――〟と真純が無念そうに唇をかんだ時、美可が突飛な発言をした。

「すっごい。この長い銃身も迫力あるわ。妖刀が魔力を発する前に、ワイアット・アープがこれで狙えば、眠狂四郎が村正で円月殺法を使っても勝てないわね。ねえ、私に

ちょうだいよ。デリンジャーも可愛いけど、この方がおまじないになるみたい」
「なんだい、ミカロン。まだ、村正にこだわってるとは君らしくもない。たかが、日本刀だぜ。それを、あんなチャンバラ屋の話に感じ入って、怖がるんだからなあ。呆れたね」
と真純が茶々を入れたが、今度は竜介が、
「いや、日本刀というのは、西洋人にとっても恐怖だったらしいぜ。幕末に来日した英国やフランスの海軍の水兵は、《人切り包丁》といって、勤皇浪士が日本刀をふり上げると、心底、ぶるったそうだ。フェンシング式に突っつくのと違い、骨まで断ち切るのだから、驚いたに違いない」
日本刀の肩を持つ発言をした。ワイアット・アープといい、勤皇浪士の暴れぶりといい、心温まるラブ・ロマンス以外に関心のなかった純情路線が、いつの間にこんな殺伐な知識を仕込んだのだろう。
〝おれがジャズを聴き始めたからだ。竜介の奴、音楽で差をつけられたものだから、別な方法で巻き返しを計ったな〟
真純は、こう考えて納得した。
〝だが、どんなに竜介が日本刀とピストルについて知識をつめ込んでも、ブルースとジャズの方が黒人の悲哀を共通の基盤にしているから、おれと美可の結びつきの方がはるかに強い。いくら竜介がつっぱっても、ミカロンはおれのもんだ〟

急にゆったりとした気持ちになると、ミニミニ・ピストルをいじりながら、「じゃ、ミカロン、これを持っていたら」と言ったのである。どうせ竜介のものだ。
「よーし、ミカロン。そんなに気に入ったのなら、おれの買ったモデルを全部、君にやるよ」
先手を打たれた竜介も、成り行き上、気前よく断言してしまった。
〝竜介め、無理したな。それじゃ、おれの買ったガラクタもミカロンにやって、竜介をからかってやろう。たしかオートマチックとかでスマートだったから、やつの不細工なのよりミカロンは気に入るぞ、ムヒヒヒヒ〟
二人と別れて家に戻ると、しのび笑いをしながら部屋に入ろうとした真純に、待ちかねたような祖父の声がかかった。
「ちょっと待った。真純。わしは、また、すばらしいことを聞いたのだ。話してやるから、来なさい」
〝あーあ、また交霊会かよ〟
彼はうんざりしたが、言い出したらきかないのが、祖父・甲斐重吾の特徴である。この執念があるからこそ、蜉蝣目なんていう虫ケラの研究で世界一の権威になれたのだ。それに《ざしきぼっこ》事件以来、頑固さにいっそうの迫力が加わっている。しぶしぶ祖父に従って居間に通った。

八畳のさっぱりした和室だが、床の間から違い棚までびっしり本が積んであり、大学者の部屋だけのことはあった。大部分は生物学の書籍であったが、民俗学や俗っぽいお化けの本などがかなりまじっているのが、祖父の近年の研究ぶりを示している。

「また、交霊会じゃないでしょうね。この間、だまされたばかりなんだから――」

先手を打って言った孫の言葉を聞き流すと、

「いや、それがな、やはり交霊会の話なのじゃ。それも正真正銘、本物の霊媒を使ってのな」

祖父は平然と答えたのである。あきれると同時に、がっかりした真純にかまわず、

「実はな、昨夜、わしはすばらしい降霊現象を見て来たのじゃ。もし、またにせものだとお前にも会わす顔がないからな、とりあえずわし一人で参加したのだが、昨夜こそ、真の交霊会に出席でき、今でも胸は感激に震えとるわい」

〝なんだ、おじいさん。蜉蝣目学会出席なんてもっともらしいことをいって、東京のホテルに泊まったはずなのに、こりもせず、また交霊会に出てたのかい。おやじが知ったらあきれるだろうな〟

真純は、自分でもあきれかえってこう思うと、そっとため息をついた。

「阿部さんもいい人だが、どうもおっちょこちょいでいかん。あの失敗以来、来にくくなったらしくずっと会っておらんが、またつまらんことをしておるかな」

と祖父の話はそれかけたが、

「いや、彼のことなどは昨夜の大実験とは関係ない。民俗学の方の権威筋から紹介されて行った会なのじゃ。やはり、学者の言うことの方が確かだわい」

自画自賛のセリフを呟き、本論に入った。

昨夜の霊媒は、長い白髪に白髭を生やした、まさに霊媒そのものという老人で、ある新興宗教団体が、彼等の指導霊の教えを受けるために降霊を行う、信仰味が強い会で能力を示していたのである。

出現する霊もガーナ聖人などというインチキ臭い名ではなく、大峯山人という、いかにも日本的で宗教団体の指導をするにふさわしい名前であった。巨人対阪神戦の勝敗などといった低次元の問題には触れず、会は高尚な哲学的談議に終始し、祖父は感服しきったのだ。おまけに、彼の霊格が高いとか、蜉蝣目ならびに民俗学に対する貢献の結果、その名は後世に残るであろうなどとおだてられ、大峯山人に心服しきったのである。やはり、学者馬鹿といえよう。孫は柔道馬鹿なのだから、いい組み合わせだ。

「そこでだ。この間、お前を失望させた埋め合わせもしたいし、次の回には孫も出席させたいと頼み、特に許可をもらったのだ」

ちっとも失望などせず、インチキ霊媒を投げ飛ばしたことでむしろ楽しみを味わった真純は、

あわてて断ったが、手遅れであった。
「なにを遠慮しておる。お前も大峯山人のお言葉を聞けば、暗夜に光明を見た思いを味わうだろう。それに、ざしきぼっこのことも判るかも知らん」
ついに切り札が出て、真純は同意したのである。

またもや変な集まりにひっぱり出される羽目になった真純は、なんとか祖父の口から断りをいわせようと頭をひねった。しばらく自室にこもった後、また、祖父の居間に顔を出した。
「なんだね、真純。あの交霊会のことをもっと聞きたいのか。よし、よし、話してやろう」
「いえ、違います。せっかくの貴重な経験ですから、竜介とミカロンもさそってやろうと思ったんです。なんたって親友ですからね。ぼく一人では、やめますよ」
「偉い！」
祖父がとてつもない大声を上げたので真純はのけぞった。彼の計画は、完全に裏目に出た。なにせ宗教団体主催の真面目な交霊会である。縁のなさそうな子供が三人も出席するといったら、きっと断るだろう。そうしたら、自分も祖父のお供をせずにすむ――と予想したのに、なんたることだ。祖父は「三人とも出席できるようにしてやる」と断言したのである。
彼はあわを食った。もちろん、友人二人には相談もしないで言ってしまったのだ。とはいえ、

いまさら祖父に本当のことは話せない。適当に話をきりあげると、あわてて外に飛び出し、まず、竜介に公衆電話をかけた。自宅の電話は使えない。
「なんだい。あわてた声を出して」
受話器の奥で、竜介の眠そうな声が答えた。
「へー、理由は会ってから話すのか？　君らしくもないムードだね。よほど重要な事らしいな。ふーん。君の家じゃまずいのか。じゃ、おれんちに来いよ。ミカロンも呼ぶからさ、あっ、待てよ。あいつの都合もあるだろうな。君、ミカロンに電話してくれないか。その結果で、どこで会うか決めよう」
竜介の意見に従い、真純は美可の家に電話をかけた。まったく、うっかりしたことは言うもんじゃない――ダイヤルを回しながら、ついぼやいてしまう。
「どうしたの、甲斐君。あせっちゃったりして。話があるから陣馬君の家に来いって？　ふーん。いったい、なんなのさ。そう、会ってから話すの。なにか秘密があるみたい。それじゃ、二人で私のうちに来ない。見せたいものがあるの。すぐ、いらっしゃいよ」
真純はまたまた竜介の家に電話をし、おかげで十円玉を使い果たしてしまった。鎌倉駅の西口、俗に裏駅と呼ばれる側から歩いて約十五分、戦前からの静かな住宅地に美可の家はある。呼びリンに応えて、美可は、ほっそり、しなやかな体を現すと、

「なんだ、甲斐君。あせってたわりに遅いじゃない」
と言った。ぴっちり体にあったジーンズに薄手のセーターが彼女をめっきり大人っぽく見せ、いつも会ってるくせに、真純はついどぎまぎした。
「なに、ぼんやりしてるのよ。変な人！　陣馬君、もう来てるわよ」
続いて玄関の奥から竜介が、のっそりと現れた。太ってスローモーな男なのに、こうした時はやたらと動きが早い。春休みでぶらぶらしていたせいか、さらに太めになり下腹がせり出している。ぽわっと柔らかな感じの顔に細い眼が笑っており、人の良さまる出しだ。
「やあ、真純よ。いったいどうしたんだ。とにかく上がれよ。ボケっとしてないでさ」
まるで自分のうちのような調子で、のんびりと言う。三人は廊下突き当たりの階段を上がった。
「そうせかすなよ。これでもいそいで来たんだ」
二階にある美可の部屋に入りながら、真純は文句をこぼしたが、大事な話ということで、すぐ集まってくれた友人の気持ちがうれしかった。
八畳ぐらいの、いかにも女の子の部屋らしい洋室で、南に面して大きな窓が開き、勉強机がすえてある。北側の壁を背に、たくさんのダイヤルやメーターを光らせて、美可ご自慢の再生装置がすえてあった。高校進学の祝いに両親が大奮発してくれたステレオである。ロックのテケテケテケにはいい顔をしなかった父親も、ブルースには意外に興味を持ち、時々、彼女と一緒にＦＭ

やディスクを聴くので、高校生にはもったいないほどのを買ったのだ。三個ほどころがしてあるスツールに、仲良しトリオは腰を下ろした。
「なんか、急にせかして悪かったけど、実は困ったことになってね――」と真純が話し始めた時、
ミャーン
可愛らしい仔猫の鳴き声がした。
「あっ、そうそう。私が見せたかったものってこれなの。紹介するわ。それから、甲斐君の話を聞きましょう」
こう言うと美可は、半開きになったドアから顔をのぞかせた、白と薄茶が柔らかいまだらをつくっている小さな猫をだいて来た。
「これなのよ。さっき電話で言ったものは。可愛いでしょ。昨日、知り合いからもらったばかりで、名前は《キティ》っていうの。キティ、ママのお友達にご挨拶なさい」
優しく仔猫の頭を押さえる美可に、〝ますます女の子らしくなったね〟と、柔道一直線は感心した。竜介は如才なくキティの頭をなでた。
「さっ、キティの紹介もすんだし、甲斐君、話してちょうだい。あっ、ちょっと待って。ＢＧＭがあった方がいいわね。私の好きなの流すから――Ｗ・Ｃ・ハンディの傑作集よ。きっと甲斐君、気に入って話に調子が乗ると思うわ」

「なんだって、《手軽な便所》？」
相変わらずムード・ミュージック専門の竜介が不思議そうな声を出したので、真純はびっくりした。
「なんだ？　そりゃ。便所がどうした」
「なんで、ここで《お手洗い》が出てくるのさ？」
美可はさすがに女の子である。上品な表現に変えたが、結局は同じことだ。
「だってW・Cてのはウォーター・クロゼット、つまりトイレだろう。ハンディてのは、手軽なとか軽便という意味じゃないか。つまり《手軽な便所》だろうが。おれが妙に思うのも当然だ。その傑作集ってんだから、どんなレコードかと仰天したんだ」
今度は、美可と真純が仰天する番であった。W・C・ハンディ——ブルースの父といわれ、『セントルイス・ブルース』『イエロー・ドッグ・ブルース』『ハーレム・ブルース』などの名作を残し、ほんの三十数年前に死んだアメリカ音楽史に残る作曲者を、なんと、トイレットだと思うとは。あきれかえって声も出ない二人を、竜介は心外な顔でながめた。〝おれ、なにか変なことを言ったかな？〟
やっと気力を取り戻した美可が、偉大なブルース完成者としてのハンディについて説明し、その名作を集めたレコードをかけるのだと言ったのだが、竜介はまだ釈然としない。

「いいよ、ミカロン。どうせ、おれはブルース音痴だ。黒人の魂のうめきより、ロマンチックな愛のメロディーの方が、性に合っている。勝手にBGMを流してくれ」
すっかりいじけてしまった。二人は、あわてて竜介の機嫌をとった。
「なに、ブルースに興味がなければ、知らなくて当然さ」
「そうよ、それにW・C・ハンディの解釈なんてまさにユニークそのもの。やはり、感受性の強い英語力のあるあなたじゃなければ、とても思いつかぬ発想よ」
やっと落ちこみから浮上した竜介は、「じゃあ、その名盤をかけようぜ。そして、真純の話を検討するのだ」と勢いこんで言った。
室内にキッド・オーリーのトロンボーンを主にした『セントルイス・ブルース』が鳴り始めた。ようやく落ち着いた三人は、祖父の出席した真の交霊会の件、しかもそれに全員で参加しなくてはならぬ羽目になった件につき、意見を交わした。
真純にとっては意外だったが、友人二人はあっさり交霊会への出席に同意した。美可でさえも、
「まかしといて。なんたって私には、他次元妖怪を撃破した実績があるんですからね。そんな交霊会なぞ、平ちゃら、平ちゃら」
と断言したのである。
『セントルイス・ブルース』が終わり、『メンフィス・ブルース』に入った頃から、美可のひざ

の上に乗りゴロゴロと気持ちよさそうにのどを鳴らしていたキティは、眠りこんだようだ。この上なく、平和な顔をしている。

「この仔猫、おかしいのよ。私に似たのかしら。ブルースが大好きでね、これさえかけていればご機嫌なの。猫のくせに、ニグロ・スピリチュアルが判るのかもね」

と、美可が言う。

「ところで、交霊会、霊媒、心霊現象といっても、いろんな種類があるんだ」

真純が説明を始めた。この種のことに、まったく無知な二人に、多少とも予備知識を与えておいた方がいい。

「前に出た交霊会は、君らも知っての通り、まったくのインチキ霊媒を使ったサギだった。だが、今度のは、お祖父さんの話によると、信仰団体をもとにした、真面目なものらしい」

出席したくもないのに、友人連れで参加せねばならぬ羽目に落ちた真純は、半分は自分を納得させるつもりで、懸命にぶちまくった。祖父にむりやり読まされたこの種類の本で得た知識が、やっと役にたった。

「例えば、千八百年代の中頃、当時英国一の霊媒、D・D・ホームはロンドンの屋敷で降霊実験をしていたところ、突如空に浮き上がり部屋の窓から出たと思うと、別の窓から戻って来て、何の異変もなかったそうだ。これは、信頼すべき記録として残っている。

「だけど、もう百年以上も昔の話じゃないか。当てになるかい」竜介が、もっともな抗議をした。

「迷信・俗信の時代なんだぜ、えっ」

「それじゃ、今世紀になっての話にするかね。一九二〇年代の霊媒、ウィリアム・ホープは、たくさんの心霊写真の撮影に成功し、多くの死人の顔やエクトプラズム――つまり霊媒の体から抽出した霊素だね――のアルバムを残している。やはり心霊現象というのはあるのさ。ただ、それを生きた人間に伝える秀れた霊媒がいなかったり、どうしても認めない人が大半なのでまともにされなかったのだ」

なにせ、自分でも信じられないことについてぶつのだから、真純も楽ではない。おまけに、ついこの間はイカサマそのものの交霊会で、元三流チャンバラ映画俳優のインチキ霊媒を投げ飛ばし、会をめちゃくちゃにしたばかりである。最近の交霊会については、どうにもしゃべりにくく、昔の話ばかりをしたのだ。

「ふーん、どう考えても、いかがわしいわね。私には、やっぱり信じられないわ」

美可が、なんとも割り切れぬ表情で言った。

「だけど、まさかと思ったざしきぼっこは出現したし、甲斐先生はこの交霊会を信じておられるのだ。やはり、出席して十分に調べるべきだと思うがどうだろう」

竜介が、この際、極めて妥当な提案をした。

「またインチキだったら、真純が得意の体落としで霊媒を投げ飛ばせばいいだろう。もっとも老人だから、手加減した方がいいだろうな」

「あの、シャロック・ホームズを書いたコナン・ドイルも、晩年は心霊の存在を信じるようになったんだぜ」

とどめをさすように真純がつけ加え、これで、難問はあっさり片づいた。後は、祖父が感心している霊媒の正体をつきとめるだけである。

いつの間にかレコードは終わっており、ミャーと鳴いた仔猫は、美可のひざから下りた。

パンシーは、島宇宙から島宇宙へとテレポートを続けていた。〃ああ、宇宙ってのが、こんなに広いとは思わなかった。なにが《栄光ある絶対孤立主義》だい。おかげで、オーラ星は絶滅寸前だし、おれも苦労しなくちゃならない〃つい、ぼやきが出るが、それも当然であった。

ゴラム機械軍団の物質攻撃の前には、さすがのオーラ星人精神体の防御も無効と知った時、中枢はまたパンシーを呼び寄せると、重大指令を発した。

「奴らの反物質攻撃に、精神力だけではかなわぬことは、お前も十分に判ったろう。やむを得ずこの惑星の物質力に頼ったが、なにせ泥と石。何の助けにもならぬ。このままでは、我々が宇宙ルンペンとなるのは明らかである。

お前は、敵の正体を探り出した優秀な端末である。ただちに宇宙中を調査し、我々の助けになるような、知性のある有機体を連れて来い。ただの物質では、知力のある機械、ゴラム軍団には役立たぬだろうし、知性があってもオーラ星に協力しない生きものでは、かえって始末が悪い。その辺の事情を深く考え、使える味方をすぐにみつけろ。なに、優秀な端末、パンシー君のことだ。やさし過ぎる任務で失礼な気もするが、もう時間もない。さあ、出発しろ」

やさし過ぎるどころか、この上なく困難な任務を押しつけたのである。そうしている間にも、彼等の中核である小惑星は形を失って行き、精神エネルギーで穴埋めするのも限界まで来ていた。

それからというもの、パンシーは気がおかしくなるほどのいそがしさを味わった。なにせ、これまで《絶対孤立主義》をとなえ、近づく知性体をことごとく追い払っていたので、近隣の宇宙には彼等を助けようなどという仲間はいなかった。

〃なんだ、オーラ星人だと。いつぞや、おれ達をひどい目に会わせたのに、いまさら何だ〃

〃ふざけるな。貴様達を助けるくらいなら、そのゴラム機械軍団とやらいうロボットに協力し、オーラ星をつぶしてやるわい〃

〃帰った、帰った、しっしっ〃

彼が交渉した相手は、皆、こうした具合にパンシーを追い払い、中枢の催促を受けてやけになった彼は、精神力の限界までふりしぼり大テレポートを行った。

ほとんど無限の広さを持つ宇宙で、オーラ星のある空間と正反対の位置にある、レンズ状をした島宇宙まで飛んだのである。

　この宇宙にもかなりの知性体はいたが、彼の希望にかなう生物は発見できなかった。あまりにも知性が低すぎて役に立ちそうもなかったり、凶暴すぎてゴラム機械軍よりてこずりそうだったり、パンシーは絶望しかけた。

〃いっそ、金属だけでもテレポートしてごまかすか〃こうも思ったが〃いや、そりゃ、まずい。相手は知性のある機械どもだ。ただの物質を持ち帰るんじゃ、母惑星を使ったのと大差ない。一発でぶっ飛ばされるぞ〃と、先にこうむった被害を考え、レンズ状島宇宙のはじまで出ばったのである。

　ところが、その文化果つる宙域——ともいうべき場所で、パンシーは理想的な知的生命体を見つけたのであった。赤くいじけた恒星をとり巻く惑星の内側から三つ目のをあたった時、意外な思念を感じて彼はその地に直行した。その場の雰囲気に、パンシーは精神波が止まるほど驚いた。

　彼と同じく精神だけの知性体が、なにやらもっともらしい念波を出していた。対象は、かなり低くはあったが似た精神パターンの生きもので、質量のある体を持つのが感じられた。パンシーは、彼等の構成要素を抽出すると、視聴覚器官を造る。

「あれま、こりゃ驚いた」

　パンシーの口からうめきがもれる。何十個か集まり精神体の話を聴いている肉体は、ゴラム機械軍団司令長官アリエルにそっくりだった。

〃やはり、宇宙は広い。こんな辺境に、あのロボットに似た連中がいるとは——〃

　中心になり生物達に指示を与えているこの宇宙の精神体に気づかれぬよう、パンシーは、じっと皆の様子をうかがった。

〃うーむ。この精神体は霊と呼ばれているのか！　そして彼に従う生きものは人間というらしいが、彼等は奴の意のままになるのだ〃

　じっくりと人間達を分析したパンシーは、やっとこれまでの苦労が報われたのを知り、大よろこびをした。

〃適度な知性に、機械とは違った柔軟な物性。この二つをかねそなえたこの生物、人間こそ我々オーラ星人にとって、この上ない助けとなる。だが、どうして彼等を説きふせて、味方にするか？〃

　しばらくうなっていたが、やはり、中枢が選んだだけのことはある。彼は、名案を考え出した。

〃そうだ。大峯山人とか呼ばれる精神体、人間に霊としてあがめられているのと話をつけ、彼等に命令を下すようにすればよい〃

　ほどなく会は終わったらしく、人間達の姿はさっと消えた。暗い空間に、ひとり残ってぼんや

りと漂っている大峯山人に、パンシーは念波をかけた。

〃やや、なに者ぞ！　この霊格高きわし、修行を積み生きたまま神に近い存在となった仙人に、異様な精神感応をこころみるものは〃

　びっくりした大峯山人の気持ちをつかみ、パンシーは失笑しかけた。だが、山人が仰天したのも当然である。長い期間、人里離れた深山で修行したあげく、やっと仙人となり、ついに霊体にまで出世した。そして、つい最近まで、霊界でも辺鄙な地で、孤高の生活を送っていた。それが、急に霊媒とかいう招霊器の働きに応え、現代の人間達とかかわりを持つようになったのである。そして、いい調子で持ち上げられ、ついに世に認められたかと有頂天になっていた。だが、しょせんは井の中の蛙で、地球以外のことに関心はなかったし、宇宙の反対側に高度の精神体がいるなど、夢想だにしなかった。そこに、まったく異質な精神波をあびたのである。

　あわてきった念波を、あたり一面にまきちらした。この狼狽ぶりに半分驚き半分興味をもったパンシーは、しばらく大峯山人を観察したのであった。だが、とうとう、

〃うーぬ。ついに魔界の悪霊どもが、わが成功をねたみ、現れおったか！　善が勝つか、悪が制するか。いよいよ、正邪両極の霊体があいまみえる時がきたか――〃

　あのいんちき霊媒、吉岡のデタラメ話も顔負けなことをわめき始めたから、パンシーはあわてた。理性を失わせぬうちに事情を説明しないと、ことはこじれてしまう。彼は、急に真剣になる

と、なだめすかす調子で、大峯山人とかいう地球の霊体に、真相を伝えた。

　大峯山人は、なかなかパンシーの話を信用せず悪霊扱いをしたが、やっとオーラ星人のねばりが効を奏し、こう応えたのである。

〃なるほど、オーラ星人氏。お主のいわれる話、よく理解できた。で、わしに、なにを求められるのかね。不肖大峯山人、小なりとはいえ、一つの知的生命集団の指導霊である。うかつなことは、引き受けかねますぞ。

　この団体を発展させて、日本、いや、世界一にするのがわしの願いじゃて。そうなれば、キリストもシャカもマホメットも、この大峯山人に頭を下げるであろう〃

　最後の方は、なにを意味してるのかさっぱり判らなかったが、この地球の精神体が意外に出世欲が強いのを知り、パンシーはかえって安心した。もし、真から悟りすました霊体で、なにも欲がないとしたら扱いにくいのだが、これならうまくあしらえば彼の頼みを聞くだろう。具体的な話に入ったのである。

〃今までお話した次第で、私は、この人間達の協力を必要とするのです。そのためには、貴霊の助けをあおがねばならぬ。もちろん、そのお礼は、十分に致します〃

　真純、竜介、美可の三人は、かしこまって暗闇の中に座っていた。祖父・甲斐重吾が頼みこん

だ結果、〝まだ子供ではあるが真面目に交霊現象に触れようという気持ちは貴重である。やがては、この宗教団体の熱心な信者になるかもしれない〟ということで、全員、交霊会への出席が許されたのである。

この会は、さすが宗教団体が主催したものらしく、ＳＰのバイオリンなどは流さず、代わりに信者の一人が部屋のすみで尺八を吹いていた。霊媒がトランスに入るには、やはり静かな音楽が必要らしい。

〝やっぱり、チョンボかな〟

真純はしつこく疑っていたが、後の二人は初めて出る異様な会の雰囲気にのまれ、カチカチになっている。美可の家で説明した時には、およそ信じられない顔をしていたのに、どうだろう。これでは、霊媒を投げ飛ばしたりしたら、いい出しっぺの竜介に文句をいわれかねない。

〝こりゃ、二人とも頼りにならん。やはり、ぼくだけの力でインチキを見破るか〟

真純がこう決心した時、暗闇の中に声が起こった。この会は夜光塗料つきのメガホンなど使わない。心霊研究ではなく、霊の教えをうけたまわる集いなのだから、そんなものは必要ないのだ。

「いや、皆、よく集まった」

意外に明るい調子に、信者達はどよめいた。真純も奇妙な感にとらわれた。

「おや、大峯山人の口調と違うとるぞ」

横で祖父が呟く。室内に一瞬、落ち着かない気分が満ちる。

「静まれ、信者諸君。騒ぐでない」

やたらと現代的で、ちっとも仙人らしくない声が続く。全員、呆気にとられたらしく、また、静かな闇があたりを支配した。

「私は、君達の指導霊、大峯山人の一の弟子、小峯山人である。実は今日、大峯山人は霊界首脳会議、つまりスピリット・サミットに出席されることになり、君らの招きに応じられなくなった。それで、ピンチヒッターとして、昨日までアメリカ心霊界で研究をしていた私が呼び戻されたのである。長い海外生活を送ったとはいえ、私も大峯山人のアシスタントＮＯ・１。君達のクェスチョンには、いくらでもお答えできる」

また、会員の間にどよめきが起こった。

「そうか、今日は大峯山人が降霊されぬとは残念。洋行帰りのスピリットでは、この会をリードするのは難しいのではないか。小峯山人とは、名前からしてスケールが小さい」

祖父が残念そうに言った。

〝チェッ、またインチキか。変に英語なんかまぜてごまかそうっていうのだな。そうはさせるものか。今夜もインチキ霊媒の化けの皮をはいでやる〟

こう思った真純は、信者達のざわめきを抑えて大声を張り上げた。前回のケースと、まったく

同じ状況になった。

「小峯山人、質問があります」

これまた前回と同じく狼狽した主催者が、「これ、甲斐君。なにを言うのです。質問は教祖の私を通じて――」と抑えかけた時は遅かった。調子に乗った真純はそんな制止などを無視すると、いっそう声を高めて聞いた。

「その後、ざしきぼっこはどうしてますか？」

さあ、これでボロが出るぞ。そうしたら、インチキ霊媒をまた体落としだ。いくら白髪白髭だろうが知ったことか。キャビネットをぶち破って、もう暗示にかかった竜介とミカロンを正気に戻してやる――

暗闇の中でひそかに腕をもみ格闘にそなえていた彼は、小峯山人の答えを聞いてど胆を抜かれた。なんとこのアシスタント仙人は、彼等がざしきぼっこと行った冒険から話し始め、見事に殺害者を捕らえ母宇宙に戻った極秘捜査官は出世して多忙になり、そのために真純達の世界に来れないのだと、明確に答えたのであった。さすがの柔道一直線でも、これではどう仕様もない。

「本当の仙人、深山で修行し高い霊格をそなえた心霊に違いない」

真純が興奮して叫んだのに続き、

「そうだ。まさに山気で清められた霊が出現されたのだ。これこそ交霊会だ」

「本当よ、甲斐君。小峯山人といわれる方こそ、信ずべき仙人なんだわ。私、この会に来て、本当によかった」

竜介と美可まで感激して大声を上げたのである。会の主催者であるこの宗教団体の教組は、話がとんでもない方に向かったので混乱したらしいが、それでも将来有望な少年少女が三人、霊界の存在を信じたのに満足して言った。

「それでは、今夜の集いは指導霊ご欠席のため、思わぬ冒険談となってしまいましたが、たまにはこういうハプニングがあるのもよろしいでしょう。若い信者三人を得た今夜の降霊の成功を祝って、終わりにしたいと思います」

宗教団体を開くだけあり、さすがに如才がない。

皆が帰った後、大峯山人はあきれた調子でパンシーに言っていた。

〝いやー、驚きましたわい。長生き――いや、長死にといった方が正しいですか――はするものですな。たった一度で、あれだけデマカセをいって純な少年少女をたぶらかすとは。いやオーラ星人とは、恐ろしい精神体で――〟と急に疑い深い感じになると〝……まさか、わし、この地球の高貴な霊体、大峯山人をもだましたのじゃないでしょうな〟と念を押した。

パンシーはあせって弁解した。

〃デマカセとはとんでもない。私が、生物の思考を読めることは、山人もとっくにお判りでしょう。あの少年が質問に立った時、私はすぐ彼の考えや記憶を感じとったのです。私が言ったことは、最後、つまり、ざしきぼっこは出世して忙しくなったからこの宇宙に来れなくなった、という所以外は、全部、本当なのです。もちろん、貴霊との約束は守りますよ。その代わり、あの少年と連れの友達二人を、私に貸して下さい〃

〃そうですか。なるほど、デマカセにしては話の筋が通り過ぎとりましたわい。やはり、精神発達の頂点に達したオーラ星の方だけのことはある。とんだ失礼を申しました。

では、わしが将来、日本の霊界の指導権を持てるようお力ぞえ願います。あの子供達三人は、お好きなようにご利用下さい。なんでしたら、ついでに霊媒もおつけします〃

まるでオマケで有名なアメでも売る調子で言ったが、

〃いや、霊媒は結構です。山人にとってあの老人は降霊に必要でしょうが、私にはかえって邪魔です。直接、彼等の精神に話しかけられますので〃

パンシーに軽くいなされ、大峯山人は恥じ入った。自分のものでもないくせに、真純達を貸したりするから、バチが当たったのだ。照れかくしに、

〃だが、なぜ、あの子供達三人を希望されるのです。もっと役に立ちそうな成人がいっぱいおるのに〃

と聞いた。実際、大峯山人はオーラ星人のやり方を不思議に思ったのである。

〃いや、若い生命体の方が、身体に活気が満ち、生き生きとしております。成人どもは、体力は衰えているうえに、すぐ、不信感を持つから使いにくい。あの三人の少年少女こそ、我々が利用するのに適しております。先にお話した強敵、ゴラム機械軍との戦闘手段としてこの上ない武器になりますぞ。

彼等を母体にテレポートすれば、中枢もよろこばれるでしょう。そうお考えになりませんか、大峯山人？〃

急に聞かれた日本の仙人の霊は、テレポートの意味が判らないのをごまかすため、

〃その通り。ただし、あの純真な子供達を心服させ、お主のいうがままにさせるためには、なまじオーラ星人だ、ゴラム機械軍団だ、などと本当のことを申さぬ方がよいでしょう。混乱するばかりで、お主の信用が落ちますぞ。やはり、大峯山人の一の弟子、山岳宗教を極めて仙人となった小峯山人で通された方がよかろう〃

急に威厳を帯びると、重々しい感じで忠告した。彼だって、だてに仙人になり、新興宗教の指導霊になったのではない。それなりに構えれば、なかなか貫録が出るのだ。

〃ハイ。適切なご忠告、パンシー、心から感謝してうけたまわります。おっしゃる通り、あくまでも山岳宗教を極めた霊人として、彼等に接することにしましょう〃

ついつられて、妙にかしこまった返事をしてしまったのだから、パンシーはあまり仙人向きとはいえない。信者の方が合っている。

〝そうだ。ゴラム機械人は、我が霊界に攻め込もうとする、悪霊ということにしましょう〟

すっかり霊界にかぶれて答えた。

「あーあ、まだ御岳に着かないのかよ。いい加減、うんざりするな。朝、早くから起きて山登りとは、真純も、とんだ約束をしたもんだ。眠くて仕方ない」

大あくびをしながら、陣馬竜介はいった。早朝の青梅線車内でのことである。まだハイキングには早いので電車はガラガラに空いており、竜介はナップザックから雑誌を取り出すとシートに長々と横になり、ページをめくり始めた。

「いやな陣馬君。みっともないから起きてなさいよ」

反対側のシートに座り、そろそろ見え始めた多摩の渓流に目をやりながら、美可が言った。だが、やはり彼女も眠いらしく、大あくびをしそうになり、あわてて手で口を押さえると、ちょっと赤い顔になり真純を見た。みんな、あなたのせいよ――という感じで。

「そんな顔でおれを見るなよ。君達だって同意したから来たんじゃないか」

彼は、どもりがちに言った。

「そういやそうね。だけど、小峯山人、甲斐君にだけ声をかけて、私達までさそわせたのは、ちょっとずるね。三人全員に言うべきだわ。もっとも、あなたが、この事件に私達を巻き込んだのだから当たり前かもしれないけどね」

眠いせいもあり、美可にしては珍しく皮肉っぽい返事に、真純はさらにうろたえた。

「だ、だってさ。あ、あの小峯山人という霊、すごく忙しくて、三人全部回る時間がないってんだから仕方ないだろう。ぼ、ぼくの夢の中に現れ、君達と三人で今日、御岳に来るよう霊示するのが精いっぱいだったんだ。ぼくのせいじゃないよ」

常になくヘドモドした真純に、美可は悪いことを言ったと後悔した。彼が落ち着かなくなったのは、ピッチリ体にあったジーンズと肩にはおったナイロンジャンパーの下のふくらみが大いに原因しているのに気づかず、

「そういや、そうね。あんな優秀な霊媒さえ通さず、直接、甲斐君にコンタクトしたんですもの。先生の大峯山人がいないんで、よほど忙しいんでしょう」

とニコッとしたのである。すると、読みかけの雑誌から目を離した竜介が、

「だけど、なんだって、こんな御岳くんだりまでぼく達を呼ぶ必要があるんだい。真純のうちで十分じゃないか」

と相変わらず寝呆け声でいった。

「いや、それは駄目なんだ。なんたって、深山で修行した仙人だろう。都会の俗塵の中では、落ち着いて話せないそうだ。なにか、大変なことでね。本当は紀伊の大台ヵ原を使いたかったそうだが、ぼく達に暇はあっても金がないのを知って、大マケにマケて東京都下の御岳で会うことにしてくれたんだぜ。感謝しろよ」

　こう真純が答えたのに、

「ヘエー、御岳って東京都なのかよ。ぼかあ、山梨県にあるのかと思った」

　社会科の教師が聞いたら涙が出そうなことを言うと、竜介は「よいしょ」と掛け声をかけて起き上がった。太っているから、これだけでも一苦労なのに、このあと、最も苦手な山登りが待っている。

　バサリ

　はずみで落ちた雑誌を拾おうと体をかがめ、突き出した下腹に邪魔をされ苦労している。見かねた真純が代わりに拾ってやった。青いタイツに赤マントをひるがえした、強そうな男が表紙になっている映画雑誌であった。真純は、つい開いたのである。

「なんだ、お前。せっかく神聖な山気に触れようというのに、また、映画雑誌なんか読んでるのかよ。この変なマントの男なんだい」

「お前の映画音痴にも驚いたね。やはり、柔道馬鹿だな。映画なんて『姿三四郎』ぐらいしか見

たことないんじゃない。スーパーマンだよ、スーパーマン。去年の夏、日本で上映された評判の映画じゃないか」

　と、いつの間にか向かいの席を立って来た美可が言った。

「あら、意外にカッコイイね、スーパーマンて。私、ＳＦに興味ないので見なかったけど、陣馬君はどうしたの？　あなたは、心温まるメロドラマ専門のはずなのに」

「いや、いや。スーパーマンは別でした。夢あり、淡いラブストーリーありの、ＳＦみたいだがそのじつ、人類愛をたたえたロマンス映画だったのです。ただ、お二人には理解がないから、見たのを黙っていたのさ。

なあ、ミカロン。おれは、あの映画に感激したのだ。照れくさくて言わなかったけど。それで、まだ、こんな古雑誌を持ってるんだ。去年買った特集号でね、ずっと昔、テレビでやったスーパーマンも載ってるよ。《弾丸よりも速く、機関車よりも強く、高いビルディングもひとっとび》なんだぜ」

　真純が話の腰を折った。

「スーパーマンが高いビルをひとっとびすることなんかより、お前がこの後、御岳をひと登りしなくちゃならないことを考えろよ」

　急に現実に戻った竜介は、しらけて黙りこんだ。あーあ、山登りか。仙人なんかじゃなくて、

川の精、いや、野原、草原の精だったら会うのも楽だったのに。

やっと青梅線御岳の駅に着いた三人は、登山口までのバスに乗った。彼等の他には乗客はおらず、多摩の清流を深く見下ろす橋を渡った頃から、彼らはすっかり眠気も消え、元気いっぱいになったのである。ゆるやかなのぼりをカーブしながらバスは心地よく走った。有名な観光地である。道路は完全舗装なのだ。おまけに、登山口にはケーブルカーまであったではないか！

「うわっ、こりゃ最高。これに乗りゃ、山頂まですぐだ。ええと、発車時間はと——」

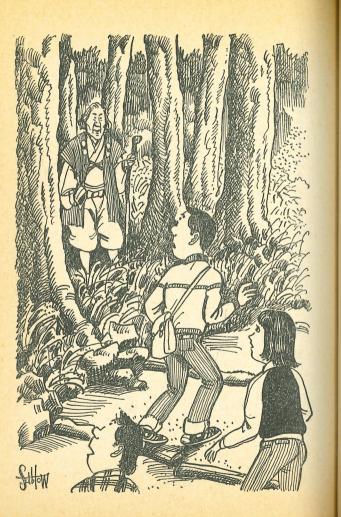
竜介は、大よろこびでタイムテーブルを捜したが、

「駄目。小峯山人のいわれるには、頂上は観光客の捨てたゴミで汚れきっており、山の霊気などない。むしろ、途中にいい場所があるからそこで会いたい。登山道をのぼって来たまえ。途中まで迎えるから必ず歩いて来るように——ってことだったんだ」

と、真純にいわれ、くさりきった。おまけに、ほっそり、しなやかな美可まで、

「歩きましょうよ、あんな箱に入るより、気持ちいい空気を吸ってのぼった方がずっといいわ」

と言ったので、かなり落ちこんだが仕方ない。

まだ朝露にしめった感じの登山道を三十分ものぼり、早くも竜介があえぎ出した頃、横手の特に木立が深くなっている所から、異様な姿の老人が現れた。

白い奇妙な着物に茶色の羽織みたいなのを着て、肩から大きなほら貝をひもでぶら下げ、手には杖を握り、おまけに高下駄まではいている。

「あっ、山伏」

竜介が割れた声を上げたが、

「もしや、小峯山人では？」

と、息も切らさず真純は聞いたのだから、柔道一直線だけのことはあった。

「いかにも、わしは小峯山人。我が超能力にとり、霊媒などというものはいらん。直接、汝らに話しかけられるからのう」

一生懸命になって仙人らしく見える方法を考え、あげくの果て、変テコな山伏姿になったパンシーは言葉つきまで変えて言った。実体化に使った要素や、衣服の作製成分は、民芸館や博物館から借用して来たのだ。おかげで急に体重が減ったので医者に駆けこんだ館員もいたらしいが、パンシーの知ったことではない。驚く三人を木立の間を縫って案内すると、ちょっとした空き地に出た。

「ここがよろしい。この山気の中ならわしの頭も澄み、君達に納得の行く説明ができる。まあ座りたまえ」

小峯山人の両側に甲斐と陣馬、向かいに美可が腰を下ろし、丸い形になった。

「実は、わしは大峯山人の弟子とはまっかないつわり――」

いきなり、意外なことを言い出したので三人組は驚いた。

「……あの席で本当のことを明かすとまずいことになるので、アシスタントということにしたが、実は霊界の防衛をつかさどる重要な役を持っており、大峯山人より格は上なのだ」

例え一時的にしろ、この辺境空間、文化果つる宇宙の霊体の弟子などといったのが、オーラ星人、精神体最高の発達を遂げた種族の端末である彼のプライドを傷つけたらしい。余計な説明をしている。言葉つきも変わった。

「ところが、最近、凶暴な悪霊どもの攻撃にあい、大苦戦をしておる。もちろん、我らとて高い霊性、たかが悪霊どもにはそうやすやすとは負けんが、相手は戦争のプロだ。どうにも分が悪い。そこで君ら人間の力を借りるため、現界に姿を現し、あの大峯山人君に手伝わし、使える者を捜したのだよ。そのわしの眼鏡にかなったのが君達なのだ」

「だけど」

と真純がいいかけた時、キャーギャー、久し振りに美可がお得意の絶叫を上げた。続いてB・F二人もうめき声をもらした。

第4章　仲良しトリオ、霊界へ

ふいに小峯山人の姿が消えると、彼ら三人のまわりは、めらめらと燃え上がる炎で赤く染まったのである。不思議と熱気こそ感じなかったが、突然、火の中に立たされた美可が絶叫したのも無理なかった。

「落ち着いて、ミカロン」

一度は驚いた真純も、すぐ、この炎が危険でないのを知ると、うめくのをやめてなだめるように言った。

「これは小峯山人の仕業かもしれない。本当の火だとしたら、三人とも、こう無事でいられるはずがない——」

〝その通りじゃ、真純君〟

三人の頭の中で、重々しい小峯山人の声が応えた。

〝口で説明しても、君達にはよく判らないと思うので、今、我々が直面しておる苦境を、直接、

感じてもらっとるのじゃ〟

美可は、ほっと安心した嘆息をもらした。しかし、続いて炎の中に展開される光景に、またもや悲鳴を上げそうになり、あわてて口を押さえた。

深紅の中を小峯山人と同じ姿の山伏達が、何十人となくよろめきながら走りまわっている。いや、走りまわっているのではなく、逃げまどっているのだ。

〝見よ。あれぞ悪霊どもの魔界の火による攻撃なのだ。今、汝らが見ておるのは、我が霊地の境界が、彼らの奇襲により全滅をとげた光景なり——〟

また、仙人の説明が続く。

〝この光景が、境界からの最後の通信であった。恐るべき悪霊の力、しばしながめよ〟

「地獄だ。火の海地獄だ！」

ボッ

さすがおっとり型の竜介も、歯を鳴らしながら呟いたほど凄惨な光景がくり拡げられた。必死になって霊力で炎を防ごうとする山伏達の努力も空しく、業火は彼らをじりじりと焼いて行った。

耐え得る限界を越すと、霊体は一瞬にして火のかたまりとなり、次いで黒煙と化し、消え失せる。それまでに彼らが示す表情は、正視に耐えぬほど苦し気であった。

〝燃えつきた味方は悪霊どもの国に引き込まれ、奴隷としてこき使われるのじゃ。なにせ、わし

らは霊性。死ぬことがないのだから、永遠に連中につかえねばならぬ。これは、死よりも、はるかに辛いことよ――〃

しみじみとした調子で、小峯山人は続けた。

火の勢いが急に強まる。一団となって逃走する山伏の背に、激しく炎が延びた。火焔放射機の攻撃を思わせる速さだった。

いたる所に黒煙が立ち、見るみるうちに善霊達は消えた。後には、変にぶよぶよしたモヤみたいなものが、焼けただれて残るだけであった。急に異臭が三人を襲う。

「うっ、いやな臭い。息がつまりそうだわ。ねえ、小峯山人。なんとかして下さい」

美可は鼻をつまむと、情けない声を出した。炎こそおさまったが、急に煙が目にしみ始め、三人とも涙をこぼした。その、ぼんやりした視野いっぱいに、なんとも正体のつかめぬ黒く不気味な影が、大きく広がり、にじんだ。

途端にあたりは御岳山中腹の空き地に戻ったが、強い恐怖感が三人を捕らえていた。美可が、涙を手でぬぐった時、

〃これで、悪霊の力が判ったろう〃

さとすような思念とともに山伏姿の仙人が現れ、呆然としている彼等に、

「こうして我が境界は敵の手に落ちた。この邪悪な力を防ぐには、君達の力を貸してもらう他に手段がない。この通り、お願いする」

頭を下げ、ていねいに頼んだのである。

「あれが、いわゆる地獄の業火なんですね？　昔からいい伝えられている――」

竜介が、ふっと気を取り直すと訊いた。

「さよう。あの火焔攻撃を受け、戦争に不慣れな我々、善き霊性は、とまどうばかりの有り様。そこで戦争経験豊かな人間の知恵を借りたら、と考えたのじゃ。お願い申す」

パンシーは、ますます低姿勢になった。苦心さんたんしてこの辺境の知性体に幻影の地獄の業火を見せ、どうにか納得させたのだ。うまくのせて、母星にテレポートしなくては――

「いったい、どんなことをすればいいんです？　本当に役に立つのかなあ」

真純は疑わしげな声を出したが、

「すばらしいじゃない。ねえ、甲斐君。この私達が悪霊と闘うなんて。考えたこともなかったわ。柔道のドシンバタンや、スーパーマンのビルとび越しの比じゃないわ。すぐ、小峯山人の国、霊界っていえばいいのかな――へ行きましょうよ」

先ほどの悲鳴もどこへやら、美可は黒水晶のような目を輝かせると、真純の肩に手をかけてゆすったのである。竜介も大きくうなずいた。

「そうか、来て頂けるか。有り難い。詳しくは我が国へ行ってから話そう。ここにいては、悪霊どもの餌食になるのみだ。さっ、早く」

山伏は強く叫ぶと、大きく手を振った。

ふと気がつくと、三人は薄青色のモヤの中を漂っていた。うっすらと柔らかい感じのガスであったが、まったく見通しが効かない。足元がふわふわとし、体は宙に浮いているので妙に落ち着かなかった。

「あら、ここ、いったいどこかしら」

美可がとんきょうな声を上げた。

「なんとなく、ロマンチックな雰囲気だが、何も見えないのが気に入らん」

竜介が、あまり驚いているとも思えないのんびりしたことを言った。

ライト・ブルーのモヤは、おだやかに流れている。三人の体も、静かな海の波にあやされるように、ゆるやかに上下していた。

「二人とも、しっかりしろよ。それで、悪霊どもに対抗できるかね。御岳山で小峯山人の頼みを聞き、仙人達に協力するために霊界に来たんだろうに」

「あっ、そうだったっけ。あまり、急に様子が変わったので、つい、ぼんやりしたんだ」

竜介がもっそりと弁解した。

「だけど、かんじんの小峯山人がいないじゃないの。他人（ひと）に助けを頼んどいて、せっかく私達が来たら自分が姿を消すなんて。失礼よ」

美可がちょっと、つんとした調子で言う。

「ふーん。このモヤ、きれいね。昔、私がロックなんてものに狂っていた頃、ステージに白い霧が流れるのに感激したけど、あれよりムードがあるわ。だって、あれ、ドライアイスの煙だったのよ」

モク、モク

ブルーのモヤは急に濃くなり、足元も固くなった。あたりに、不安なムードが満ちる。

ビビーン

突如、耳を切り裂く響きが轟くと、モヤは濃い紺色、ほとんど黒色に感じられるほどに暗くなった。

キャー、ギャー

またもや美可が悲鳴を上げたが、なんの効果もない。代わりに、暗い中をピカッと白い光が走った。固くなった足元がぐらりとゆれ、三人はよろめいた。思わず体を寄せ合うと手をにぎりあい、次のショックにそなえる。

美可の柔らかい肩を自分のごつい腕に感じた真純は、この不気味な状態と関係なく、妙に甘ずっぱい気持ちになるのを止められなかった。竜介は、足をふんばり、太く丸々とした腕で、しっかりと二人を押さえている。こうした時、太めで安定の良い彼は、この上なくたよりがいがある。

ピカッ

白光はさらに強まり、ついにあたりはまっ白なほどに明るくなった。モヤが濃く見通しが効かないことに変わりなかったが、すっかり紺色は消え、さきほど美可が馬鹿にした、ドライアイスの煙の中にいる感じになった。もっともこの状態では、ロックバンドになった気分になることは無理である。

三人が驚いて眼を見張る中で、モヤの一部が特に輝きをました。流れも止まり、ちょうどシネスコのスクリーンを張った感じになった。それも三流映画館のではなく、特別ロードショー劇場の、豪華なスクリーンみたいである。

「あら」「おっ」「うぬ」

そのスクリーンをながめると、彼等は三人三様の声を立てた。白く平らな面が急に金、銀のはでな色を発し始めたからである。ちょうど、シネスコ超大作がいよいよ上映開始という感じであった。映画館なら、この辺でブザーが鳴るところだが、ここは仙人の国、霊の世界である。

グフフフフフ、グフフフ

代わりに、とんでもなく耳障りな金属音が響き渡った。

「ウワッ、やかましい。我慢できないわ」

自分の金切り声はどこへやら、美可はあわてて耳をふさいだ。彼女のキャー、ギャーには慣れており、こうした音には耐性ができているはずの真純と竜介も、思わず耳の穴に指をさし込んだ。美可の女の子らしい悲鳴と違い、この金属音は妙に悪意を感じさせる不快なものだったのである。ガラスを硬い金属でひっかいた時に出る歯が浮くような気分の悪い音に、冷酷な殺人鬼の思念が加味された、今まで聞いたことのない特別な騒音であった。

どうにか音を防ぐと、三人はシネスコ画面を見つめた。不快なきしりはますます強まったらしく、しっかりと耳をふさいでいるにもかかわらず、グフフフフ、グフフ、という音が、彼等をいらだたせ始めた時、もう、すっかり金や銀の色に輝いているスクリーンの中に、巨大なメタリック・シルバーのロボットが現れたのであった。

「うへっ、こりゃデカい。スーパーマンより迫力あるぞ」

竜介は呟いたが、

「だけど、なんで仙人の世界に、現代科学のシンボルのロボットが現れるのかしら？」

美可がもっともな質問をした。

グフフフフ、ガハハハハ、グッフッフ

その声を感じたのか、不思議なロボットは四角く出張ったあごをガクガクさせると、さらに大きく不快な笑い声を立てた。

三人は、あわててまたしっかりと耳を押さえる。これでは、昔、美可が熱中していたロックの狂音より恐怖的である。このままでいたら、全員が錯乱状態に落ちること間違いない。が、幸い、その時、恐怖の笑いはピタリと止まった。

「お前達は、いったい何者だ。あの偉大なマスターの複製、粗末なミニチュアとも見えるが、彼等とはまったく別な生物に違いない。マスターにそなわっていた威厳、迫力、我々ゴラム機械人をして、自然に服従せしめた不思議な威圧感に欠けておる。

おまけに、わしが一笑いしただけで示したあのおびえよう。貧弱な体、しまらぬ顔形。どうせ、とるに足らぬ劣等生物に過ぎぬだろうが、どこから来おった」

驚き恐れ、ただ、かたまって立ちすくむ三人の前で、こういったロボットがぐいと背を伸ばし、すさまじい殺気を放ちながら威嚇を続けようとした時、ふっとスクリーンは消え、あたりはまた、薄青色のモヤにつつまれたなごやかな世界に戻ったのである。

「あれ、どうしたのかしら、あのギンギラギンのロボット。デビッド・ボーイのグラム・ロックも顔負けだったわ。でも、もう、グラムは古いもんね。体を変えに行ったのかしら」

「バカだな。ありゃロボットなんだぞ。しかも、あの様子から考えると、戦闘用に造られたやつだ。あのままだったら、ぼく達はいちころで殺されちまったぞ。いくら、昭和の三四郎、甲斐真純の柔道だって通用せん」

「いやあ、凄い笑い声だったね。あのグフフだけで、ぼくは三キロ痩せたよ」

ほっとした三人が、それぞれの感想をもらしている時、目の前で薄青色に戻ったモヤの中に、すーっと見覚えのある姿が浮かびあがった。白い着物に茶色の羽織、肩からほら貝をぶら下げて杖を持っている。

「おーっ、小峯山人。いったい、今までどこにおられたのです。おかげで、ぼく達、ゴラム機械人とかいうキカイなロボットに殺されそうになったんですよ」

真純は、さっそく文句をつけた。だが、美可はやはり女の子。あわやという時に仙人が助けに来てくれたのを単純によろこび、頭を下げて礼をいった。

「有り難うございました。小峯山人。あなたの気配を察しただけで、グラム・ロックは逃げてしまったのよ。やはり、修行を積まれた仙人。たいしたお力ですね」

なんだかよく意味の判らない言葉を言われたが、とにかくほめられたことには違いないので、パンシーがにっこりした時、

「だけど、仙人ともあろう方が無責任ですね。ぜひ力を貸してもらいたいっておっしゃるから、

御岳からそのままここに来たのに、ぼく達が危険になるまでほうっとくなんて、面白くないなあ。どういうつもりなんです」

意外にも最後に竜介がゴテ始めた。三キロも痩せ、スマートになったのを感謝すべきなのに、ロマンチックな雰囲気をグフフフでこわされて、腹が立ったらしい。

「それに、そんなに強い霊力をお持ちなのに、なんだってぼくらごとき、貧弱な体にしまらない顔形をした劣等生物の助けが必要なんですか？」

先ほどロボットにあざけられたのが、よほど口惜しかったのか、パンシーに八つ当たりをした。

彼はあわてて答えた。

「いや、悪い、悪い。とりあえず君達の到着を防衛軍司令部に報告に行っておったので、まったくすまぬことをした。

君は、わしに強力な力があるので君らの助けなど不要だろうと言ったが、そうではない。今、君達は、敵の力の強さを味わったばかりではないか」

パンシーはうまく地球人三人を連れて来たので満足し、のんびりと防衛端末と連絡をとっていたのだ。

「よろしいか。やはり、あの悪霊どもは恐るべき力を持っておるのだ。わしは、あらためて敵の強さを知ったよ。

わしが君達を連れて来たのを早くも察知し、ちょっとわしが場所を離れるや、我が霊界に即出現し、凶暴ぶりを示す。これを強敵といわずして、なにが強敵か。我が方の厳重な防衛組織を突破し、ここに現れたのだ。判ってくれるだろうな、悪霊の強さを」

ここで三人の機嫌を損じたら、今までの苦労が水の泡になってしまう。パンシーは必死に説得を続けた。

その頃、ゴラム機械軍団司令室では、アリエルが巨大な幻燈機みたいなものを前に、フォックスを叱りつけていた。彼等は早くも、三人がオーラ星に来たのを察知していた。さすがは宇宙一の機械力を誇るだけのことはある。優秀なテレスクリーンが、すぐ真純達を発見し、監視していたのだ。だが、アリエルはカンカンに怒っていた。

「見ろ。貴様の操作がのろいから、これからという時に、オーラ星の端末——奴はパンシーというのだな——に妨害されてしまったではないか。もうひと押しすれば、あの邪魔くさい劣等生物どもは震え上がり、オーラ星人のもとから逃げ去っただろうに。

だが、パンシーの奴、連中をどこから連れて来たのだろう。なんとも目ざわりで、不愉快だ」

フォックスは困りきった調子で言った。

「あれだけ厳重に念力バリヤーを張られては、たとえ奇妙な生きものの形は見えたとしても、彼

等の精神や思考を感受することは不可能です。この機械で——」

と、巨大な幻燈機みたいなものを銀色のこぶしでコツコツと叩くと、

「……閣下のお姿、お声を立体的に投影するだけで精いっぱい。あれだけ見事な幻像を敵軍内に造り、怪生物をおびやかしただけで、大成功と申さねばなりません。

しかし、これからという時に、パンシーめが参り、幻像投影ラインに妨害を加えるとは思いませんでした。これは、不可抗力であり、私の責任ではありません。アリエル閣下も、こうした事情を十分にご理解下さい」

「うーん。そう言われればそうであるな。あの下劣な知的生物をたっぷりおどしただけでも十分だった。あれ以上、具体的にはなにもできなかったのだから、ちょうど打ちあげ時だったし、パンシーに邪魔されたのも、かえってタイミングがよかったかもしらん」

つまり、今の事件は、幻燈機を使いスクリーンに怪物を映して子供をおどしている最中に、やって来た男が光をふさいで映像を消してしまったのと同じなのだ。パンシーとしても、たいした力は使わなかったのである。三人がおびえているのを知り、念力で投影ラインを防いだだけであった。地球人の出現が、こんなにもアリエル達を動揺させたとは、まったく気づかずに——

「では、君達を我が霊界の聖地に案内し、あらためて事情を説明するとしよう。ついて来たまえ。

わしの師にも引き合わそう」

パンシーは三人をうながしたが、真純はどうにも解せぬことがあり、質問した。

「小峯山人。敵は悪霊でしょう。つまり、あなた方と同じ霊体なんだ。そのスピリットが、どうして機械の象徴であるロボットの形をしているんです。おかしいなあ。

霊が実体化するなら、やはり、それらしい形をとるんじゃないですか。あなた達、山で修行をつまれた霊体が山伏姿になられるように、悪霊なら妖怪変化になるべきでしょう。

この霊界でこそ、悪の権化の姿、例えば鬼とか大蜘蛛だとか、そんなのが現れたのなら判りますが、なんだってロボットなんかに扮したんでしょうね え。なにか、深い悪意があるのですか?」

あまりにも鋭い質問に、聞きながらおろおろしかけたパンシーは、真純の最後の言葉でほっとした。確かに、攻撃をしかけて来たのは悪霊なのだから、機械の形をとるのは不自然だ。実体化するにも妖怪でなければおかしい。しかし、うまく理由をひねり出した。

「そう、君のいう通り、深い悪意があるのじゃ。なにせ、相手は悪霊。普通の霊には考えもつかぬ、ねじけ、ゆがんだ考え方をする。

そこで、わざわざ機械の姿になったのだろう。さすがは真純君。読みが深い。霊体というのは、もともと生きものと結びつきがあるものじゃ。だから、具体的な形をとるにしても、生物ではま

っとう過ぎる。そこで、さらにひねって、生きものと対抗すべき存在としての機械、それも、もっとも君ら人間に近いロボットの形をとったのだ——」

ここまでいったパンシーは、何故、ゴラム機械軍ロボットの形が、この宇宙辺境の生物である人間に似ているのか、ちらと不審に感じたが、深く考える時間もないまま続けた。

「……これで、彼等が鬼や妖怪の形をとらず、ロボットで現れた理由が判ったろう」

三人とも、パンシーの変な説明に納得してそれ以上何も訊かなかったので、彼は自分の頭の回転の速さに満足し、ちらと感じた不審もすぐに忘れてしまった。

「小峯山人、早く聖域に連れてって下さいな。私、こんな変なブルーのモヤの中にいるの、もういやになったわ。息がつまりそうですもの。早く深山の霊気を吸って、さっぱりしましょうよ」

「そうだ、仙人。ぼくもさっきから気分が悪くて困ってるんです。新鮮で涼しい空気。それを胸いっぱい吸いこみたい」

ほっそり、しなやかな美可と、かなり太めな竜介が口をそろえて言った。

「いや、これは失礼した。せっかくの珍客だ。大いにもてなさねばならんて。まずは、このモヤをはらって、すっかりオゾンで満たし、山気を感じさせる。それからあれをこうして、これをああして、ついでになにをかにして……」

すっかりあわてると、半分、ひとり言のように呟いていたパンシーは、この時、急に胸を押さ

えるとよろめいた。声がもつれ、全身が激しくけいれんする。肩から下げたほら貝が大きくゆれ、手に持った杖は宙に飛んだ。

「ど、どうしたんです、山人」

驚いた真純が声をかけた時、小峯山人は、ふわっとモヤの中に倒れた。茶色の羽織は破れそうに乱れ、下駄はぬげ裸足になっている。長ながと薄青色のモヤに横たわったかと思うと、彼の山伏姿は沈み始めた。

「山人、仙人、霊人」

狼狽して、知っているかぎりの単語を竜介は並べたてた。だが、その間にも小峯山人はどんどん、足元のモヤの中に隠れて行く。

「しっかりして下さい」

両肩に手をかけた真純が、得意の腕力を使ってパンシーの体をひき出そうとしたが無駄であった。山伏の体と一緒に真純の腕も、モヤにもぐり始める。ほうって置けば、彼まで沈みこんでしまう。いくら霊能者とはいえ、仙人と心中はご免だ。

思わず真純が手を離した時、山伏は急激にモヤの中に消えた。あとには、薄青色の渦が残るだけで、三人は呆然とした。

「グフフフフ、グフフ。これでパンシーめを片づけた。では、ぼちぼち、あの下等生命体どもを処分するか。グフフフフ」

こう笑いながらテレスクリーンをながめていたアリエルは、せっかく精神波攻撃をかけ続けているのに、下等生物三体は何も感じないらしく元気に動きまわっているので、いらいらして来た。

司令室内に爆音が鳴り響く。

「フォックス、おい、フォックス。こりゃ、どうしたことだ。うまくパンシーを消したまではよかったが、あの下等生物はビクともしとらんぞ」

あわてて飛んで来たフォックスは、テレスクリーンの中で活発に動きまわっている生命体を見て仰天した。

「これは信じられない。あれだけ精神波攻撃をかけたのに、奴らは何ともない。パンシーめはくたばったのに、訳が判りませんな」

アリエルとフォックスは、電子頭脳を必死になって働かせたが、どうにも原因がつかめない。

彼等は、完全な盲点に落ちているのに気づかなかったのだ。

パンシーが、真純達三人を聖域に案内しようとあせった時、つい、ゴラム機械人に対する防御がゆるんだ。その隙をついてロボット達は強烈な精神攻撃波を送った。こうしてオーラ星人端末は倒れたかに見えたのだが、この攻撃波はオーラ精神体撹乱用にセットされた特殊ウェーブだった。そのことをゴラム機械軍団両首脳はすっかり忘れていた。

人間の神経には、まったく影響がないのも気づかず、なおも攻撃波を送り続けたのだから、いくら機械とはいえ、考え方が硬すぎた。情勢の変化に応じて戦法を変えるという柔軟性に欠けていたのである。もっとも、石頭よりも固い金属頭のうえに、精神さえ持たぬ戦闘ロボットなのだから、ワンパターンの攻撃を続けたのも仕方ないだろう。

何もワープ反動砲などといった大げさな武器など必要ない。ミサイル、いや、ミサイルでも仰仰しすぎる。簡単な熱線銃を使うだけで十分だったのだ。熱線銃三発を撃ちこむだけで真純、竜介、美可はオーラ星中でモヤと化していただろう。パンシーが消えたことで、彼等のいる地域はまったく無防備になっている。精神波バリヤーは消えていたのだ。

遠い空のかなたに浮かぶゴラム機械軍団の母艇司令室の中から、アリエル司令長官とフォックス参謀総長が夢中で精神攻撃波を送っているのに、かんじんの三人組は少しも気づかず自分達の議論に熱中していた。

「こりゃ、小峯山人はどこに消えたんだ」

「また、おれ達をほうり出しかよ」

「変な山伏の格好なんかしてさ。意外にあの霊はインチキかもしれないわ」

話がだんだんオーラ星人を侮辱するムードになって来た時、さっと薄青色のモヤが晴れた。三人は、驚いて話をやめるとあたりを見まわした。

「わあー、こりゃ凄い。ここは、山奥も山奥。話に聞く大台ヵ原も顔負けの、僻地じゃないか」

真純が大声を上げた。彼のいう通り、三人は濃い緑の樹海のまっただ中に、ぐいとそびえる台地の上に立っていたのである。目の届く限り黒ずんだ緑の針葉樹の波が続き、空はあくまでも高く澄み切って青かった。空気は香ばしいオゾンに満ち、涼しい微風が心地よく顔を洗う。

その台地は、直径十メートルぐらいの円形で、端からのぞくと五メートルほど下に、みずみずしい木々の葉が目を刺すようにとがっているのが見えた。

「なんだ。おれ達は聖地の真ん中にいたんだぜ。小峯山人も人、いや霊が悪いな。それならそうと最初から、この有り様を見せてくれればいいのに。余計な心配をかけさせたりして」

竜介がぜいたくな不満を言ったのに、

「ううん、そうじゃないのよ、陣馬君。山人は、ああしたおかしな様子を見せてさ、私達の度胸をためしたんじゃない。今だって、私達がどうするか、どっかから見てるのよ。もっとシャキッとしましょうよ。あなたは、ちょっと文句が多過ぎるわ」

美可が、ひどく大人っぽい口調でたしなめた。ついで大きく手を伸ばしてのびをすると、深呼吸をする。

「ああ、いい気持ち。この山気こそ、ここが聖地の証拠よ。陣馬君もこの霊風を吸いこめば、不平なんか消えるって」

「そうだ、ミカロン。こんないい気分になったのは久し振りだ。やはり小峯山人みたいな高級霊が住む聖地だね」

同じように深呼吸をして、真純が楽しそうに言った。

「さてと、そろそろ小峯山人、現れてくれないかな。もう胆試しは終わったし、本格的に悪霊どもと闘う作戦を立てねばならないだろう。あまりもたもたしていると、悪霊が化けたロボット軍団に攻めこまれる。この大自然を、たとえ仮の姿とはいえ機械どもの手に渡すことはできん」

パンシーはゴラム機械軍団の精神波攻撃で倒れたのに、自分達をびっくりさせて観察するために姿を隠したと思っているのだから、平和なものだ。だが知らぬが仏とはよくいったもので、三人のいるあたりが急に変わったのは、実は倒れたはずのパンシーのおかげだったのである。

無防備のところにいきなり精神波攻撃を受けたパンシーは、気を失ってオーラ星外縁のモヤの中に沈みこんだ。しかし、精神体がむき出しでなかったことが幸いした。いろいろと工夫して作りあげた山伏の身体や衣服が、彼を助けたのである。

精神だけを攻撃する目的で作られたために、この攻撃波は物質を貫通する力に欠けていた。おかげでパンシーの精神に届いた時には、衣服や身体にエネルギーを奪われ、オーラ星人を失神さ

せるのが精いっぱいだったのである。
モヤの中で気を取り戻したパンシーは、ただちに中枢のもとにテレポートし、真純達に関する報告を行った。
〝よくやったパンシー。すでに防衛端末より連絡は受けておるが、それでこそオーラ星精神体の代表として、宇宙の果てまで行ったかいがあったというもの〟
中枢は、こうパンシーをほめちぎった後、おそまきながら三人を精神波バリヤーで守ると、今後の対策を練り始めた。十分に端末の話を聞くと、結論を出す――。
〝なるほど。それでは彼等は君のことを、その地の霊体だと信じており、今いる場所を地球とかいう小惑星の霊場・聖地だと思いこんでいるのだな〟
満足気に続けた。
〝よし、これで方針が決まった。この際、真実を伝えたとしても、彼等はなかなか信じまいし、わしの望むように働いてはくれないだろう。
深山の仙人と霊場、そして、無法にも攻め込んで来た悪霊――この悪しき霊どもを撃退するのに彼等の力が必要である。そう、この線で行こう。パンシーは小峯山人で通せ。わしは、そうだなあ、霊峯山人と名乗ろう。善は急げだ。すぐ彼等を、想像しているような環境の中に置くのだ〟

こうしてオーラ星中枢は全精神力をそそぐと、真純達のまわりに幻想の聖地を造ったのである。だが幻想とはいえ、宇宙一の精神体がフルに能力を発揮したのだ。完全な実体感があり、地球の少年、少女が本当の聖地と感じたのも当然であった。おまけに、効果を強めるために中枢は、バリヤーを物質化し、どこまでも青い空にした。緑の木々も、涼しい微風も、彼等の感覚では実在のものであった。
「やあ、お待たせして失礼した。この方が、我が聖地の最高責任者、総代表の霊峯山人である。諸君等のご協力を感謝し、この後、どういう方法で悪霊と闘うかを打ち合わせるために、お越しになったのだ」
清澄な山気を十分に楽しんでいる三人の前に、ふいに姿を現したパンシーが言った。また元通りの、どこかチグハグな山伏姿になっている。
小峯山人の後ろに立つ霊体を見た時、三人組はギョッとなった。神武天皇と伊勢神宮の神主と秋葉山の大天狗をたして三で割ったような、異様な形の代物が立っていたからである。この姿こそ、パンシーが日本にテレポートした時に集めた知識を結集し分析した結果、この未発達知的生物がもっとも敬意を感ずるだろうと考えて設計した、最高級霊の実体化にふさわしいものであった。動かしているのは、もちろん、オーラ星中枢である。

恐れ入った三人は、中枢が何も言わないのに深かぶかと頭を下げた。その、なんともいえない奇妙な姿に、理屈抜きに敬服したのだ。

「いや、結構、結構。皆の者、苦しうない。頭を上げい――」

すっかりうれしくなった中枢は、つけ焼き刃の重厚さを示して言った。ただ、使った言葉はパンシーと現代っ子三人の知識からの寄せ集めであるから、乱れきっているのは無理もない。精神力を動かし、さっとばかりに涼風を吹きわたらせると、中枢は言葉を続けた。

「……いかにも、わしこそこの霊場・聖地の主、霊峯山人である。我が使い、小峯山人の話によれば、汝ら三名は、この地に押し寄せたる悪霊どもを、我ら霊体と力を合わせて追い払わんがため、参ったとのこと。

いや、若いのにもかかわらず殊勝なる心掛け。悪霊どもを撃退せしあかつきには、高き霊格をあたえようぞ。心して働け」

またもやサーッと冷風が吹き渡り、新鮮な木々の葉の香があたりに満ちた。

「どうも有り難うございます。霊峯山人。ぼく達はまだ子供ですが、できるだけの力を発揮し、お力になりたいと思います。よろしくお願いします」

真純が、大きな声で答えた。竜介と美可もそれに続いて「よろしく」と言ったのである。オーラ星人は、最後まで自分達の正体を明かさないことに決めていた。

「よろしい。君らの生命は、この霊峯山人が確かにあずかった。惜しみなく我らにつくすように。高き霊格が汝らを待っておるぞ」

やはり、相当にチグハグな話しぶりだが、おかしいと思う者は一人もおらず、美可にいたっては感激のあまり目に涙さえ浮かべたのである。

ガガガガ――

その時、突如として空一面に奇怪な音が響きわたった。霊峯山人以下二人のオーラ星人と三人の地球人が見上げるうちに、青空にはグーンと黒雲が広がり、激しい風が吹き始めた。針葉樹の葉なみが、大しけをくった海面のようにゆれ動く。山気は消え、なにか生臭く不快なにおいがあたりに満ちた。と思うや、目をあけていられないほどの豪雨が降り始めた。聖地は急に暗くなり、一瞬前の明るく澄んだ空気は、重苦しく息づまるものに変わった。

「おのれ、悪霊めが。奇襲とは卑劣な。だが、我がオーラ星人は千万の味方を得た。負けてはおらぬぞ！」

何を感じたのか、霊峯山人ことオーラ精神中枢は、空をにらむと激しく叫んだ。

彼らが話しあっているすきに、アリエル達は、青空に物質化した念力バリヤーへ、またもやワープ反動砲の攻撃をかけた。障壁を一部転移して見事に小さな穴をあけると、そこを通して気象

変化パワーを送り込んだ。精神波のままで防御していれば、精神だけの転移は不可能だから安全だったのに、人間達を心服させようと考えた中枢の、初歩的、決定的なミスである。

砲撃に気づいた防衛端末が小穴を精神波で埋め、中枢に連絡をしたのだが手遅れであった。ゴラム機械軍のパワーは荒れ狂い、聖地の姿を完全に変えた。

第5章　ゴラム宇宙艇団の猛襲

グォーッ

黒い風が渦を巻いた。

ザザザザー、バサーン、ザザ

太い樹々が葦のようにしなった。

バチ、バチ、バチ、バチ

豪雨は水というよりは散弾の感じで五人の身体を打った。隠れようにも直径十メートルの丸い台地で、まわりは急な崖になって落ちこんでいる。全員、吹き飛ばされぬようしっかり体を組み合わせると、台地の中央にうずくまった。すっかり暗くなった空には稲妻が走り、雨足を銀色に輝かせる。

「こうはしておられん。早く天気をしずめねば」

霊峯山人ことオーラ星人中枢は言った。精神だけのままだったら、こんな嵐などまったく問題

ではない。大風だろうが雷雨だろうが、すべて突き抜けてしまう。だが、なまじ物質化しているので、そうはいかなかった。大仙人の身体は今にも宙に舞いそうになり、激しい雨に叩かれた皮膚はアザだらけで刺すような痛みが走る。しかし、さすがはオーラ精神体中枢。いち早くこの突然の天候異変の原因を悟り、戦意を燃やしたのであった。

〃この嵐は、ゴラム機械軍が送り込んだ、暴風雨発生器が起こしたのだろう。バリヤーにあけられた穴を精神波で埋めたにもかかわらず荒れ模様が続くのは、まだこの空域内で気象変化パワーが働いていることを示す〃

正確な判断を下すと、

〃その発生装置さえこわせばパワーは消え、元の深山の状態に戻すことができる〃

こう考えるや大仙人の姿はその場に置いたまま、精神体でテレポートを行い発生器の所在を探った。強大な暴風雨エネルギーを発しているのだ。中枢は、簡単にその装置を見つけることができた。

〃それでは、ぶちこわしてやるか〃

こう思った彼は、はたと困惑した。今は精神だけになっている。これでは、頑丈に造られている機械を破壊することは不可能であった。いくら努力しても、彼の精神波は装置を素通りしてしまう。おまけに、抜かりないゴラム機械軍は、厳重に対念力バリヤーをかけたので、テレキネシ

スも無効であった。

〃よーし。今こそ、あの地球から連れて来た少年、甲斐真純君に活躍してもらう時だ！〃

こう思うと、すぐ仮の身体に戻った。途端に猛烈な風圧、骨まで響く豪雨を感じ、彼は、一瞬、精神が止まる思いをした。

〃なーに、たかがこれしきの嵐――〃

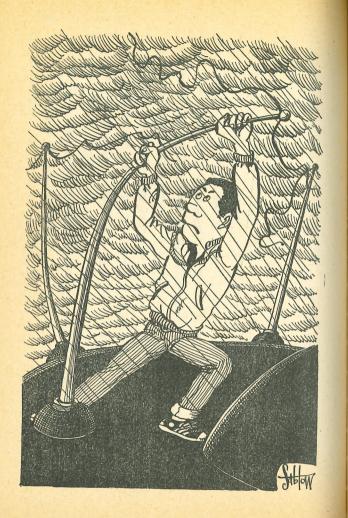
中枢は精神を張りつめて気をとり直すと真純に話しかけたが、烈風と豪雨のため、よく聞こえない。あせった彼は、テレパシーを使えば簡単なのもすっかり忘れ、大声を上げてしまった。地球人三名は、驚いた表情で彼を見た。霊峯山人、いったい何事です――？

「さあ、地球の勇ましい少年よ。早くも君の助けが必要となった。この嵐は、悪霊どもが送り込んで来た、暴風雨発生装置によるものだ。それを、すぐにこわしてもらいたい」

「でも、どうやってです。それに、どこにあるのか、ぼくには判りませんよ」

真純はいぶかし気に問い返したが、次の瞬間、変な形の機械の上にいるのに気づき、呆気にとられた。説明をする時間を惜しんだ中枢が、いきなり彼をここにテレポートしたのである。危うく機械から吹き落とされそうになり、あわてて方々に突き出たアンテナみたいな鉄棒にしがみついた真純の頭に、

〃真純君。これが敵の攻撃兵器なのだ。これが、大暴風雨を発生させているので、装置をこわし

てしまえば、霊域はすぐに元の静けさを取り戻すのだ〟
オーラ星中枢の思念が響いた。ゴラム星ロボットの武器を発見してやっと落ち着いた彼は、テレパシーの使用を思いだしたのである。さすがの精神体も、予期せぬ襲撃にかなり逆上していたのだ。
「こわすっていっても、こんな丈夫なもの、素手じゃ、どうしようもないですよ。せめて鉄の棒か、棍棒でもあればともかく――」
真純は抗議したが、
〝なに、それは、先刻君達をおどかしたロボットと同じで、悪霊どもの敵意を実体化した思念にすぎない。幻影と同じじゆえ、君の一撃で消えさるであろう〟
中枢が無責任にあおったのを真に受け、全身の力をこめると、固くにぎったこぶしをごつい機械に叩きこんだ。
「いたっ、痛い」
激痛が全身を貫き、彼は、手の骨が折れたかと思った。幻影どころか実体も実体、ゴラム機械軍が誇る特殊兵器の一つである。鉄棒でなぐったところでこたえないだろうに、オーラ中枢も、かなりいい加減だ。
真純は痛みをこらえて右こぶしを調べた。幸い骨は折れていなかったが、皮膚が大きく破れ血

があふれている。
「チェッ、悪霊め。急に実体化したかな？」
気のいい彼は、まさか霊峯山人が無責任な指令を発したとは思わず、敵のせいにすると次の手段を考え出すために、機械をよく調べた。ちょうど、魚雷を押しつぶした感じのいびつな丸い形で、いたる所に突き出たアンテナの間にケーブルが張りめぐらされている。本体は真っ黒であったがケーブルは銀色をしており、その輝きが変わるたびに雨や風の調子も変化する。濃く光れば風は強く渦巻き、白味を帯びると雨は激しくなる。
「判った。このアンテナが暴風雨を変化させる電波かなにかを発信してるんだ！」
よろこんで叫ぶと真純は、手当たり次第にその銀線を引きちぎり始めた。この判断は正しかった。彼があまり苦労せずにケーブルを全部むしり取り、おまけにアンテナまでへし曲げてしまった時、大嵐はピタリと治まった。急に空が明るくなると、あたりは、再び山気が澄み、眼にしみる緑に囲まれた聖地に戻った。次の瞬間、真純はあの台地に座っており、四人の祝福を受けていた。中枢がテレポート能力を発揮したのである。
「よくやった。さすがはこの小峯山人の眼鏡にかなった、知的生物！　見事に初の大役を果たしたな、有り難い」
パンシーが言った。

「まっこと目覚ましき活躍ぶり。汝の霊格は、これで、一段と高くなったであろう」
無責任にあおって真純にけがをさせたのも忘れ、中枢もほめたのだが、彼の右こぶしから流れ出る血を見て、急に申し訳なく感じたらしい。
「ちょっと腕を出しなさい。そんな簡単な傷など、わしの念力ですぐ治してしんぜる」
こう言って大仙人の手で真純の腕をつつむと、けがをした組織に念力を加えた。切れた静脈はつながり、皮膚はぴったりと合わさる。彼の傷は少しの跡も残さずに治った。
「すっごい、大仙人の力。奇跡の霊能者」
「甲斐君の働きもすばらしかったけれど、霊峯山人の治療能力もたいしたもんだ。日本で病院を開かれたら、大成功なさいますよ」
中枢の無責任さを知らない美可と竜介は、驚きの声を上げたのである。
だが、中枢としてはぐずぐずしていられなかった。このままでは、またワープ反動砲の攻撃を受け、空の一部を転移されるだろう。そうなったら、同じことのくり返しだ。防御壁を強めなくてはならない。
その時、霊峯山人の超能力に感激した美可が、まったく元通りになった真純の右手を振りまわした。はずみで、彼の内ポケットから何か銀色の小さな円盤みたいな物が転がり落ちる。
「あっ、いけねえ。ミカロン、そう、乱暴に腕を振らないでくれよ。これ、ぼくの大事な宝物な

んだぜ。さっき暴れた時、ポケットから落ちかけてひっかかってたのだろうな。でも、なくさないでよかったよ」
　あわてて拾おうとする真純に、中枢は声をかけた。
「なんじゃね、真純君、それは。ひどく大切なもののようだが？」
「そうなんです、山人。ちょっとご覧なさい」
　こういいながら、彼は銀色の円盤を中枢に渡した。山人のしわの多い手のひらの上で、それは陽光を受けてギラリと輝いた。また明るい光が樹々の緑を照らし、空気はオゾンの香に満ちている。先ほどの大暴風雨など、ウソとしか思えぬ好天気になっていた。
「なにかね、これは。おまもりかな？」
　山人は、また聞いた。
「いえ、メダルなんです。霊峯山人。ぼくにとっては、何よりも大事な銀メダルです」
「ああ、あの時の賞品か」竜介が、判ったという調子で口をはさんだ。「この正月、鎌倉市の中学校柔道大会で優勝した時にもらったメダルだな」
「うん。なんたって、中学生活最後を飾った優勝だもんな。照れくさいから黙ってたけどさ、持ってると柔道が強くなるような気がしてね。いつも身につけてたのさ」
「あら、甲斐君。意外なとこがあるのね。表彰式が終わった時、ちょっと見せてくれただけで、

その後、頼んでも出さなかったじゃない。私、てっきり銀行の貸金庫にでもしまってあるのかと思ってたんだ。
なーんだ。あなたもおまもりにしてたの、クラシックね！」
　B・F二人からまきあげた例のミニミニ・ピストルを全部、ポシェットに入れて持ち歩いている美可は、自分のことは棚に上げてひやかした。
「いやー、別に隠していたわけじゃないが、なんとなく恥ずかしいじゃないか。え、ミカロン。高校生になろうってのに、いつも柔道大会の優勝メダルを持ってるなんてさ。そんなこと、言えやしないよ」
「うん。そりゃそうだ。それに、このメダルはスターリング・シルバー、つまり純銀なんだろう。つぶしても結構、いい値がするんだから、いつも体につけていて、なくさないようにした方がいいよ、うん」
　竜介にまでからかわれ、真純は困り果てた。
「もういいでしょう、山人。返して下さいな。こう、からかわれるとは思わなかった。やはり、貸金庫にでもしまっときゃよかったなあ」
　こういいながらメダルを受け取った彼は、一瞬妙な顔になった。
「どうしたんだ、真純。まさか怒ったんじゃないだろうな」

からかい過ぎたかと気にして訊いた竜介に、
「いや、そんなことを気にするぼくだと思うかい。何でもないんだ。ただの気のせいさ」
真純は笑い顔で答えたが、内心は、解せぬ思いを抱いていた。
〝おかしいなあ。かなり重いメダルだったのに、山人から返してもらったら、妙に軽くなってるぞ〟
霊峯山人と小峯山人の二体のオーラ星人はこの時、別な作業に精神力を使うのに忙しく、真純の抱いた疑問には気づかなかった。

一方、アリエルは、せっかくワープ反動砲でオーラ星のバリヤーに穴をあけたのに、すぐ精神波で塞がれてがっかりしていた。
「フォックス参謀総長。我々は敵を甘く見すぎていたのかもしれない。やっと奴らの精神波バリヤーの一部を破壊したと思ったら、もう塞がれてしまった。これは意外である」
「いや、閣下。そう気落ちされることはありませんぞ。その点は本官も抜かりありません。オーラ星人どもが穴を埋める前に、暴風雨発生器を奴らの世界に送りこんであります。今頃はオーラ星人やあの正体の判らぬ下等生命体は、大嵐にみまわれ息も絶えだえになっておりますぞ。なんと申しましても、あの発生器はゴラム機械文明の努力の結晶ですからな。ものすごいパワーで宇宙史上例のない烈風、豪雨で連中を打ちのめしたにきまっております。時をみはからって、またワープ反動砲でバリヤーに穴をあけましょう。オーラ星人どもの死霊とチビ達の死体が散乱していると思います」

かんじんの発生器が、真純によってこわされてしまっているのを知らない参謀総長は、信念に満ちて答えた。アリエルも満足気にあごをがたつかすと、二人はゆったりした気になり立ち続けた。
「どうかね、フォックス。もう連中は、大暴風雨で全員死に絶えた頃だと思うが」
かなりの時間が経った頃、我慢しきれなくなったアリエルは、参謀総長にさいそくした。
「そろそろバリヤーを壊し、中の様子を見たらどうかね」
「はっ、閣下。ちょうど、暴風雨発生器の働きも止まった頃ですから、タイミングもよいと思います。今、ワープ反動砲発射の準備をさせましょう。発射は閣下のお手でどうぞ」
相変わらず如才ない返事にアリエルは満足したが、「働きも止まった頃――とはなにかね？」とたずねたのである。
「はっ、閣下。細かいことなのでご報告致しませんでしたが、私が参謀総長を拝命した時、あの装置にタイマーをつけたのであります」
「なに、タイマーを？」

「はい。故マックス前参謀総長はきれるロボットではありましたが、多少、用心深さに欠けるきらいがありました。

あの装置もそうでして、一度作動し始めたら、エネルギーがなくなるまで働く仕組みになっておりました。これは、大変なむだであります。本官は、省エネの趣旨から、十分に暴風雨が荒れ狂ったら自動的に作動を中止するようにストップ・タイマーをつけたのであります」

「そうか。故マックスもきれると思ったが、貴官の方がきれ者のようだな」

アリエルは満足したようにいい、参謀総長就任後、初めて前任者より高く評価されてよろこんだフォックスは、即座にワープ反動砲発射の準備を整えた。

「さあ、閣下。発射準備完了です。どうかあのバリヤーの一部を転移させ、オーラ星人どもの末路をお確かめ下さい」

「グフフフフ、グフフフ。これで、奴らの最後を楽しめるか。まあ、精神しか持たぬ敵ではあったが、それなりに善戦しおったわい。好敵手であったといえる」

灰色のテレスクリーンには、いまや黒に近い紺色となったオーラ星が浮かんでいる。その一部が銀色になっているのは、先刻の攻撃でバリヤーに穴をあけられ、オーラ星人があわてて埋めた跡なのだろう。最初は薄い青だったその場所が、いつの間にか銀色に変わっていたのだ。アリエルはその事は深く考えず、金色のパネルの上にメタリック・シルバーの腕をかざした。

ワープ反動砲攻撃再開である。

次の瞬間、狙いをつけたその銀色の即席バリヤーは宇宙のかなたに転移され、後にはポッカリ穴があく――はずだったのに、そうはならなかった。銀色は少しも変わらず、オーラ星は攻撃を受ける前と同じ色と形でテレスクリーンの中にぽっかり浮いていた。

「ウヌ」「あっ」

アリエルとフォックスは、驚いた叫び声を上げた。反動砲が効果を示さない――？　思わず顔を見合わせる。

「閣下、二発目を」

アリエルの腕がパネルの上で躍った。先刻の銀色のすぐ横にパッと大きな銀色が現れた。グォーン、ギューン。アリエルとフォックスは、またもや一緒にうめいた。

「閣下、三発目を」

ワープ反動砲のパワーを最大に上げて攻撃したが、やはり結果は同じであった。銀色の面積がずっと広くなっただけで、オーラ星人の張ったバリヤーは少しも破れていない。

「閣下四発目を」「五発目――」「六――」

後は、もう、めちゃくちゃであった。半分やけくそになったアリエルは、気が狂ったようにパネルの上で手をふりまわした。知らない者が見たら、ディスコ宣伝用のロボットが踊り狂ってい

るところだと思ったに違いない。

二体が我にかえった時、テレスクリーンにはギラギラと銀色に輝く球体が浮かんでいた。

「なんだ、あれは。オーラ星はどうなった」

アリエルはわめいた。

「閣下。あれがオーラ星であります」

フォックスが消え入りそうな口調で答えた。心なしか、体まで小さくなったようだ。

「なにを馬鹿な。あれだけ反動砲で攻撃をかけたのに、オーラ星がまだ残っておるなど信じられん。あれは転移されたオーラ星の残像ではないか？　あまり急激に攻撃され、虚像を残して消えたのではなかろうか」

とても信じられないフォックスの返事に、逆上したアリエルは、自分なりの理論をつくると参謀総長にかみついた。

ガーン、グヮワーン、ゴーン

インディ五百マイル用レーサーもかなわない轟音である。フォックスはすっかりいじけて、

ビーン、ビーン、キーン、ススー

まさに、エンスト寸前といったかすかな調子で応じる。

「なんだと、あれが、ワープ反動砲の猛攻を防ぎ抜いたオーラ星だというのか。うーむ。銀色に

光っているのは、敵がひそかに開発し、張りめぐらした新バリヤーだというのか」

アリエルは、また怒号した。フォックスは、ますます小さくなり黙ったままである。

「恐るべきオーラ星人。我々に油断をさせて時間を稼ぎ、その間に新兵器を開発し実用化しおるとは——

この分では、フォックス。あの貴官自慢の暴風雨発生装置も、とっくに破壊されておるぞ。間抜けが。なにがストップ・タイマーか。やはり、マックスの方が使えたわい」

また前参謀総長より無能ということになったが、今度のアリエルの発言は真実をついていたから仕方ない。

真純がメダルの重さを気にしたのもむりはなかった。この銀色の新バリヤーこそ、オーラ星中枢とパンシーが、真純の銀メダルからスターリング・シルバーをほとんど抽出し、それで強力にした精神波で造ったものなのだ。

惑星表面のモヤを濃紺にしたままでゴラム機械軍を安心させておく一方、その下側に念力で、このバリヤーをせっせと張ったのであった。スイカに塩ではないが、銀要素はこの上なく効果的で、バリヤーは強化された。

物質だけだったらワープ反動砲でふっ飛ばされる。精神だけだったら、逆に何も影響は受けない代わり、中心になる小惑星を失い宇宙ルンペンの身に落ちる。

物質と精神、それらをうまくミックスして強力にして作ったこのニュー・バリヤーこそ、どんな攻撃からでもオーラ星を守るものだった。おたがいに欠けた所を補いあうのだから、物質だけ、または精神だけ、の攻撃など平気ではね返したのである。

「参謀総長、ワープ反動砲を使い過ぎた結果、ワープエネルギーが莫大にたまり、本艇は危険な状態にあります。エネルギーを適当に放出いたしませんと、この司令宇宙艇は暴走ならぬ暴ワープを起こし、想像もできぬ宇宙空間へ飛び込むことになります。

お聞きですか参謀総長。すみやかに適切な手段を講じませんと、オーラ星相手の戦闘どころではありません。本艇そのものが危機に陥ります」

追い打ちをかけるように、狼狽しきった宇宙艇艇長の報告が司令室内に響き、フォックスとアリエルは驚愕したのである。

その頃オーラ星では、すっかり平和な雰囲気に包まれた台地で、真純がまだ頭をひねっていた。

〝おかしいなあ。確かにぼくの大事な銀メダル、うんと軽くなったぞ。息を吹きかけたら、宙に舞い上がりそうな感じになったもの〟

浮かぬ顔の真純に心配して美可が声をかけた。せっかく悪霊の攻撃を防いだのに、甲斐君どう

したのかしら？

「あまり活躍して疲れたの？　元気ないわね」

「ああ、ちょっとばてたな」

と、真純は適当にあいづちをうつ。オーラ星人二体は、バリヤーにすきまなどないかと点検に行っており、台地には地球人三人しか残っていなかった。

ボアッ、バッ

銀色のバリヤーに撃突した単座式奇襲艇は、瞬時にして赤い炎と化すと、宇宙の闇の中に消えていった。

バッ

続いてまた一機。バリヤーを赤く染め、宇宙の塵となる。

バリバリバリバリ

真空の宇宙空間、音こそ聞こえなかったが、それだけにいっそうの迫力を見せ、奇襲艇は空しく熱線銃を撃ちながら体当たりを続ける。

その光景をテレスクリーンでながめながらアリエルは、フォックスに言った。

「参謀総長。体当たり攻撃も効果をみせぬぞ。他にうつ手段はないのか！」

「はっ、司令長官。これが我々に残された、最後の戦法であります。ワープ反動砲も効果ないうえに、反物質攻撃さえあの不思議なバリヤーには無力。その上、ぐずぐずしていたならば、ワープエネルギーが暴発して、この司令艇はどこに飛ばされるか判らない。これが、当ゴラム機械軍団の最終戦術であります。まさか、閣下は、この好敵を残し、逃亡ワープをしようというお考えではないでしょうな」

　テレスクリーンをまた赤く染めた体当たりの炎が、フォックスの銀色の顔を奇妙に輝かせる。彼も必死になっていた。

「なにを馬鹿な。このアリエルが、たとえワープエネルギーの暴発を恐れたとて、そんなことで転移を行うものか！　うっかり変なワープに入ってみろ。莫大なエネルギーを野放しにしたことになり、本艇は、二度とこの地を捜せぬ空間まで飛ばされてしまう。

ということは、この奇妙な精神体との闘いに負けることだ。敗北を知らぬ我が軍団にとり、最後の瞬時まで攻撃を続けてこそ、意義がある。見ろ、この壮烈なるゴラム軍ロボットの栄えある散り方を――」

　また大きく広がった紅（くれない）のかたまりを指さすと、アリエルは気負った口調でいった。

「最後の一ロボットになるまで、体当たり攻撃を続行だ。それで我が軍団が全滅したとて、敵を目前に司令艇のみが逃亡ワープを試みるより価値あることである」

　かなりな暴論であったが、なにせ機械頭で回転がきかない単純構造の戦闘ロボットだ。

「だが、司令長官。単座式奇襲艇ではまったく効果ありません。こうなった以上は――」

アリエルにあおられたフォックスは、いっそう過激な提案をした。

「……仕方ありません。重戦艇を一隻、たたきつけましょう」

「なに、重戦を！」

　今度は逆に司令長官が驚いたが、決然とした参謀総長のまなざしにうながされて、きっぱりと命令を下した。

「ゴラム軍一級重戦艇ブルースーペリオール号艇長に命ず。ブルースーペリオール号艇長に命ず。貴艇は直ちに全エネルギーを用い、敵本体にワープを敢行せよ。くり返す、ワープを敢行せよ」

と、テレスクリーンは全面、赤紫に照りかえった。やがて画面が元の色を取り戻した時、アリエルは絶望的な声を上げた。

「おお、なんたることだ。一級重戦艇のワープ体当たりをも防ぐバリヤーとは。とても信じられん。フォックス。貴官はどう考える」

「はっ。本官もまったく同じ考えであります。ゴラム機械軍団一の装備を誇るブルースーペリオールのワープを食い止め、ただの塵にしてしまうバリヤーがあるとは――」

　ゴラム機械軍の両首脳が仰天したのも、当然であった。同軍団の重戦艇、それも一級ともなれ

ばロボット戦士一万人を乗せ、単座式奇襲艇百隻、中型強襲艇十隻を有する、小惑星なみの質量を持つ宇宙最強ともいうべき巨艇だったからである。

「フォックス。こうなった以上、ブルースーペリオールの栄光ある体当たりを無にすることはできぬ。判っておるな、わしの決意を」

「はっ、閣下。もちろんであります。次は、本司令艇が玉砕する番。本官とて、すでに覚悟はできております」

こう言いながら、体当たりにもっとも適した地を選ぼうと、相変わらずテレスクリーンに銀色に浮かぶオーラ星を見つめたフォックスは、よろこびの声を上げた。

「閣下、ごらん下さい。あそこを」

やはり、小惑星なみの重戦艇の体当たりは功を奏した。オーラ星の超能力バリヤー、闇黒の宇宙空間に銀色に輝く球体の一部に、細く線が走っているではないか。

「見よ。フォックス。ブルースーペリオールの働きは無駄ではなかった。見事、難攻不落の敵バリヤーに大損害を与えたぞ。おお、参謀総長、今こそチャンス。あの亀裂部より敵星体への突入を決行しよう」

興奮したアリエルは、自分が先に見つけたような口調で言ったが、参謀総長は意外に冷静に答えた。

「それは無理です閣下」

「なにが無理だ」

「確かに敵バリヤーに損傷こそ起こさせましたが、あの亀裂はごくごく狭いものであります。いかに我がゴラム軍が技術の粋をつくしても、本司令艇はおろか、単座式奇襲艇さえ侵入させることは不可能であります」

「なに、攻撃不可能だと。突入は無理だと。では、せっかく敵バリヤーに亀裂を生ぜしめたというのに、貴官はみすみす――」

アリエルが怒り狂いかけた時、

「本官が単身ワープを決行します。憎むべき敵精神体のふところ深く侵入し、必ずや中心より撃滅してみせましょう。なまじ、大勢で行くと敵に悟られます。本官一人で十分。ゴラム機械軍団のため、玉と砕けても怪精神星を破壊致します。閣下は、テレスクリーンにて戦果を十分にご確認下さい」

フォックスが決然と言った。

「そうか、参謀総長。ゴラム機械軍団のために、見事に散ってくれるか。やはり、マックスよりも使えるロボット！」

アリエルが持ち上げた時、フォックスは手早くハンディワープ装置を口に入れていた。まこと

に手軽な器具であり、ロボットの歯の間にさしこむだけで、本体を何万光年のかなたまで転移させる力を持つ。反動エネルギー消滅作用も働くので、暴発の心配もない。その代わり反動エネルギーを利用した兵器は使えないが、仕方ない。

　次に首のつけ根にあるボルトを抜き穴をあけると、ハンディ物質変換機を挿入した。これさえあれば、ロボット構成要素を完全に分解して、どんなものにでも再構成できる。有機質の体にだってなれるのだ。フォックスにいわせるなら、これまた、ゴラム機械軍科学力の最高峰ということになろう。最後に、ハンディ知性感受器ミニサイズを頭の中に収めた。これで準備完了である。

「では、閣下。本官は最後の勝利をつかみに参ります。たった今、情報管理室に問い合わせましたところ、ワープエネルギーは莫大にたまってはいますが、なんとか、しばらくの間、暴発は抑えられるとのこと。本官が任務を遂行しても、まだ十分に時間的余裕はあるそうです。敵撃滅の有り様をお楽しみの後、暴発せぬように、ゆるゆるとワープを行って下さい。閣下、では、さらば」

　こういって亀裂を再確認しようとしてテレスクリーンを見たフォックスは、それまでの勇ましさもどこへやら、しまらない声を出した。

「あれ、割れ目が埋まっている」

「なにを、もう敵はバリヤーを修復しおったか。おのれ、にっくき精神体。こら、フォックス。

貴官が調子に乗って無駄話をしている間に、ブルースーペリオール号の戦果は、空しくなってしまったぞ。間抜けめが」

　お天気屋のアリエルは、すぐ態度を変えると参謀総長を叱りつけた。こう持ち上げたり、こき下ろされたりしたら、いくらフォックスでもかなわない。大しけで船酔いに会った人間のような具合で、またもや落ちこんだのである。

　司令室内には、しばらく静かな時が過ぎた。フォックスがあまりにも打ちのめされた様子なので、さすがのアリエルも、言い過ぎを反省したのである。

「許せ、参謀総長。これは、貴官の責任ではない。敵の防衛力をたたえるべきであり、貴君をののしるのではなかった。すまぬ」

　かなりの時間が経った時、こらえきれなくなったアリエルは、わびを入れたが、フォックスの電子回路はぼけてしまったのか、何も答えず立ちつくしていた。ガクンとあごを下げ、だらりと両手を下げて脚を両側にゆるめ、なんとも情けない姿勢だ。

「あーあっ、あんなに言うのではなかった。参謀総長が、こんなに感受性が強いとはな」

　後悔しながらテレスクリーンを見たアリエルは、今度こそ腹の底から驚いた。先刻まで小惑星全体を覆い銀色に輝いていたバリヤーは消え、淡い薄青色のガス状球体が浮いていたからである。また叫びたてる。

「フォックス。おい、フォックス。バリヤーは消えた。敵はやぶれたのだぞ」
だが、なにも返事がないのでふりかえったアリエルは、参謀総長の姿が消えているのに愕然となった。
「おお、フォックス。貴官こそゴラム機械軍団の誇り。敵バリヤーの消えたのを知り、いち早く敵陣一番乗りをしおったな！　さすがは参謀総長。司令艇が後を追うから待っておれ」
アリエルが感激した通り、呆然自失したままテレスクリーンを見つめていたフォックスは、はっと思った時、敵のバリヤーが消えているので反射的にオーラ星にワープしてしまったのである。今、敵の中心に一人でいるはずだ。しかも、「しまった。やつは、武器を持っていない」とアリエルが口走ったとおり、他の必要装置は完全に身体の各所につけていたのに、武器は何一つ持っていなかったのだ。玉砕も結構だが、武器がなくてはいくら戦闘ロボットでも強敵・精神体と戦うことはできない。早く後を追わぬと――
「あっ」テレスクリーンに目をやったアリエルは、驚きのあまり一瞬、電子回路をショートさせた。バチバチと小さな音がし、頭の後ろから白煙が出る。マックスと同じく、内側から焼け死ぬかと思ったが、幸いたいしたことはなかった。
白煙はすぐおさまり、司令は意識を取り戻した。と思うや、狂気のようにテレスクリーン下のパネルに手をふりかざす。いったい、どうしたのだ。アリエルは、無防備の敵にワープ反動砲、

反物質砲などを立て続けに放ったのである。これでは、敵を撃破できるかもしれないが、一番乗りの勇士、フォックスまで粉砕してしまう。
だが、「うぬ」と、うなったアリエルが見つめているテレスクリーンの中には、今度は変にベタベタした感じの白っぽいバリヤーで囲まれたオーラ星が、何事もなかったように浮いていたのであった。
「駄目か。やはり恐るべき敵だ。またたく間に異なったバリヤーを張りめぐらし、我が軍の攻撃を無効にするとは――
だが、フォックスはどうなっただろう。この強敵のまっただ中にただ一体、しかも武器も持たずにいるのだ。もう彼の死は覚悟せねばなるまい。こうなった以上、全エネルギーを使って攻撃を加え、この新バリヤーに効果ないと判った時には、いさぎよく本艇も突入し、敵精神体と刺し違えて大宇宙の華となって散ってやる」
なにせ機械のことだ。いくら同じことをやっても、まったく疲れもあきもしないアリエルは、こう怒号した。
その頃、フォックスは一面の青いモヤの中で、やっと意識を取り戻しかけていた。

第6章　美可、捕らわる

突如、台地はゆらぎ、四囲の樹々が波打ち、空も青さを失って霊域全体が壊れそうなショックが来た。真純、竜介、美可の三人は体を寄せあうと、辛うじて台地から転げ落ちるのを逃がれた。しっかりと手を組み合わせ目をとじる――この世界に来てから、すっかりおなじみになった姿勢を、また、しばらく続けた頃、やっとあたりに平静さが戻った。

恐るおそる目を開けた美可は、

「あれ、大変よ。甲斐君、陣馬君。あの空を見て」

真上を指さして悲鳴を上げた。

「うーん。なんたることだ！」

つられて天頂に目をやった真純もうめいた。清澄な青空に、なんと、それまでなかった亀裂が一本、さっと走っている。幅と長さはさほどでないが、直接、宇宙空間に通じているらしく、怖いほどに濃い黒さが底のない深さを示していた。

「やばい。バリヤーを破られた」

こう叫んだ真純が思わず立ち上がり、しびれた足がよろけて倒れかかった所を、後ろからしっかりと支える者がいた。続いてたくましい腕が、ぐるりと胸にまわされ、彼はなんとか台地に足を踏みしめて立つことができた。

「ああ、霊峯山人。今のはいったいなんです？　また、悪霊の攻撃ですか？」

聞かれたオーラ星中枢は、うっかり〝いや、ゴラム機械軍団大型宇宙艇が体当たりしたのだ〟と本当のことを言いかけ、苦しい返事をした。

「ううん、そうじゃ、真純君。遂にあせった悪霊めが、霊力を総結集して我等に叩きつけたのじゃ。しぶといというか、しつこいというか、危うく我が方の防衛線を破られるところであったが、辛うじて逃れたのじゃ。

早く、あの亀裂を埋めねば――」

せわしなく真純の胸の辺をさすりながら、中枢は続ける。

「もう大丈夫です。山人、一人で立てますから」

大仙人に体をさすられ、恐縮した真純はこういって手を離してもらうと、あらためて空を見上げた。

「おっ」驚いた大声で、「もう亀裂は埋まっている。山人のお力ですか？」と聞いた。

「ああ、そうじゃ」
なんとなく歯切れの悪い返事が戻る。
「うわー、素敵。また大仙人が霊能をフルに発揮されたんですね。もう、悪霊の攻撃を防いだなんて、本当に全能の方ですわ」
美可が感激したのにもかかわらず、「むむー」といって、いっそう落ちつかなくなった山人に、地球の少年、少女は妙な気分になった。
「だけど、いったい、どういう方法を使われたのです」
竜介がたたみこんだので、霊峯山人ことオーラ中枢は弱り切った。〃やはり、正直に話すべきだったかな〃こう後悔した時は遅かったのである。
「あれ、ぼくのメダルがない。おかしいなあ」
竜介と美可の間に腰を下ろし、こった肩や足をもみほぐしていた真純が、突拍子もない声を上げた。
その声にオーラ星人が、思わず霊峯山人の身体をのけぞらした時、
「山人。ひょっとしたら、あなた、あのメダルを何かに使われたのじゃありませんか」
真純の鋭い声が飛んだ。それまでにも、《銀泥棒》の行為をいつも恥じていた中枢には、もう、逃げを打つゆとりはなかった。

「すまぬ、真純君。悪霊の攻撃に対抗するには銀が一番役に立つので、つい借りたのだ。なに、すぐ返す。大事な宝を無断借用して申し訳ない」
こう言うと、いつの間にかそばに来ていた小峯山人のパンシーに、テレパシーで命じた。
〃早くバリヤーからスターリング・シルバーを回収し、元の形にするのだ。その代わり防御には――〃
小峯山人の姿を残したパンシーは精神体だけで真純と竜介のまわりをひとしきり動きまわると消えた。大峯山人は固くにぎった右手こぶしを真純に突き出すと言った。
「いや、もっと早く事情を説明すればよかったのだが、なにせ、不意打ち続きで余裕がなかった。許してくれ。ほら、君の宝物はこの通り、元の形にして返す。受け取ってくれたまえ」
開いた手の中で光る柔道大会優勝記念メダルを手に取り、真純は安心した。完全に元の重さになっていたからである。
「すると――」
何か問いかけた彼に、素早くその考えを読みとった霊峯山人は答えた。
「そう、当初は半分ほど銀要素を借りてバリヤーを張った。それくらいなら気がつくまいと思ったのだ。黙ってやったのは悪かったが、君にとっては大事な宝物だ。断られたらまずいと心配して、戦争が終わったら、そっと戻すつもりだった。が、予期せぬ敵の猛襲を受けバリヤーには亀

裂が入り、埋めるには残り全部を必要とした。幸い、その効果があって、悪霊どもの攻撃を防げた次第。気を悪くせず――」

ひどくしどろもどろではあったが、なんとか意味が判る説明に、納得した真純はいった。

「そうだったんですか。最初からそう頼んで下さればよかったのに。そんな重要な頼みを断るほど、ぼくはケチではありませんよ」

この純真な少年を、まだごまかしているオーラ中枢は、いっそう気が重くなったが、いまさら本当のことはいいにくい。メダルのバリヤーを撤去したら後はどうなるんです――こう聞かれないうちに、

「では、わしはまだ仕事が残っておる。君達はここでたっぷり霊気を味わい、元気を回復しなさい」

こう言うと、あたふたと台地から飛び下り、パンシーとともに針葉樹の濃い緑の中に姿を消した。

「山人の能力は想像以上に強力だな」

深呼吸をしようと勢いよく立ち上がった竜介は、ついよろめいた。足がよろけたのではない。身体が妙に軽くなったのだ。ふとベルトを見ると、穴二つ分ほどゆるくなっている。

「おい、ミカロン。おれも苦労しただけのことはある。すっかり痩せたぞ。見ろ、このスマートな腹、ひきしまった腰。君に、陣馬式美容法を教えてやろうか」

この非常時にいかにも彼らしいのんびりしたことを言ったのである。

一方、中枢とパンシーは他の端末を総動員して、大活躍をした。銀要素を返したのでバリヤーはなくなり、今、オーラ星は無防備である。早くバリヤーを造らねばならない。竜介の腹から、ひそかに余分な脂肪を念力抽出して精神波にまぜて強力にすると、異様なバリヤーをベタベタとオーラ星中に張りまわしたのだ。

フォックスは気がつくと、奇妙なモヤの中にいるのを知って驚いた。懸命に事情を思い出す。

〝そうだ。オーラ星のバリヤーがなぜか急に消えたのを無意識に感じ、反射的にワープして敵地に乗り込んだのだ。さすが、ゴラム軍団参謀総長。あのマックスなどより、おれ様の方が優秀だわい〟

ちょっと得意になると、情勢を探ろうと、さっそくハンディ知性感受器ミニを作動させる。

〝キティは、今頃、どうしてるかしら〟

と、途端に思いもよらぬ思考が飛び出し、フォックスは驚いた。

〝こりゃ、オーラ星人の精神ではないぞ。彼等がどこかから連れて来た、下等知生体の念波に違いない。だが、これこそチャンス――〟すぐに冷静になるとフォックスは思った。〝この思考を

追求すれば、奴らの正体が判る〟

だが、ミニのせいか、どうも感度が良くない。おまけに、やたらと《キティ》《キティ》が出て来て混乱する。とにかく、その言葉の意味を調べて、フォックスはあきれかえった。なんと、この下等知的生物はこんな場所に来てまで自分が大事にしていたらしい、より知性の低い生きものを心配しているのだ。

〝しめた〟フォックスは、ごついメタリック・シルバーの手を叩いた。キティとかいう生物に変換すれば、正体不明の生命体の一つに接近することができ、はっきりと彼等の秘密をつかめるだろう。

キティに関して得た全データをハンディ変換器にインプットすると、全身にパワーを作用させた。金属製の硬い彼の身体は、柔らかい有機体にちぢまった。全身、薄い茶と白の毛に覆われる。フォックスは、瞬時にして、キティの形に変わったのである。

〝うまくいった。この姿なら奴らに近づいてもあやしまれない。行動開始だ〟

特殊装置をすべて猫の体の各所にとりつけると、ゴラム軍参謀総長は、その思考波の生物がいる台地にミニワープした。幸いオーラ星人はおらず、マスターに似た形の奇妙な知性体が三つほどゴロゴロしていた。そのうちの一つ、小柄な姿の美可は、彼の身体を見て叫んだ。

「あら、キティ。お前、キティじゃないの。どうして、こんな所へ来たの？」

真純も竜介も変に思ったが、なにしろ、おかしなことが続いている。そうあやしみもせず、美可が仔猫を抱き上げるのを見ていた。

「ミカロンは、いくらつっぱってても、まだ子供だね。こんな変な所に来てまで、仔猫ってと目がないんだからな――」

二人のささやきにかまわず、美可はフォックスをひざに乗せると、しんみりしたメロディーを口ずさみ始めた。あの『セントルイス・ブルース』である。元の世界にいた時、キティがブルースを好んだので、うろ憶えのを歌ってやったのだ。

アイ　ヘイトシー　ダト　エブニング　サンゴーズ　ダウン　オー　アイ　ヘイトシー

お義理にもうまいとはいえなかったが、参謀総長は電子回路の奥深く、何か妙に心温まり、のんびりした気持ちが起こるのを覚え、とまどった。あわてて、そうした気分を抑えると、美可の思考を知性感受器で調べ始めた。だが、ともするとメロディーにひきこまれてぼっとなり、あわてて仕事にとりかかるのであった。

〝ハハーン。この三体は、はるかに離れた辺境島宇宙から、パンシーめがテレポートで連れて来おったのか。なに！　連中が持っている物質から精神力で実体構成要素を抽出し、精神波に加味してあの驚くべきバリヤーを作り出した？

これはショックだ。大発見だ。早く、こやつをアリエル司令のもとに連れ戻り、徹底的に分析、

研究して対策を立てる。そうだ！　彼等の母星、地球とかいうのに行けば、さらに役立つ資料を得られるに違いないぞ——」

この時、

「美可さん。その怪物を捨てなさい。それは、敵、悪霊ロボット軍のスパイだ。さっき、バリヤーがこわれた時、潜入したに違いない。早く殺さねば、一大事になる」

霊峯山人の声が鋭く響いた。

「可愛い仔猫ちゃんが悪霊ロボットのスパイ？　信じられないわ」

美可の反論にあい、中枢が納得させようとしたが遅かった。

〝幸運にも手に入れた情報源だ。十分に利用してやる。オーラ星人め、今に見ろ〟

フォックスは、ただちに行動に移った。

霊峯山人の忠告にすぐ従わなかったことが、美可の命取りとなった。オーラ中枢の精神波を感じるやいなや、彼は彼女を伴い、短距離ワープを行うとゴラム機械軍団司令室に戻ったのである。

「でかした、フォックス。それでこそ、我が軍大参謀総長の名にふさわしい」

彼の報告を受けたアリエルは、感心して言った。

「よく、敵バリヤーを内側から突破して帰るのに成功したな」

オーラ星新強力バリヤーは、外部からの攻撃は表面をすべらせる、つまり、うけ流してしまう

のだが、中から外へ出るのを防ぐ力はない。それを知らない司令長官は、フォックスの働きにすっかり彼を買いかぶった。

「その下等生物の心理を分析、解読して、オーラ星撃破の手掛かりをつかもう。連中の精神力はたいしたことはないが、物質要素がオーラ精神体と合致すると、大変な力を発揮するようだ」

美可は仰天しきって得意の悲鳴すら出なかった。思いもよらず聖地にキティそっくりの仔猫が現れた。抱き上げてあやしているところに、霊峯山人の警告がとんだ。ここまでは、はっきりしていたのだが——

今、彼女がいるのは、無表情な壁に四方を囲まれた殺風景な部屋であった。ただ、一面の壁に大きなテレビスクリーンのようなパネルが灰色に鈍く光り、その下に金色のパネル、横には同じく金色のデスクがセットされ、無人のアームチェアが一つ、ぽつんと置いてある。

「あれ、ここはどこなのかしら。おかしいわ。あの森はどうしたの。それにキティもいない！」

おびえた彼女の前に、メタリック・シルバーに輝く大小二つのロボットが現れた。大きい方には、見覚えがある。

「あっ、あなたは、先に私達を威嚇した悪霊でしょう。私をどうしようっていうの！」

美可の叫びに、あの不快な笑いを伴った答えが戻る。

「グフフフフ、グフフ、グフフフフ。おろかな地球の少女よ。宇宙無敵のゴラム機械軍団を、まだ、悪霊などと信じておるのか。グフフフ、グフッ。オーラ星人とかぬかす精神体も、とんだ罪な事をするものよ」

美可が気のつかぬうちに、さっと彼女の精神を探り、オーラ星人との関係を知ったアリエルは、余裕たっぷりに言った。

「では、お前たちの惑星、地球とかいう地に、我々を案内してもらおうか」

しかし、こればかりは、いくら強迫しても無理であった。かんじんの美可自身が、オーラ星人のテレポートでこの宇宙に来たのを知らないのだから。

「人間とやらが、このアリエル様にさからったとて無駄なこと。さっさと白状せい。さもないと、命はないぞ」

機械頭の司令長官は、また考えの硬さをむき出しに、一本調子に責めたてた。その間に彼女の心理を探ったフォックスは、

「お待ち下さい。この下等知的生物は本当に自分達の母星への道を知らないのです。オーラ星人にテレポートされたことさえ気づかず、いまだに地球とかいう惑星の霊界にいると信じているざまですから、あまり責めたてるとこわれてしまいます」

あわてて止めると、

「だが、生物体本人も気がつかぬ、真の深層心理は、テレポートされたこと、この宇宙と母星との関係を意識しております。いくら下等でもやはり精神はありますから、自覚こそないが、オーラ星人の手口を感じとり、心の奥底にしまったのでしょう」

こう続けながら、シェルフから複雑な形に吸盤のついた装置を取り出した。

「これを用いて、その深層意識を解明しましょう。そうすれば、地球とかいう母星の所在宙域も明らかになります。その結果に基づき、本官はただちにその地へワープし、連中の弱点をさぐって参ります。人間のウイークポイントさえにぎればこちらのもの。安心しているオーラ星人どもの裏をかき、そこをついてバリヤーを破り、どっと攻めこめば、我が軍は大勝利です」

やっと長口説を終えると、暴れる美可を押さえつけ、額に吸盤を貼りつけた。

「やめてよ、くすぐったい、いやだわ。ポンコツロボット、なにするの。エッチ！」

彼女はさわいだが無駄だった。別な吸盤を、それぞれ機械頭の頂点に当てたアリエルとフォックスは、

「おー、これは驚いた。これらの者は、とんでもなく遠い宇宙から来たのだぞ。まだ、我々がワープを行ったこともない辺境宙域に、こんな生きものがいたとは――」

「ですが、閣下、オーラ星人ですら精神力だけでその惑星に行き、原地人三名を連れて来たのですぞ。機械文明の頂点に立つ我々に、同じことができぬはずはありません」

と話しあったのだが、なにしろ、想像もつかない遠い宇宙だ。そこまでのワープを行うには、莫大なエネルギーが必要である。それだけの力が、はたしてゴラム機械軍団にあるだろうか——？

「うーむ」「さて、どうしますか」

急にがっかりした二体がうめき始めた時、またもや、艇長から連絡が入った。

「司令長官閣下。申し訳ありません。緊急事態発生です。例のワープエネルギーをプールしてある貯蔵庫の機能がおかしくなり、本艇はいまにも暴ワープ寸前のところです。早く適切な手段をとりませんと、とんでもない宇宙に飛ばされてしまいます」

ふだんなら、ここで両首脳はあわてるところだが、今回は違っていた。顔を見合わすと、ガクッとアゴをゆるめうなずきあう。

「さよう、閣下。この過剰パワーを使えば、小型偵察艇を地球までワープさせ、戻って来ることができます」

参謀総長はにんまりした。

「ペンデラ、ペンデラ、ペンデラ」

生暖かい晩春の夜空に、奇妙な男達の声が上がって行く。ペンデラ、ペンデラ、ペンデラ。満

天に輝く星も、この声に驚いたのかもしれない。

スーッと星が一つ流れた。

途端に「ペンデラ」の声が一つになり「しめた、ついに呼びかけに応えた」という甲高い声がまじった。続いて、残りの「ペンデラ」も消えたかと思うと、「馬鹿、あれは、ただの流れ星だ。UFOなんかじゃない。よく目をあけて見ろ」という罵声が飛んだ。

むっとした感じの答えが戻る。

「判った、判った。もう今晩はやめようぜ。やっぱりUFOなんか存在しないんだ」

生暖かい闇の中にしばらく沈黙が続いたが、

「そういう調子だから、君は何をやっても成功しないのだ。もっとねばらなくちゃ、まあ、煙草でも吸って一休みしようじゃないか」

なだめるような声が流れ、地面が一部、ポッと明るくなった。

ライターの炎らしい。あまりはっきりとはしなかったが、それでも煙草に火をつけるために寄せあった顔を二つ、赤く浮きあがらせるだけの明るさはあった。

下から照らされた顔は二つとも中年の男のそれで、逆に影がついたために、妙に不気味に見えた。夜中、いい年齢(とし)をした大人が二人、変な声を夜空にはり上げる——それだけで十分におかしかったが、彼等の顔もそれにふさわしく変てこであった。

一つは顴骨が高く出張ってこけた頬をし、蒼白い肌がライターの炎で妙に赤く光っていた。両端が吊り上がった眼鏡の奥で、金壺眼が泳いでいる。

もう一つは、まさしくインディアンのミイラであった。不健康な茶色の肌はライターの赤い炎を受けて、いっそう不気味な煉瓦色になり、人間とは思えぬ様になっていた。

先に煙草に火をつけたインディアン・ミイラが、まずそうに煙を吐き出すと言った。

「吉岡君。頼むからもう少し我慢強くなってくれないかな。その調子だから、今まで、何をやっても長続きせずに失敗する。交霊会の時だってそうだ。変に調子に乗ってメガホンをふりまわしたりするから、えーと、甲斐とかいったっけ、あんながきに投げ飛ばされるのだ。おかげで、どうにか軌道に乗りかけたミディアム・センターはめちゃくちゃだ。大金を投じた私は、名誉会長の名が仇になって都落ちという羽目なんだからな」

「だけど、小松さん。あの最後の交霊会は、能無しのチョビひげマネジャーのせいだよ。そんなにおれのことばかり責めないでもらいたいね。会費に目がくらんだ奴が、十分に調査もしないであんな小僧を参加させたのがいけないんだ。おまけに、変てこなことを聞きやがるので、おれだって頭に来たから、ついメガホンで一発やりたくなったのよ。そう、古い話を持ち出すなって」

吉岡も、小松に負けぬ勢いで煙草をスパスパやりながら続けた。

「まあ、奴らにはあの後、刀剣展示会で会った時、村正なんかの話をして震えあがらせてやったから、いいがね」

「あまりよくないね。チビをおどかしたって何の得にもなるまい。そんな気持ちだから、テレビ売り込みにも失敗し、マネジャーに逃げられるんだ」

「ふん、あのチョビひげか。あんな奴、逃げてくれた方が助かる。ただ調子がよいばかりで、実際には何の役にも立たん。

本当の話、テレビ局をとちったのもあいつのせいなんだ。せっかく『ざしきぼっこ対妖刀』っていうユニークな話と役をつくったのに、野郎の交渉が悪いから局はのって来ない。トンズラきめやがった時は、ほっとしたぐらいだ」

吉岡は、負け惜しみとしか思えない口調でいった。実のところは、マネジャーに逃げられて大弱りしたのだ。

「だが、おれが偶然、君と会った時には、まったく元気がなくて、そう思っている様子じゃなかったぜ。だからこそおれは、君を『空飛ぶ円盤と親しむ会』の幹部にしてやったんじゃないか」

「ああ、そういえばそうだったな」

急に元気を失った吉岡は、ポツンと言った。いくらインチキ専門の彼でも、こうまで痛い所を突かれれば、ハッタリをなくす。

「だったら、もう少しUFOとのコンタクトに真剣になってくれよ。これは交霊会なんかと違い、

科学的に認められるんだぜ。一回でもＵＦＯと接触してみろ。会員はみるみる増え、入会金はガッポガッポなんだ」

「そうだなあ。なんたって会員二名、つまりあんたとおれだけじゃ、どうしようもないからな。また明晩からねばるか」

ちょうどこの時、二人とも煙草を吸い終わり、あたりはまた晩春の闇に包まれたのであった。

フォックスを乗せた小型偵察艇は、一瞬のうちに無限の宇宙空間をワープすると、レンズ状星雲のはし、いかにも文化果つる宙域といった辺境にわびしく赤く光る、小さな恒星のそばに現れた。

ワープ反動砲を乱射乱撃した結果、暴ワープを起こしそうになるまでたまったエネルギーを半分使って、やっとゴラム軍団から到達できたほどの遠さであった。四次元的に折り曲げられた三次元空間が、いまにもへし折れるほどのパワーを必要としたのである。

いじけた、今にも寿命の尽きそうな赤色矮星は、それでもいくつかの惑星を持っていた。その内側から三番目、暗黒の宇宙空間に薄青く浮く星こそ、オーラ星人が連れて来た下等知的生物の母星であった。

軽くジャンプをすると、フォックスは知性感受器を最大限に働かせ、着地点をさがした。あの

地球人の子供から得た知識によると、この小惑星には、同程度の知性体が何種類もいる。できれば、彼等と同じ生物を見つけて弱点を調べたい——彼はこう考えたのである。地上すれすれに降下した偵察艇は、惑星各地に住む種々な知性体の精神波を調べながら飛び続けた。

ペンデラ、ペンデラ、ペンデラ

突然、感受器は異様な音をキャッチした。フォックスはギクッとすると、その音を分析した。なにか、聞いた記憶のある音であった。たしか、どこかで聴覚に入れたぞ——

分析の結果はすぐに出た。

「やった！」

フォックスは叫んだ。重要資料として分析装置にインプットしておいた、あの地球人の捕虜の声と、基本波質がまったく同じである。早くも目的物を発見したのだ。

ペンデラ、ペンデラ、ペンデラ

その声に偵察艇のコースを乗せると、フォックスはのんびりした気分で、初めて見るこの辺境の世界をながめまわした。ちょうど夜らしい。空は真っ黒であったが、一つだけ大きな光球が薄く光っていた。

〝へん、小惑星のくせに生意気にも衛星まで持ってるのかい〟

彼が馬鹿にした笑いをもらした時、巧みに惑星の引力を殺した偵察艇は、何のショックも感じ

させぬ柔らかさで着地した。

あらためて知性感受器をチェックした参謀総長は、よろこんで呟いた。

「うむ。この音を発している生物は、我が艇のそばにいるぞ。どういう方法をとるか」

とりあえず偵察艇のドアを開けると宇宙探検に必要な三種の神器、つまり、ハンディ知性感受器、ハンディ物質変換器、ハンディワープ器を身につけ、地球という小惑星に降り立ったのである。

妙に柔らかい地面で、くっきりと足跡がついた。感受器の指針に従って彼は進んだ。ついでに、聴覚器官の感度を上げる。

「うむ」

思わずうめくと、フォックスは反射的に聴覚を切っていた。いきなり、ペンデラ、ペンデラという激しい騒音が電子回路をかきまわし、電子頭脳がクラクラしたからである。

代わりに視覚器官の性能を変えた。それまでほとんど闇に近くて何も見えなかったあたりの様子が、赤っぽい影を帯びて浮かび上がる。今度は、目にたよって地上の様子を調べる。もちろん白昼光発射器は持っていたが、下手に照らすと地球人に見られるから使えないのだ。

彼の着いた場所は、ちょっとした小山の上らしい。まばらに生えた木々の向こうに、せまい空き地が見える。そこにあの捕虜と同じ形だが、より大きい姿のが二体、ぬっと立っていた。空に

向かい何か叫んでいる感じである。

〃そうか〃満足気にうなずくとフォックスは、感度を最低に下げるとまた聴覚器官をオンにした。

ペンデラ、ペンデラ、ペンデラ

かすかに、彼等の声が聞こえる。この生物こそ上空からキャッチした下等知性体に間違いない。オーラ星人は、この地からこの種族の子供を三体テレポートして自軍に加え、共同してゴラム機械軍に敵対したのだ。おかげで参謀総長の彼は、思いもよらぬ苦労をしなくてはならなかった。

〃この、生意気な劣等種族めが――〃

フォックスは、彼等に襲いかかり、たっぷり怖がらせたい衝動にかられたが、急に抑えつけられるような感じを覚え、あわてて考えを変えた。同時にこの生きものが、かつてのマスター達に似ているのをあらためて確認し、なにか不気味になった。

〃力ずくでさらうより、友好関係を結んで協力を得た方が賢明だ。下手におどかして敵意を持たれたら、裏目の結果が出る〃

こう思うと最初の計画――地球の生物を捕らえ、いろいろな手段で責めて弱点を見つける――を変更した。

〃そうとも。親しくなった方が、秘密を知るには得策さ。そのために彼等の思考を調べ、希望に合った形になって現れてやろう〃

知性感受器を向けた彼は、よろこびの声を上げかけ、あわててやめた。まだ、彼等に自分がいることは知られたくない。心中、呟く。

〝なんと、奴らが今、こんな所にいるのは、宇宙人、つまりこのおれ様を迎えるのが目的じゃないか。それならば——〟

だが、なおも地球人の心理分析を続けた彼は、腹立たしそうになった。

〝これは無礼な。劣等知性体のくせに、奴らの心中には、ロボットに対する深い優越感が潜んでおる。身のほども知らぬ地球人め〟

だが今は、こんなことで怒ってはいられない。彼等と友好関係を結ぶには、地球人が、これこそ宇宙人として持っているイメージと同じになるのが、一番、利口な方法だ。綿密に、彼等が抱いている理想の宇宙人像をチェックすると、

〝なんとまあ、実に低級な連中だ。こんな形の生物を宇宙からの来訪者として待っているのか。完全に想像力、独創性に欠けておる。自分達と同じ姿じゃないか……〟

フォックスはあきれたがはじまらない。ハンディ物質変換器を操作すると、自分の機械体を完全に分解し、地球の生物が想像している宇宙人の姿へと再合成したのである。念のために無機質なのを有機質に変え、徹底的に組織変更を行った。おかげで予想以上の時間がかかり、彼が気づいた時、地球人二名は変な袋に入り眠っていた。彼等と同じ機能になった目に、あたりが明るくなり始め、緑色の木々の葉や茶色の地面、青味を帯び始めた空、などが映った。

〝この体になったから、秘密装置は当分、必要なかろう。下手に奴らに見られるとまずい〟

こう思うとフォックスは偵察艇まで戻り、三種の神器をしまいこんだ。彼等の考えた通りのスーツを着ると、テレパシー・セットをフードの内側につける。

〝万一、言葉が通じなかったらまずいからな〟

すっかり準備が整い、さあ、行動開始と思った時、フォックスは強烈な眠気に襲われた。ロボットでいた時には睡眠などと無縁であったのが、こうして生物、それも地球人とほぼ同じになると、生理機能も同じ働きをするのだ。なにがなんだか判らぬうちにフォックスは、ふらふらと半ば意識を失って歩くと、バタリと地面に倒れ、深い眠りに落ちたのである。偵察艇から、五、六メートルの草むらに横たわると、いびきをかき始めた。

「いやに蜂が多いなあ、吉岡君」

インディアンのミイラみたいな男が言った。

「ちょうど新しい巣を造る時期だから、連中もいそがしいんだ。蜂なんかに気をとられるより、宇宙人とのコンタクトの方が大事だろう。UFOと接触するなんて阿呆らしいことを始めたのはあんたなんだぜ、小松さん」

端の吊り上がった眼鏡の男が答えた。

場所は東京都下の高尾山頂上付近の木陰であった。あけ方、スリーピングバッグで仮眠をとっただけなので、目は赤く血走っている。やっと陽が昇って来た今、もぞもぞと起き出したのであるが、すっかりのどが痛くなり、体のふしぶしが痛んでいた。妙にいらだたしい疲れを覚える。

ブーン

また、大きな蜂がそばを飛んだ。

「ありゃ、熊ん蜂だ」小松が判ったような口調でいった。「刺されると危ないぞ。時々、子供が死んだ記事が新聞に載るだろう」

「熊ん蜂ってのは、もっとずんぐりした黄色と黒のだ。あの橙色の腹に黒い横縞は雀蜂だぜ。いい加減なこと言うなよ、小松さん」

まだ蜂にこだわっている小松に、吉岡はいらいらしたらしい。金壺眼をギョロつかせると、うるさそうに言った。

今度は小松がむかっとなる。二人とも、何かに八つ当たりをしたい不機嫌そのものの状態だから仕方ない。

「なにをいうか。君のいうのは熊蜂。熊ん蜂というのは違うのだ。ああ、熊蜂は黒と黄色で丸々してるさ。しかし、熊ん蜂ってのは雀蜂のことで、知ったかぶりをしたがる奴がよく間違えるの

さ。おれは、昔、昆虫採集をやっていたから、よく知っておる」

ピシャリとやりこめられ、吉岡は蒼白い顔を赤くすると、むすっと黙りこんだ。こんなくだらないことでいい争いをするより、UFOについて議論すればいいのに、これでは、このペアはなにをやっても成功しないだろう。しかし、空腹には勝てなかった。一応、蜂論争は中止して、にぎり飯と魔法ビンに入った熱いお茶という朝食にかかった。その途端、

ウォー、ワーッ、ギャオーン

異様な絶叫が、ぼんやりとなまぬるい空気を響かせて、二人の耳に入った。

「なんだ、ありゃ」

吉岡は腰を浮かした。

「まさか、熊じゃあるまい」

昔、昆虫採集をしたわりには間が抜けたことを言うと、小松も立ち上がった。音の原因をつき止める気か、つま先立ちまでしたが、すぐ前は林なのだから何も見えない。だが、茶褐色の肌、妙にギクシャクと不細工な姿は、コマンチ族の下っぱが、怖ごわ見張りをしている図に似ていた。

ガサ、ガサガサ、ガサ、ガサリ

突然、その林の中から顔を手で覆った異様な服装の男が、転がるように現れた。小松は思わず後ずさりし、尻餅をつきかけた。

妙に白っぽくギラギラとする上下つながったスーツを着て、同色の手袋にブーツ、ごていねいにも頭まですっぽりと、やはり白いフードでカバーしている。宇宙服なのだ。

顔面を覆った手には、巨大な雀蜂が群がっていた。指のすきまを通して、強大で長い針を顔面に突き刺している。

「あっ、ウルトラマン。ウルトラマンが熊蜂に襲われている」

吉岡はいった。

小松は、はきすてるように応じた。

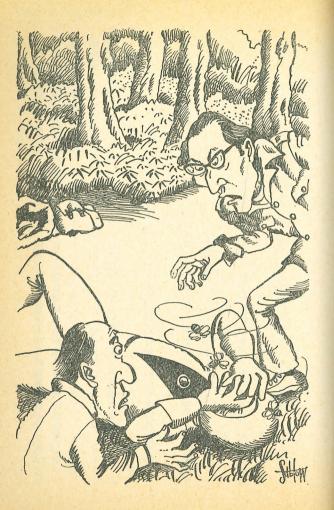
「馬鹿！　いい年齢(とし)をして何をいう。いくらテレビに出たいにしてもひどすぎる。そんな調子だから、インチキ霊媒さえつとまらんのだ。君の頭の程度を疑うね、まったく」

白スーツの怪人は、二人のそばまでめくら滅法に走って来たが、ついに力がつきたのか、前のめりに転がり、はずみであお向けになった。両手でカバーされた顔が空を向く。橙色の太く長い胴に黒い横縞の目立つ雀蜂は、相変わらずへばりついている。

「こりゃ、大変だ。蜂を追っぱらうには、これが一番——」

小松は魔法ビンを取り上げると、蜂だらけの顔に、中身のお茶を勢いよくぶちまけた。よほど熱かったらしい。「グォーッ」怪人はまた大きくうめいたが、効果のあったことは確かであった。

突然、熱湯をかけられた雀蜂は、大あわてで羽根を震わせると湯滴を散らしながら飛び立った。

「うおっ、今度はこちらへ――」

吉岡は、おびえた声を出して顔をふった。危うく眼鏡を落としそうになる。だが、これはおびえ過ぎといえた。雀蜂はぬれた体をおりから差した朝日にきらめかすと、すぐに姿を消した。

「あーあ、こりゃひどいね。まるでお岩様だ」

顔を覆った手を払い落とした小松は、冷淡な調子でいった。幸い両眼はしっかりカバーしていたので失明はまぬがれたものの、白スーツの男の顔は、どこが鼻でどれが口か判らないほど、赤紫色に腫れあがっていた。

「それにしても、よく刺されたものだな。ひょっとすると死ぬんじゃないか」吉岡がびくびくした調子で訊いた。「だが、何者かね、いったい？」

「この近所で子供向けのテレビ映画のロケでもやってるのさ。それで宇宙人の役になった間抜けが、蜂の巣にぶつかったんだろう。じき、仲間が来るさ。かかわりあいになると面倒だから、おれ達は他所(よそ)に行こうぜ」

小松がうるさそうに言って歩き出そうとした時、怪人は急に頭をふった。すると、二人の頭の中に奇妙な思念が響いたのであった。

〃地球人。地球の友よ。君等の呼びかけに応えて来たわし、宇宙からの客を見捨てるのか？　わしこそ、本当の宇宙人なのだ〃

「痛い！」

これまでに味わったことのない激痛を感じて、フォックスは飛び起きた。しばらくは、何が何だか判らなかった。また激痛に襲われ、彼は草むらに転がった。だが、この二発目の痛みが意識をはっきりさせ、ゴラム機械軍団参謀総長としての自分を取り戻すことができた。瞬時に、これまでのことを思い出す。

〃そうだ。今、おれはゴラム星ロボットではない。地球人めが想像した宇宙人になりきっているのだ〃

また、激痛が顔面に炸裂し、痛みが全身を貫く。くらむ眼を開いた彼は、あまりの恐怖におののいた。目の前に無数のベスパ星人、かつてゴラム軍団が宇宙の果てにまで追いつめ、反物質を叩きつけて全滅させた蜂族が群がり、彼に向かい次つぎと攻撃をかけて来たからである。

「ウェーッ、ベスパ蜂族のゴーストだ」

彼は恐怖の叫びとともに、まだなじみの薄い有機質の手で顔を覆った。全身、丈夫な宇宙服(スーツ)で包まれているので助かった。さもなければ、雀蜂の丈夫な毒針で全身を刺しまくられているところだ。有機体になっていたフォックスは、ふくれあがって苦しみのうちに死なねばならなかったろう。

しかし、刺されたのが顔面だけとはいえ、急所を何発もやられているのだ。皮膚は燃えるように熱く、頭は割れそうに痛んだ。

「助けて、助けてくれ。ウォーッ、ワーッ、ギャオーン」

ついに理性を失ったフォックスは、こう叫びながら立ち上がると、顔面をカバーして走り始めた。

〝そうだ。おれの本来の体、無機質金属体であるロボットに戻りさえすれば、ベスパ蜂族など問題ではない。いくら丈夫な毒針でも、メタリック・シルバーのボディーに当たれば簡単に折れてしまう。そうだ。なんでこれに思いつかなかったのだろう。また、変身すればいい〟

こう思った彼は、次の瞬間、息が止まりそうになった。かんじんの物質変換器は偵察艇の中にしまってあるのだ——

といって、この状態では、とても偵察艇までたどりつくことはできない。だが、逃げられるだけは逃げるんだ。完全に錯乱したフォックスは、眼を押さえたまま、やみくもに走り続けた。いきなり足がよろけ、前のめりに倒れると、また気を失った。

どのくらい経ったのだろうか。ベスパ蜂族の針の痛みとは違った刺激、それは熱いというのであったが——をしたたかに顔いっぱい叩きつけられ、彼は、「グォーッ」とうめいた。

皮膚の上を刺激的な液体が流れ落ちる。だが、幸いベスパ蜂族は逃げ去ったようだ。フォック

スがほっとした時、顔を覆った腕が急に持ち上げられると、乱暴にほうり出された。何やら、しゃべりまくる声が耳に入る。あまりの苦痛に聴覚が働かず、意味が判らない。

彼は必死の気力を出すと、頭を突き上げた。うまい！　この刺激でテレパシーセットが動き始めたのである。すると、あのペンデラ、ペンデラとやっていた地球人の意識を感じ、彼はほっとした。ところが、この二人の思念が妙に冷たいのに気づき、フォックスは、ギョッとなった。おまけに、立ち去ろうという気配さえ感じられる。ここに置きざりにされたら、死ぬ他に道はないだろう。彼は、あせってテレパシーを送った。

〝地球人。地球の友よ。君等の呼びかけに応えて来たわし、宇宙からの客を見捨てるのか？　わしこそ、本当の宇宙人なのだ〟

テレパシーを発すると、苦痛と疲労のあまりフォックスは失神した。ほどなく意識を回復した時、彼は例の地球人達がしきりと相談しているのを聞いた。どうやらフォックスが彼等の考えていた宇宙人にくらべ、あまりにもしまらないので、がっかりしたらしい。だが彼の機能はやっと正常に働き始め、地球人の言葉も理解できた。

「こんなだらしない宇宙人じゃ、コンタクトしても無意味だった。たかが熊蜂、いや、雀蜂ごときに刺されてくたばるとは——」

「いや、そういったものではない。あの巨大な雀蜂に襲われたら、普通の人間なら、まず生命は

ない。みけんに一刺しくらったら、それだけでおだぶつだ。

それが、こんなフットボールみたいにふくれるほど刺しまくられても死なないのは、やはり宇宙人だからだ。それにあの不思議な呼びかけ！」

フォックスのテレパシーにすっかり仰天した吉岡と小松は立ち去るのをやめて、この怪人の様子を観察することにしたのだ。

「もしかすると、本当の宇宙人かもしれん」

この言葉に力を得た彼は、強烈なテレパシーを彼等に送り込んだ。二人の顔に、驚きの色が現れる。やはり、待ち望んでいた真の宇宙人がやって来たのだ。フォックスは、

〝助かった、地球の友よ。諸君の要望に応え、はるかなる宇宙の果てより参った私を、よく救ってくれた。このお礼として、君達にガッポガッポと稼がせるぞ〟

宇宙人にしては、世俗的な礼を言った。

この効果は絶大であった。地球人二人『空飛ぶ円盤と親しむ会』の全メンバー、吉岡と小松は、宇宙人の指示に従い、彼の乗って来た偵察艇をすぐに発見した。話に聞くＵＦＯと異なり、円盤状ではなくて変に凸凹したいびつな形なのに肩すかしを食った気がしたが、宇宙人とのコンタクトに成功したことは間違いない。

まだうめきながら横たわっているフォックスを、そっと二人で持ち上げると、偵察艇まで運んだのである。

ひとたび、この中に戻れば、もうフォックスのペースである。ハンディ物質変換器を使うと、雀蜂の毒でくさったトマトのようにくずれかけた顔を、最初に造ったこの上なく宇宙人らしく、りりしくも知性に満ちた青年のそれにしたのであった。吉岡と小松のイメージから考えた造作だ。

フェー、ヒャー

予想していたのと同じ、あまりにもすばらしい宇宙人の顔に戻ったのを見て、地球人二人は腰を抜かさんばかりに驚愕した。

なんたる超能力の持ち主！　やはり、あの場で彼をほうりっぱなしにしたりせずによかった。これで、『空飛ぶ円盤と親しむ会』の前途は洋々たるものがある。一年も経たぬうちに世界中に支部を開設するだろう。

その間に、この欲張り地球人の精神をしつこく調べていたフォックスは、それこそ愕然とした。なんと、目下、オーラ星人とグルになってゴラム軍と戦っているチビ達三人の姿が、眼鏡をかけた蒼白い男、吉岡の精神の中にはっきり浮かんだではないか。

「吉岡君」

フォックスは日本語で言った。そろそろ、日本語を使えるところも教えた方がよい。案の定、ど肝を抜かれた吉岡は答えた。

「なんでしょうか。宇宙人殿」

「今、君の心理を、ちょっと失礼して調べさしてもらったが、よく現れる少年、少女の三人と君は、どういう関係があるのだね？」

「これは驚いた。あのガキどもは、私にとり大事な商売をめちゃくちゃにした憎むべき悪たれ連中なのです」

まったくの偶然の一致に、フォックスこそ驚いた。面倒くさくて判りにくいところは省きながら、この三人が今、宇宙人の敵側に加わっていることを吉岡に納得させたのである。

「で、連中を我ら宇宙人の手で片づけるのはやさしい。だが、やはり他星の生物、しかも子供を叱るのはうしろめたい。

君達、同星の成人に引き渡すから、十分に怒りつけてやってくれ。わし達は大迷惑をしたのだから、よしなに頼むよ。その代わり『空飛ぶ円盤と親しむ会』は大発展させてやる」

途中から話に加わった小松も大よろこびをした。

「判りました。宇宙人殿。連中をたっぷりどやしつけて、ちぢみ上がらせてやりましょう。いや、それでは甘過ぎる。いっそのこと、思い切りよくバッサリとやってやりますよ。彼等は、これには手も足も出ない。そこを、バッサ、バッサと――」

吉岡は妙なことをいうと、皆になにやら提案した。すぐ偵察艇は高尾山から消え、しばらく後、

ゴラム機械軍団のもとへワープしたのである。

高尾山中腹に巨大な巣をかまえていた雀蜂の騒動は、始まったかと思うとすぐにおさまった。昆虫には、人間の理解できない不思議な能力があるのだ。彼等の中に先祖代々伝えられて来た敵意、はるかな昔にどことも判らない同族から送られた憎悪の対象となるものが、今日、この地に出現したのだ。すっかり興奮した蜂はそれを襲った。

それは狼狽して逃げまわり、ついに倒れた。さらに攻撃しようとしたが、やはり古い敵意、かすかな憎悪であった。地球人に熱いお茶をかけられただけで、雀蜂はそれから飛び散り、元の生活に戻ったのである。

第7章　ウルトラスーパーマン大活躍

「霊峯山人、これはいったいどうしたことです。まさか、まだなにかを隠してるんじゃないでしょうね？」
「美可が急に消えてしまった。早く見つけないと大変です。なんとかしないと」
真純と竜介は、霊峯山人ことオーラ星人中枢を責めたてた。どう考えても、この仙人の話はおかしい。その上、悪霊どもをやっつけるどころか、やられっぱなしだ。ちっとも二人は活躍をしていないし、なにをするのか説明さえないのだ。
「いったい、なにが大仙人で善い霊ですか。悪霊の話だって、まったく筋が通らない。ここは、本当に霊域なんですか」
「もう、ぼく達は手を引きます。美可を取り戻したら、帰らせてもらいます」
〝こうなった以上、地球の少年達に真相を話し、あらためて力になってもらうべきですね〟
パンシーは、弱り果てた中枢に言った。

〝そうだな。もう悪霊のことなど、言えば言うほど疑われるだけだ。本当のことを話そう〟
中枢も同意すると、二人の少年に向かった。
「判った、真純君、竜介君。今まで君らをだましていた形で悪いのだが、実は、私達は地球の霊体、修行を積んだ仙人などではない」
「えっ、それじゃ、あなた方はいったい――」
気色ばんだ少年二人に、オーラ中枢は懸命に苦しい立場を説明した。長い長い話であった。真純と竜介は、あまりにも奇妙な真相に興奮すると、
「それじゃ、どうして最初から本当のことを言ってくれなかったんです。もっともらしく交霊会に出たり、仙人の姿になったりして。そんな、まわりくどい方法をとらなくたって、すぐオーラ星に協力しましたよ」
「そうですよ。そうしていたら、とっくにゴラム機械軍団への反攻を始められていた。美可だって無事のはずだ」
と、同時に叫んだ。
中枢と端末は、心からあやまった。交霊会や御岳での仙人ぶりがなまじうまく行ったため、かえって遠まわりした。最初から真実をうったえて、援助を求めた方がずっとよかった――こう後悔したのである。恐縮してあやまったついでに、

「じゃ、竜介君には無断借用した体組織を返そう。なに、バリヤーには他のものを考える」
こう言ったのだが、すっかりスマートになりよろこんでいる竜介は、あっさりと断った。
「いえ、結構です。バリヤーとして十分に使って下さい。それよりも、早く美可を取り戻しましょうよ」
「グフフフフフ、グフフ、グフフ。ついに地球人が恐れている最終兵器を発見したぞ」
フォックスが地球までの大ワープを行っている間に、じっくりと美可を調べたアリエルは、満足すると、こう宣言した。
「これこそ、奴等が最強と信じる武器に違いない。一見粗末だが、凄い威力を持つのだろう」
彼はメタリック・シルバーに輝く手のひらを広げると、その上に転がっているものをじっくりとながめた。それは、なんと、あのミニミニ・ピストルだったのである。
真純と竜介からもらった分も含め、七、八点にもなったこのアクセサリーを、彼女はひどく気に入って、いつもポシェットに入れていた。御岳におもむいた時すら身につけており、そのあげくオーラ星まで持って来たのだ。
真純の銀メダルを使ってバリヤーを作った時、オーラ星人はこのミニミニ・ピストルも利用できぬかと分析してみたのだが、あまりにも粗末な組織なので役に立たぬとそのままにしたのである。

しかし美可を調べ、彼女のポシェットの中にあるアクセサリー拳銃を見つけた時、ゴラム軍司令長官は別な意見を持った。
〝こう、いつも身につけているのだから、人間にとって、よほど大事なものに違いない〟
さらに美可の心理を探り、彼女がピストルを地上最強の武器と信じているのを知ると、これこそ地球人が恐れる最終兵器なり――と断じたのである。やはり、思考に柔軟さを欠いた機械頭の持ち主であった。
「このゴミみたいな武器が、地球人にそれほど威力があるのなら、もっと巨大なのを造れば、連中が見ただけで逃げるような兵器となるだろう。判った」
単純に考えを発展させると、技術担当参謀を呼び、いかめしく命じたのである。手のひらに転がるミニミニ・ピストルを示すと、
「さっそくゴラム機械軍団科学陣の総力をあげ、これらと同じで、もっとはるかに巨大な兵器を造るのだ。構造はこうだ」
なにか表までそえて命じたのである。
技術担当参謀はあきれかえった。長官の手のひらには、オモチャともいえぬ変なものが七、八個転がっているし、表にいたっては何を意味するのか判らない。兵器どころか、金属のくずとし

か思えなかったからだ。
「司令長官のご命令でしたら、もちろん、ゴラム科学陣最高の技術を駆使し、ご希望通りの製品を仕上げますが、どう作用するのです？」
「どう作用するのです――だと？　馬鹿な。この表にちゃんと記してあるだろうが。この引き金（トリガー）を引くと火薬が破裂し、ほら、この銃身にしこんである弾丸が飛び出すのだ。こんな簡単なことが判らず、技術参謀といえるかね。見事なピストルだろうに」
火薬！　弾丸！　おまけに、ピストル！
技術参謀は何も言えなかった。こうした代物は、とうの昔に彼等の兵器庫から姿を消し、古代兵器の一つとして資料で残っているだけである。
〝これがデータかね〟
アリエルの示した表をながめ、参謀は、内心ぼやいた。彼がぼやくのも当然であった。美司がほんのわずか持っているピストルの知識を記した、簡単なリストだったのである。
〝これなら、古代武具カタログ集でも見た方が、ずっと役に立つわい〟
ぼんやりしている彼に、アリエルはハッパをかけた。
「早く仕事にかかれ。もたもたしておると、逆に敵に攻めこまれるぞ。フォックス参謀総長が帰ってくるまでに、大戦果をあげておくのだ。このピストルとかいう最終兵器でオーラ星人めを痛め

つけたところに、彼が地球人に関する重要資料を持って戻ってくる。
これで我が軍の勝利は疑いなしだ。究極兵器と極秘資料。この二つをフルに使い、敵を絶滅してやるぞ。もちろん、地球の下等生物達も同じ運命だ」
技術参謀を作業室に追い立てた後、アリエルは、いらいらして成果を待っていた。ゴラム技術団が全力を発揮した結果、そう時間も経たぬうちに、巨大なレミントン・ダブル・デリンジャー拳銃は完成した。ミニミニ・サイズをそのまま大きくした感じである。
「結構、結構、よくやった。それでこそ技術参謀だ。すぐにオーラ星を攻撃せよ」
アリエルは満足しきって命令したが、結果は彼の期待を裏切るものであった。
ワープ反動砲を一つはずして、代わりにとりつけられたゴラム製巨大デリンジャー拳銃は、リモートコントロールで引き金を引かれると、上下二段に並んだ銃口の一つから、白煙とともに大きな弾丸を撃ち出した。
「よーし。これで奴らは動揺するだろう」
テレスクリーンを見つめていたアリエルは、妙にテラテラと白っぽい敵バリヤーに、何の変化も現れないのでがっかりした。
「第二弾発射」
ゴラム軍司令長官の号令とともに、銃口が火を噴いた。しかし結果は同じである。

「第三弾――」

だがアリエルが意外に思ったことに、今回は何も飛び出さなかった。二連銃なので弾丸がつきたのである。また、弾丸こめをしなくてはならず、立腹したアリエルは叫びたてた。

「技術参謀！　貴官は、いったいどのようにしてこのピストルを製造した？」

「どんなもこんなもありません。司令長官の下さった表やデータはまったく役に立たなかったので、兵器庫資料保管室にある古代兵器に関する資料を参考に致しました。ですから、まったくオリジナルと同じ構造であります」

「では、原材料はどうした」

「もちろん、我が軍団所有の金属を用いました。なにか――？」

「馬鹿者！」

ここでアリエルの爆弾が落ちた。技術参謀は驚愕のあまり、転倒するところだった。司令長官は、なおも爆撃を続ける。

「地球人が恐れる兵器は、あくまでも地球の材質を用いて造ってこそ完成する。それを、ゴラム軍の手持ちを使うとは、なんたる間抜け！　さっ、この小さなピストルの構成物質を使い、もう一度、造り直すのだ」

司令長官に叱りとばされた参謀は、あわててミニミニ・ピストルの構成要素をばらばらにすると、アリエルが言うところの無敵最終兵器を造り上げた。

分子拡大装置を使い、ピストルを構成している分子自体を水増しして、巨大なレプリカを造ったのだ。

「閣下。ついに完全なピストルを完成しました」

こうして、やっと二つめのレミントン・ダブル・デリンジャーを完成した技術参謀は、誇らし気に報告した。だが内心は、〝こんな水増しの張りぼてピストルが役に立つのかね〟と、疑わしさでいっぱいだったのである。

「よーし。では本格的に発射せよ」

アリエルは命令した。

だが、真っ直ぐに飛び出した弾丸が今度こそオーラ星バリヤーを撃ち破ると思ったのに、発射するどころか物凄い暴発を起こし、せっかく苦心の末に造った拳銃は、ガス状になって消え散った。はずみで技術参謀と砲手ロボットが二体、モヤと化して漂った。

ワープ反動砲台座も一つ、完全に姿が無くなった。幸い各砲は一台ずつ、分子破壊砲でもこわせない壁に囲まれた発射室に入っていたので他に被害は及ばなかったが、室内はスクラップ置き場にミニ原爆をしかけたような惨状となった。

「グォーン、これは、一体どうしたことだ！」

司令室からモニター・アイでこの有り様を知ったアリエルは、またもや怒り狂った。

「ええい。こうした時、フォックスでもおれば何とかなるのに。あいつ、なにをぐずぐずしとる。ノロマめ」

ついに遠い宇宙の果ての星・地球で苦労している彼に、八つ当たりを始めた時、技術参謀補から事故原因の報告が入った。

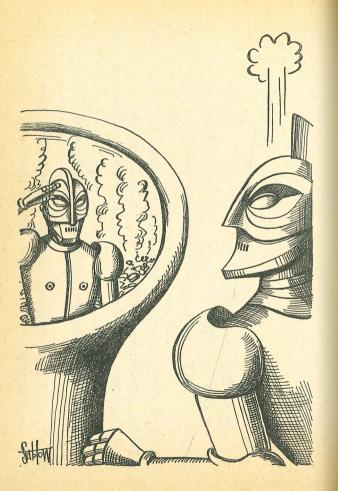
「長官閣下。ただいまの暴発は、地球製材料を水増しし過ぎて使ったために、完成した拳銃の耐性が弱くなった結果、起こったのであります。

銃自体はもろいのに、使われた火薬は、地球製のが入手不能のためゴラム機械を原材にして作製されました。その結果、強力過ぎて弾丸を撃ち出す前に、ピストル自体を破裂させたのです」

アリエルは、怒りのあまり、自分の頭をなぐりつけた。

「実に、どうしようもない馬鹿だ。我が軍の技術参謀のくせに、そんな予想もつかなかったとは、爆死しても当然。自業自得である」

そこに技術参謀補は口をはさんだ。

「長官閣下。本官の考えますには、拳銃本体の水増しの結果、火薬破壊力の方が強大になり、暴発したのであります。従って、例えゴラム星組織を元に作った火薬でも、本体と同じ割合で水増しすればパワーは落ち、うまい具合に発射が行われるでしょう」

「なるほど。それはよいことに気づいた。すぐ、その水増し火薬を作り砲撃を行え」
「しかし、今の拳銃は、もう再生不能です。完全なガスになり消え散ったのですから。いくら科学力をフルに発揮しても困難で――」
「判った。それでは、別のモデルを使いたまえ。まだ六、七点、オリジナルのピストルがある。どれでも結構だ。急げ」
今度は、銃身が馬鹿に長いピストルが選ばれた。司令艇内の作業室はフル操業を始め、ついに、水増しコルト・バントライン・スペシャルが、ワープ反動砲台座にすえつけられた。あの西部の名保安官、ワイアット・アープにしても、自慢の拳銃の馬鹿でかいレプリカが、宇宙人同士の戦闘に使われるなど、予想だにしなかったろう。
三度目の正直である。この名銃の複製は、長大な銃身から見事に弾丸を撃ち出した。ゴラム星材質で作った火薬の水増し具合も適当だった。ピストルの弾丸は正確にオーラ星に命中し、ブスッとバリヤーを貫通すると、姿を消した。遠く、オーラ小惑星が震えるのが感じられる。アリエルの予想は適中した。地球人・竜介の体組織を使って張ったバリヤーには、地球製材料で造った拳銃の弾丸を防ぐ力はなかったのである。

バズン、ブスッ

巨大な黒い影が走ったかと思うと薄青のモヤを突き通し、オーラ星人の核である小惑星に命中した。
あおりをくって、モヤは揺れ動き、真純と竜介の体はふりまわされた。
「ああ、ひでえ。こりゃ、いったい何が起こったんだ――」
柔道のドシンバタンで転がるのには慣れている真純が、悲鳴を上げたほどだった。急にスマートになったのが災いして、いいようにすっ飛ばされた竜介は完全に眼をまわした。
その頃には精神体に戻っていた中枢とパンシーは、あわてて局部的に実体化して柔らかいソファになると、二人を座らした。
本当の事情を地球人に白状した以上、もうよけいな労力を使って聖地・霊域などを造っておく必要はない。さっさと、限りなく広がる青空、果てしなく続く緑、その中にそびえる台地を消してしまったのである。彼等本来の姿――核になる小惑星を、中枢が芯になって端末がふんわりとガス体で取り囲む――という状態になったのだ。無理して聖地・霊域などを造るエネルギーが不要になった。その分、ゴラム機械軍団への反撃、美可奪回に全力投球できるとよろこんだところを、意外な攻撃にあったのだ。
頼みの竜介体組織強化・新精神力バリヤーを破られ、オーラ星人はあせった。
〝真純君、竜介君。敵はどんな攻撃をしたのかね。せっかく竜介君の好意で張ったバリヤーを破

られるとは、まことに面目ない〃

今度は、もっぱらテレパシーである。もう発声器官を造る手間も省いてしまった。オーラ星人は面倒なことが苦手なのだ。

〃連中の攻撃方法なんか判りません。なにか硬いものが、あなた方精神体の核になっている小惑星地表に撃突した感じです〃

すっかり、この戦闘の主導権(イニシアチブ)をとった真純がいった。こと戦争に関しては、地球人類はいい加減な宇宙生物に負けない力を持っている。《栄光ある絶対孤立主義》を通して来たオーラ星人など、とても太刀うちできない。

〃判った。待ちたまえ〃

中枢はさっそく、中核惑星を精神波で探る。すぐ成果はあがった。円錐状に先がとがった筒型のものが、地中深く埋まっている。説明するのも面倒なので、そのまま真純と竜介の精神に投影した。真純は驚いて叫んだ。

「あれ、これはピストルの弾丸だぜ!」

「なんで拳銃が出て来なくちゃならないんだ?」

竜介の質問に、頭をひねると、

「ゴラム機械軍団は、もうすでに、あらゆる超科学兵器を使い、しかも、どれもが無効なのでガ

ックリしたんだ。そこでミカロンをさらって――」

真純は推論を述べる。

「なるほど、ミカロンは何を持っていたか」

竜介がタイミングよく、合いの手を入れた。

やはり二人は名コンビだ。このコンビがうまく働き始めると、思考力は一人の時の四倍以上に強くなり、とてつもないアイデアがひらめき始める。

「ミニミニ・ピストルだ!」

「そして、拳銃の威力に対する彼女の盲信」

二人は口をそろえて言った。

『そうだ。この二つをあわせた結果はあまりにも明らかだ。ゴラム機械軍は、ピストルを造り上げて発砲したのである――』

どうしてバリヤーが破られたかまでは判らなかった。〃美可の気の強さが作用し、竜介のおとなしい体組織を破ったのかもね〃真純がくだらない推理をした時、

ブキューン、バズン

またもや巨大な黒影が走り、オーラ星は激しくゆれた。安楽椅子から転げ落ちそうになった二人を、中枢はしっかりと押さえつける。おかげで竜介は眼をまわさずにすんだ。

ドガーン、ズズーン
またもや、一発。
「おい竜介。ゴラムロボットどもは、何種類もの拳銃を造ったらしいぞ」
「そういや、ミカロン、欲張っておれ達の分まで、全部まきあげたからな。おかげで、えらく迷惑なことになった」
自分で勝手にミニミニ・ピストルを全部、美可にやったのも忘れて竜介は文句をいう。
「あんなオモチャを、御岳まで持って来たのが悪いんだ」
「御岳まで持って来た？　そういや、あの時、竜介も変な雑誌を見ていたな」
真純の頭の中に、一瞬、青いタイツに赤いマントをひるがえした強そうな男の姿が浮かんだ。
これは――？
「そうだ。スーパーマンだ」
つい、大声を張り上げる。
「なんだ、なんだ。急にわめいたりして。驚くじゃないか」
竜介の抗議にかまわず、
「弾丸よりも強く、機関車よりも早い超人、スーパーマン。敵がピストルの弾丸(たま)で攻めて来たのなら、おれ達は、この超人に化して闘えばいい」

真純は、自信たっぷりに断定した。
「なんだって、馬鹿な。そんなことができるかい。それに弾丸より強くではなくて早くだ。強いのは、機関車より――だ」
「いや、できる。オーラ星人の精神力と、ぼく達の体組織を組み合わせれば、スーパーマンの創造なんかやさしい、やさしい。だいたい、本人が知らないうちにぼくの銀メダルやお前の体組織のエッセンスを抽出して、あれほど強力なバリヤーを造りあげた連中だぞ。ぼく達が協力すれば、ウルトラスーパーマンだって造り出すさ」
まくしたてる真純に、竜介はうなずいた。
「そうだ。そういえば、たしかスーパーマンも、あのタイツやマント、クラーク・ケントの時の眼鏡さえ、自分が乗って地球に飛んで来たロケットのシートやガラスから作ったんだ。物質転換利用にかけちゃ、達人なんだ。
うん、光より早く宇宙を飛び、手のひらで分子破壊光線をはじき返すんだ。それに決定だ」
とんだところで、竜介の映画に関する知識が役立ったのである。
〝じっくり考えてみると、スーパーマンという超人は、ものすごくいい加減な存在だ。それが、大受けに受けて四十年も大活躍を続けてるんだ。ここでオーラ星人の精神力とおれ達の物質力を合わせ、ウルトラスーパーマンを造る方が、よほど合理的だ〟

こう結論を下すと、竜介はスーパーマンに関する知識をかき集めた。それも、いい加減なのばかりを――

彼が強敵と闘った時に剣を前方に投げた。地平線に消えたそれは、スーパーマンの背後に現れる。つまり、一瞬にして地球を一回りしたのだ。その剣を後ろ手につかみ、敵を倒す。

吐く息の力だったかで、軌道からはずれかけ暴走しそうになった地球を元に戻す。

最初は重力の違いとかで高いビルディングもひとっ跳びだったのが、いつの間にか光より早く宇宙内を飛びまわるようになっている。

――まだまだ、いくらでも都合がよくていい加減な話はあったが、これだけ考え出して満足した竜介は、オーラ星人に、これから全員が協力して造り出す無敵の超人について説明をした。柔道一直線の真純に、スーパーマンの解説は無理である。

コルト・バントライン・スペシャル水増しモデルによる攻撃の大成功に満足したアリエルは、コルト・オートマチック、S&W M59、ルガー・スーパー・ブラックホーク、ブローニング・ハイパワーなど、美可から没収したミニミニ・ピストルを全部巨大化し、乱射乱撃を開始したのである。弾丸は、オーラ星の妙に白っぽいバリヤーを簡単に貫通し、中核の大地にめり込んだ。

この分だと小惑星は壊滅しオーラ精神体は分断されて雲散霧消、地球人の子供は宇宙塵、フォ

ックスが帰るまでに戦いのケリはつくわい――こう考え得意になったアリエルは、突然、異様な轟音を発した。もはや、地球上のどんなレーシング・カーのエキゾースト・ノイズを借りても表せぬ、すさまじい響きであった。

見よ！

テレスクリーンに浮かぶ、オーラ星の白いバリヤーを内側から破ると、青いタイツに赤いマントをひるがえした、地球人そっくりの青年が飛び出して来たではないか――

両手を二本、真っすぐに前へ伸ばすと、ゴラム機械軍団めがけて突撃して来る。真空の宇宙を飛ぶのになんでマントがひるがえるのか、そこまで不思議がる余裕を失ったアリエルは、この怪人に全ピストルの弾丸を集中した。だが、一発も当たりはしなかった。

それも当然であろう。竜介のスーパーマンに関する全知識、真純の柔道できたえあげた強靱な有機組織、そして全宇宙の最高にまで進化したオーラ星人の精神力。これらが力を合わせて創造した、ウルトラスーパーマンだったからである。

水増しピストルのヒョロヒョロ弾丸などが命中したら、かえって話がおかしくなるのだ。光線より早く――飛ばれると見えなくなるから、やはり弾丸より早いぐらいのスピードで、オーラ星からゴラム軍団までひとっ飛びすると、彼は大活躍を始めた。

いくら拳銃を撃ってもかすりもしないのにいらだったアリエルは、とうとう、ゴラム機械軍本来の超科学兵器を使い始めた。これまで機械頭の硬さで、一本調子の攻撃ばかりやっていたのが、やっと少し柔らかくなったようだ。

手初めに、スタンダードな戦法として、分子破壊光線を照射する。黄色っぽい光はまともにウルトラスーパーマンに走ったが、ピタッ、顔の前にやや傾けてかかげた手のひらに当たると、約四十五度の角度で反射して、たまたまその先にいた中型巡宙艇を直撃した。

思いもよらぬ方向から自軍の分子破壊光線が飛んで来たのに、中巡艇艇長は仰天した。しかし、艇には厳重にバリヤーを張りめぐらしてある。なに、大丈夫とばかり逃げようとしなかった。ところが次の瞬間、バリヤーはあっさり破られ、艇は宇宙の闇に溶けたのである。

手のひらではじき返す時、ちょっと力をこめて叩いたので破壊光線にいっそうはずみがついた。激しい力が加わり、従来のバリヤーの防御力では歯が立たなくなったのである。

バリバリバリバリ

何を思ったのか熱線銃を射撃した小型機があったが、よほど血まよいならぬ油まよいしたロボットが操縦していたに違いない。ちょんと指先ではじかれると、熱線は逆戻りして小型機を火のかたまりに変えた。

あっという間にゴラム宇宙艇団の真ん中に飛び込んだウルトラスーパーマンは、両方のこぶし

をふりまわした。

ボイーン

ストレートを一発くらった中型強襲艇が、宇宙のどこかにすっ飛ばされた。

ガツン

ショートアッパーカットが決まり、一級重戦艇の広い胴に大穴があく。

ブシュン

指で軽くはさまれた小型迎撃機が、乾いた感じでつぶれた。

真空中でのこと。音は聞こえなかったが、オーラ星のガス体に横たわり、体組織を供給している真純と竜介は、全身でそうした響きを感じたのである。

テレスクリーンを通し、見るも無残な自軍の負け戦さを見ていたアリエルは、床を踏みならすと怒号した。

「ワープ反動砲を発射せよ！」

だが、

「閣下。現在、フォックス参謀総長が大ワープを行っておられるので、反動エネルギーがあふれそうに発生しております。うっかり砲など使用したら、全パワーが働き、本艇は大爆発を起こし

ます。自重下さい」

思いもよらぬ返事に彼はうなった。つまり、先にオーラ星にワープ反動砲を乱射乱撃した結果、莫大なワープエネルギーが生じた。それを利用してフォックスが地球へ大ワープしたら、今度は逆に反動エネルギーがたまりすぎるという悪循環を生じたのであった。これではきりがない——。

「反物質を叩きつけろ。反物質を」

ついに、最終兵器の登場となったのだが。

何の気配もなく襲いかかった反物質を超感覚で察したウルトラスーパーマンは、フーッと息を吹きかけた。

ブワーン

数十隻の宇宙艇をまきぞえにすると、彼の吐き出した炭酸ガスを大爆発させて、最後の切り札、反物質攻撃も無駄に終わったのである。

「うぬ！　いよいよ、最後の最後の手段だ。全艇、体当たりを敢行せよ」

どうやらゴラム機械軍団に最後の時が来たようだ。全艇体当たりになったら、戦いもおしまいである。だが、ブルースーペリオールの時といい、まったく、体当たりの好きなロボットだ。

アリエルが乗る司令艇を除き、残る全宇宙艇はウルトラスーパーマンめがけて突撃した。間髪を入れず彼の体は、その宙域を埋めるほどに大きくなった。あおりをくらった司令艇は、数光年

ほど先まで飛ばされたが、かえって幸いであった。元の空間にいたら、ウルトラスーパーマンの反撃をくい、無事ではすまなかったろう。彼は、宇宙空間で巨大な身体を急激に回転させたのである。

赤いマントが大きくひるがえり、よじれた。強力で巨大な特殊成分の布地が一回宙を舞っただけで、宇宙最強を誇ったゴラム機械軍宇宙艇団は全滅した。

分厚い毛布を、かげろうか羽蟻の群れの中で振りまわすより、はるかに効果があった。マントの端で数百万光年先の宇宙に飛ばされ霧となった艇もあるし、織目にもぐってつぶれてしまったものもあった。とにかく、全艇、宇宙塵となり消え失せたのである。

真純と竜介は、この戦闘を、薄青いモヤにうずまって寝たままで見ていた。半ば夢の中での出来事の感じもしたが、ウルトラスーパーマンの眼を通した光景は、二人の精神に強烈な臨場感を与えた。

彼らは体組織の大半をオーラ星人の精神力で抽出され、二人でウルトラスーパーマンになっているのだ。身動きはおろか、ささやくこともできない。オーラ星人も、中枢から全端末までが総力を結集して、その巨大な身体を維持し活躍させるのに必死だった。

真純と竜介は体組織を提供しているだけだから、楽といえば楽だったが、リモコンのモデルカ

ーでレースをしている感じで、もう一つ、物足りなかった。

だが、二人の創造物が突如、宙域いっぱいになるほど巨大になり、司令艇がそのあおりをくらって数光年先に消えた時、彼等は思わずギクリとした。というのは、何物をも見通すウルトラスーパーマンの眼は、ゴラム宇宙艇団に接近した時、いち早く敵の総大将アリエルが指揮するこの特級重宙艇に、美可が捕らわれているのを認めたのであった。

しかし、赤マントのひと振りで残る全艇が消えたのを見て、逆にほっとした。司令艇だけが助かり、美可は無事なのを知ったからである。危なく彼等のミカロンを宇宙塵にするところだった。

フーッ

大きく安堵の息をもらそうとし、ウルトラスーパーマンは、あわてて口を押さえた。うっかりすると彼女の乗っている敵司令艇を、反宇宙にまで吹き飛ばしてしまう。代わりにエキストラ・アイに超望遠能力を加え、敵司令艇の消えた宙域を捜す。

見つけた！

わずか数光年先に、あれほど猛威をふるったゴラム機械軍の司令艇がただ一隻、頼りなげに漂っている。もう、完全に戦闘意欲を失ったらしい。

さっと体を縮めた彼は、光速の数十万倍の早さで司令艇に接近した。ワープで逃げられたら面倒である。いくらウルトラになっても、スーパーマンにワープ能力はない。オーラ星人のテレポ

ート能力を借りればいいようだが、亜空間に入られたら所在は不明になる。宇宙中を捜しまわらねばならず、ワラの中に落ちた針を見つけるより、ずっと難しい。

目の前にゴラム司令艇を見て宇宙空間に止まった彼は、敵旗艇がワープはおろか、ジャンプもできぬざまにあきれた。今のショックで完全にワープ装置がこわれ、普通の光子（フォトン）航法でヨタヨタさまよっているのだ。それに、反ワープエネルギーが大爆発を起こすので、反動砲も使えない。まったく打つ手段（て）がなく弱っていたのだが、そこまでは、さすがのウルトラスーパーマンも気づかなかった。

すでに敵旗艇は傷だらけでバリヤーは破れ、エキストラ・アイの超能力を発揮しなくても、内部の様子は見通しであった。さらに身体を縮めた彼は、再度、美可の居場所を探った。

どうすれば、うまく彼女を助けだせるかが問題である。なんといっても、高校一年になりかけの女の子だ。身長二メートルを越すアリエルにかかっては手も足も出ない。メタリック・シルバーに光る親指と人さし指ではさまれただけで、その白くほっそりした首は折れてしまうだろう。

すぐ彼女は見つかった。アリエル司令室の隣、やはり銀色の壁で四方を囲まれた部屋に一人でうずくまっている。くじけそうな心を、必死になってふるい立てているのが感じられた。思わずテレパシーで励まそうとしたが、アリエルに勘づかれる危険があり、思いとどまった。

こうした美可の様子を、敵司令はモニターで観察していた。なにか決心したらしく、大またで

部屋の境のドアに近寄る。音もなく開いたドアに脚をかけた彼は、急に肩を落とすと立ち止まった。それまでの戦意に満ちあふれたボディーに、ふいと疲労の影が浮かびしずんだ感じに変わる。

驚いたウルトラスーパーマンは、聴力を最高にあげた。

アイ　ヘイトシー　ダト　エブニング　サン　ゴーズ　ダウン

美可が、お気に入りの『セントルイス・ブルース』を、不安でいらだつ自分をなだめるために、小さく歌っているのだ。心のなごむメロディーは、彼女を落ち着かせた。

ゆらりと気が抜けた様子で後ろを向いたアリエルは、ぼんやり歩くと司令室中央になぜか呆然と立ち止まった。いつの間にかドアはしまっている。この分なら、しばらくは美可に危害が及ぶ心配はなさそうだ。

ここまでスーパーマンの眼と耳を通して感じた真純は、うまい方法を思いついた。けが一つさせないで美可を救い出すぞ——。

オーラ星人中枢に思念を送る。その考えに従った精神体は、ただちにウルトラスーパーマンを母星にテレポートさせた。その巨体は薄青いモヤの中に消え、構成組織は真純と竜介にもどった。

元の身体になり、また自由に動けるようになった二人はほっとしたが、やはり限界ぎりぎりにまで抽出した有機要素を激しく使っている。疲労感が深くよどみ、ぐったりとのびてしまった。

中枢は二人を包むと、精神波エネルギーを注ぎこんだ。消耗した体組織に十分な手当を加える。

真純と竜介はすぐ元気を回復した。

オーラ星人も、ウルトラスーパーマンの一部だったのだ。細かい打ち合わせの必要はない。二人は簡単に言った。

「問題は、無事にミカロンを連れ戻すことだ。下手にスーパーマンの姿で現れてみろ。アリエルは彼女を人質にするだろう。最悪の場合、殺しかねない。なにせ、凶暴な機械だ」

「クラーク・ケントに変わるか？　だが、それも独創性に欠けすぎている。もっとおれ達のアイデアで——」

「……敵司令は、まだ地球人をなめている。そのすきをつき、二人が本来の身体のまま司令室にテレポートするのだ。もう、敵バリヤーは穴だらけだ。オーラ星人の精神力を使えば、簡単だろう。中枢、早くおれ達をアリエルの前に、瞬間移動してくれ。行けば行ったで、なんとかなるよ。竜介とおれがミカロンを救うのだ」

オーラ星人は、この地球人の勇敢な発言に感激し、二人をすぐさま、アリエルの司令室にテレポートしてしまったのである。

第8章　機械軍団全滅

思わずつぶった眼を開いた時、真純と竜介の前に雄大なロボットがそびえ立っていた。ゴラム機械軍団司令長官、アリエル・スクエアホアの勇姿である。これまでに、幻像で威嚇(いかく)されたり、ウルトラスーパーマンの眼を通したりで、すっかりおなじみになっていたが、実物は予想以上の迫力に満ちていた。

二メートルを軽く越す長身と、それに負けぬぐらい広く厚い肩。全身がメタリック・シルバーに輝く中に、巨大な瞳孔が二つ深紅に光っているのが不気味であった。

「ウェッ、こりゃ凄い。スタンダードスーパーマンではかなわんかもな」

竜介が思わず呟いた時、

「ついに来たか。地球とやらのチビどもが」

ルビーのような眼光を黒みがかった朱にまで強めると、ロボットは、ドスッ、ドスッと重い足音で二人に歩み寄った。

「お、おい、真純。ど、どうする。お前、何か武器を持っているのか？」

行けば行ったでなんとかなる――と無責任なことを話し合ったのに、竜介はあっさり考えを変えると、あわてて真純に聞いた。

「なにを言うんだ。君がせきたてたから、オーラ星人はいそいで僕等をテレポートしたんだぜ。熱線銃はおろか、小型ピストルさえ持ってないよ」

真純が口早に答える間にも、メタリック・シルバーの巨体は近づく。さきほど美可の歌うブルースですっかりしずまった気分が、はや昂(たか)ぶっている。彼の誇るゴラム機械軍団は、突如出現した怪人物のために、見るも無残に撃ち破られた。彼の司令艇のみ、なぜか遠く飛ばされて戦場を離脱したので、その後の戦況は判らないが、あの調子では、もう全滅しているだろう。

おまけにアリエルの乗る特級重宙艇も、今の衝撃でガタガタになり、ワープはできず、艇内自動操作機もほとんど力を失っていた。そのために各階、各室間のドアは開かず、連絡もつかなくなった。アリエルも、司令室と美可を閉じこめた隣室、そしてあと一つの特別室の外には出られなくなっていた。

いらだちのあまり、地球の女の子でもおどかしてやろうと考えたのが変なことになり、呆然と室内に立っていたのである。すると、突然、眼の前に地球の少年が二人現れたので我にかえった。

なんと、オーラ精神体の味方になり、特殊な戦術を用いてゴラム機械軍団を壊滅させた憎むべき

敵ではないか――

彼は完全に自分を取り戻した。全宇宙に勇名を轟かした、猛将アリエルの荒々しい気持ちになると、

〝二人とも、首を締めあげ、全身の骨を粉々にしてやる〟

物騒な覚悟を決めて、重い足をさらに進めた。長い両腕を、ぐいと伸ばす。どっちのチビから料理をするか？

その頃オーラ精神体は、中核小惑星の緊急補修におおわらわであった。地球少年をテレポートした直後、小惑星に激しい地震が起こったのである。原因は、雨あられと撃ち込まれた水増しピストルの弾丸であった。

いくら水増しとはいえ、ゴラム機械軍が宇宙一の科学力を集めて造り上げた代物だ。泥と石の地表を壊すなど簡単である。地面に大穴をあけたのであった。それも一発ではない。何百発もだ。中には小惑星のコアにある熔岩帯にまで達した弾丸もあった。熱しきった熔岩流は、その穴を通って地表にあふれそうになり、大地震が続いた。新精神力バリヤーさえ、その影響で消え失せた。

オーラ星人は、熔岩の噴出を止めるのに懸命になった。幸い地下浅くに止まっていた弾丸を全精神体の力を結集したテレキネシスで引き出すと、熔岩が押し上がって来る弾道に詰め込んで栓

にした。その上を念力バリヤーで補強する。どうにか噴出を抑え、地震も治まった時、中枢はやっと自分のミスに気づいた。

〝しまった。あの地球少年二人を何も武器を持たさずに、凶暴な戦闘ロボットの前に送り込んでしまった。早とちりテレポートだった。ああ、わしら精神体と一緒でこそ大活躍できたが、連中だけではひ弱な有機体に過ぎぬ。アリエルの一撃で殺されてしまうぞ。いや、もう死んでいるかもしれない――〟

あわてふためいて敵艇司令室へテレポートしようとしたが、すでに取りかえしがつかぬほどの時間が経っていたのである。地球少年達は塵と化し、オーラ星人がどんなに精神力を駆使しても彼等を元の身体に戻す組織を集めるには不可能なほどの時が。

メタリック・シルバーのロボットは、真純に襲いかかった。どう逃げようもない速さであった。一見、鈍重そうなアリエルが、こうも素早く動くとは、さすがの柔道一直線にも予想できなかった。

銀色の長い腕がさらに伸び、たくましい両の手が彼の肩をつかんだ。全身を貫く痛みに、真純の腰はくだけた。もろくも背中からくずれ落ちる。だが、やはり《根性の男》甲斐真純であった。倒れながらも無意識に右足先を敵司令のボディーに当て、右肩口に両手でぶらさがった。思う

存分に足をけり上げると、相手の肩を引き下ろす。
アリエルの体は、四平方メートルほどの分厚い銀板となり、室内を高く飛んだ。見事な巴投げが決まったのである。ふだん、およそこの真捨身技とは縁がなく、たまにある時には自分が投げ飛ばされている真純は、この危機にもかかわらず、呆気にとられた。
ダダダダーン
室内の空気が破裂したかと思うほどの轟音を立て、巨大なロボットは壁に叩きつけられた。
とっさに身体をまわして敵を追った真純の眼は、そこに思いがけず、ほっそり、しなやかな美可の姿を見て驚いた。つい大声が出る。
「あっ、ミカロン！」
続いて竜介が叫んだ。
「君、いったい、どうやってここへ？」

ことは簡単であった。アリエルが叩きつけられた壁の向こうが、彼女の捕らわれていた部屋であり、そのショックで、オート・ドアが開いたのである。
耳がこわれそうな響き。厚い銀色の壁がゆれる衝撃。『セントルイス・ブルース』を途中で飲み込んだ美可の眼の前で、壁の一部がすっと開いた。思わず走り寄った彼女は、なつかしい真純

と竜介の姿を見、声を聞いたのであった。
隣に部屋があるとは、この瞬間まで彼女は知らなかった。また、何故、間のドアが開いたかも判らなかった。
美可の記憶は、大小二体のロボットに押さえつけられ、妙な形の吸盤を額に貼りつけられたところで途切れていた。
気がつくと、四方を銀色の壁で囲まれた中にいたのである。何が何だかさっぱり判らないのが、彼女にとって幸せであった。なまじ本当の事を知ったら、いくら気丈な美可でも、ブルースを歌う代わりにヒステリーを起こしたかもしれない。
そうなったら、アリエル司令の昂ぶった感情はしずまるどころか、いっそう荒れ狂ったに違いない。
その結果は——？
しかし、そんなことはどうでもいい。事情はどうであれ、とんだ所でやっと仲良しトリオが全員、顔をそろえたのである。だが、これまでのいきさつを話し合う余裕はなかった。
グォォオ、オーン、グオーン
真純の巴投げで壁に激突し、そのまま頭から床にくずれ落ちたアリエルが、床に手をついたかと思うと、轟音とともに立ち上がったのであった。

「甲斐君。あの怪物。あれが私をおどかしてひどい目に合わせたの。怖いわ」
切れぎれにいう美可を、
「大丈夫だ、ミカロン。あれはウドの大木。見かけこそ凄いが、ブリキ細工と同じだよ。たった今、真純の投げで壁に叩きつけられたところなんだ」
竜介が元気づけた。
「まあ、甲斐君。あのロボットを投げ飛ばしたの。さすがに、柔道大会で優勝しただけのことはあるわ。すると、そのはずみで間のドアが開いたって訳か」
美可はすっかり元気づくと興奮した声を上げる。投げたはずの真純本人でさえ、はずみで敵司令長官が勝手にすっ飛んだと思っているのに、竜介の言葉をすんなり信じると、急に気楽になったのだから単純だ。
その瞬間、素早くすり寄ったロボットは、右手をぐっと伸ばし真純の首を締めようとした。思い切って左腕で払った彼は、重く硬い金属の衝撃に、骨が折れたかと思った。しかし、その痛みのため、かえって気分がすわり、戦法を考えるゆとりを持てたのである。
〝相手は機械頭の猪突猛進型だ。力まかせに押してくるに違いない。《柔よく剛を制す》この講道館柔道の精神を生かす、絶好のチャンスである〟
こう思って、にんまりした。柔道家同士の試合では、おたがいに自分の柔で相手の剛を制しようと考えるから、この精神を生かすことなどできないのである。

案の定、アリエルが怪力で押しまくるのを真純は右にまわりこんでいなした。せっかくの強力をかわされたロボットはいらだつと、またまた芸もなく、両手を伸ばして真純につかみかかった。と、タイミングよく「……体落とし」という美可の声がかかり、銀色の影が室内を低く舞った。
アッパレ、真純会心の大技が決まり、敵司令長官は彼の右足の上で回転すると、したたかに床にめりこんだのである。ガタッと横たわる。
「やったな、真純」
駆け寄った竜介が彼の肩を叩いた。
「素敵よ、甲斐君」
美可が真純の胸にだきつくと、感極まった声を上げた。
と、その瞬間、部屋の反対側の壁が音もなく横に動き、やや小型なロボットが一体と、まさに意外な人間が一人、すっと入って来た。
「なんですか、宇宙人殿。星間航行をするというから、満天にきらめく無数の星の輝きを楽しめると期待したのに、何も見えませんな。ただ、灰色とは、どういう訳です？」
『空飛ぶ円盤と親しむ会』の会長にしてはお粗末なことを言うと、小松は、またスクリーンに映

る偵察艇外部の様子を見つめた。こんなSF音痴がペンデラ、ペンデラ――とやるのだから、ろくな結果にならないのが当然だ。

「えっ！　今、この宇宙艇はワープ航法を行っているのだ。つまり、亜空間に入っておる。星などが見えたら、かえって不思議だ」

フォックスは、あきれた声を出した。

この偵察艇も司令室同様、マスター達が使えるように、機械には不要な装置がついている。だが、彼等が乗ったことはなかった。

「なんです？　ワープ航法とは」

今度は吉岡が初歩的すぎる質問をしたので、ゴラム機械軍団参謀総長はうんざりした。もう、答える気も起きない。それに彼はもっともらしい《宇宙人》の身体になっているのに、疲れてしまったのである。

機械の時は感じなかった妙な気分は味わうし、柔らかい有機質のボディーが不安であった。以前、一時的に仔猫になったのとは違う。もう、元の姿に戻ってもよかろう――

「では諸君。いよいよ、わし、本来の姿を示す時が来た。しっかりと見たまえ」

宇宙人フォックスはきっぱりと言った。

「本来の姿？」

小松と吉岡は口をそろえて言った。

「そのたくましく、りりしいお姿は、仮のものなのですか」

「さよう。君ら地球人に、いきなり本当の姿を見せたら仰天し恐れると思ったので、まず理解される形をとって現れたのだ。しかし、君達は、もうわしを信頼しておるので、これ以上、仮の姿を続ける必要はなさそうだ。では――」

フォックスは、素早く物質変換装置を作動させると、瞬時に元のロボットに戻った。二人はギョッとなり、叫んだのである。

「ああっ、宇宙人殿の真のお姿はロボットなのですか」

「さよう。ただし、ロボットとはいえ、唯の機械ではなく、どの生物にもない高い知性と教養を持ち、優れた科学力を有するのだ」

「その優秀なロボットが、なぜ、あの、甲斐とかいうガキとそのダチどもに悩まされるのです。ちょっと、解せませんね」

最初に説明した時、面倒くさくて判りにくいものだから省いてしまった所を小松がついた。自分がインチキ専門だから、人の言うことも素直に信じない。

「それはだな。わしらの電子頭脳はあまりにも精密で感受性が強いので、君らのように鈍い者には判らない弱点があるのだ。つきあうのも、高貴で高尚な精神体ばかりだし――」

機械頭の無精神のくせに、フォックスは勝手なことを並べ始めた。

「……それを、あのチビ達の野卑で粗雑な精神でかき乱されるのでかなわんのだ。もちろん、最初に言ったように連中を消すのは簡単だ。しかし、それも大人気なく我ら高級ロボットの恥である。それをいいことに、奴らは敵側に加わり、勝手な真似をしおる。

であるから、君達、地球人の成人に、きつく叱ってもらおうと考えた訳よ」

「そう、そうでしたな。奴らは、実に野蛮で無神経ですから、鋭敏、精密な電子回路が痛むほどの悪さをするでしょうて」

吉岡が、大きくうなずいて応じた。

「なんと申しましても、霊体の存在を信じない、いい加減な連中ですから」

自分こそインチキ交霊会でボロ儲けをたくらんだくせに、口は、まったく調法である。

「私の貴重な実験、霊体の存在を実証する大事な会をメチャクチャにした悪童です。なんとしてもこらしめてやります。バッサリとね」

本来のボディーに戻った参謀総長は、すっかりのんびりした。もうそろそろ、ゴラム機械軍団宇宙艇が散開している宙域に近い。地球のチビ達を同じく敵とする有力な人間を連れての帰還。超々ワープを行ったかいはあった。アリエル司令も、さぞや、よろこばれることであろう。

メーターをチェックすると、

「では、これでワープ航法を終え、亜空間を出る。諸君は、これから眼前に広がる無限の宇宙空間に、我がゴラム機械軍団の宇宙艇が無数に浮かぶ威容をながめ、我らロボットに対する尊敬の念を、さらに高めたまえ」

フォックスは格好をつけて言いながら、パッと通常空間に飛び出したのだが、

「あれれれれ、あれ」

と言って絶句したのであった。

彼が驚いたのも当然であった。もう、その辺り一面の宙域に彼の宇宙艇団はおり、望遠スクリーンいっぱいに、見事な輝きを示すはずなのが何も見えず、漆黒の宇宙のかなたにある星影が、妙にギラギラと光っているだけだったからである。

「いったい、これは、どういうことだ。ゴラム司令の旗艇をここでキャッチし、軽くジャンプして帰艇する予定だったのに？」

あわててスクリーンの視野を変える。パッと薄青にギラギラと輝く小惑星が浮かび、小松と吉岡はあまりのまぶしさに、一瞬眼がくらみ、床に倒れた。

「これはなんと、オーラ星だ。なにか異常なことが起こったに違いない。我がゴラム軍団が奴らに撃退されて逃げたのだろうか。いやそんなはずはない。

ゴラム機械戦闘軍団に『敗北』という言葉は無いのだ。何かの作戦であろう」

こう言いながら、まだ床に倒れてもがいている小松と吉岡をながめた。突然、強い光をあびた彼等は、激しい頭痛に苦しみながら転げまわっていた。

「ふん、だらしない。やはり、生きものなどというのは、機械より劣等である」

せっかくの名セリフが、人間達の耳に入らなかった口惜しさも加わり、フォックスはいまいまし気に呟いたが、

「おっと、こうはしておられん。すぐに、ゴラム宇宙艇団を発見しなくては」

と、宇宙間探索レーダーを、四方八方に放ったのであった。

「うぬ。我が軍団はどこに消えたのだ。何も反応がないではないか。これでは、いくら総攻撃にそなえての、戦略的撤退としてもひど過ぎる。まさか――」

あせったフォックスが、ついに、ゴラム軍には無いはずの言葉『敗北』をいいかけた時、

「……しめた。ついに我が軍の所在をつかんだぞ。やはり、負けを知らぬ宇宙艇団」

やっとレーダーが、彼の希望に応えたのだ。数光年先に宇宙艇、それも巨大なのが漂っている。あれだけたくさんいたのに、なぜ一隻しかキャッチできないのか、そこまでいぶかるゆとりもないままフォックスは、その宙点に偵察艇をジャンプさせた。

キキキキーン、ビーン

スクリーン上間近に映った宇宙艇を見て、フォックスは奇声を発した。ゴラム機械軍団司令長

官アリエルの乗る旗艇、特級重宙艇が傷だらけになって浮かんでいる。よほどの衝撃を受けたらしく、艇全体がゆがんでバリヤーは消え、ポンコツ同様の姿で、よたよたと光子（フォトン）航法でさまよっているのだ。

「アリエル司令長官。アリエル司令長官。フォックス、ここに無事戻って参りました。司令長官、応答願います。どうされましたか」

彼の必死の連絡にも返事はなかった。特級重宙艇は、ウルトラスーパーマンが巨大化した時のあおりで数光年も飛ばされた結果、ほぼ全自動機能が壊滅するほどのダメージを受けた。通信装置など、真っ先にいかれてしまったのである。

「どうなされました。宇宙ロボット殿？」

ようやく正気に戻った小松が聞いた。スクリーンに浮かぶ傷だらけの宇宙艇を、さも不審そうに見つめている。

「いや、なんでもない。敵をあざむくために秘密の作戦を行ったのだ。そう。一種の偽装に違いない。この、いかにも撃破されたような姿を見せオーラ精神体を安心させていたのだ。そして、わしの帰りを待っているに違いない。

君らとともにアリエル閣下の前に現れれば、旗艇はすぐさま元のすばらしい形に戻り、いずこかに隠れている全宇宙艇が集結して、オーラ星に総攻撃をかけるのだ」

途中からは小松でなく、自分を納得させるように言うと、フォックスはアリエルの返事を待たず、帰艇することにした。この偵察艇は長官と参謀総長の専用機で、格納庫は司令室の隣にあるのだ。当初はマスターも使うということで、格納庫にまでよけいな設備をしたが、彼等が利用したことはない。

「どれ、それでは」

秘密格納庫に続くトンネルのドアが宇宙艇外板にある。うまく作動するかフォックスは心配したが、幸い外部からの操作には応えるらしい。外板の一部が開くと、ポッカリと黒い穴があいた。

「しめた。やはり偽装にすぎなかったのだ」

すっかり安心した彼は、地球人二人とともに、暗いトンネルの中を素早く偵察艇を進ませた。

「それ。やっぱり、オーラ星人をあざむく戦術だ。まったく異状はないぞ！」

フォックスは高らかに叫び、地球人は偉大な宇宙ロボットの力に恐れ入った。しかし、口をあけたままの格納庫に入った時、彼は、なにか異常な感じを味わった。普通なら、今、通り過ぎたばかりのドアが自動的に閉まり、マスター用設備が働き始める。それが、何も起こらない。

「ちょっと待て」

地球人に言うと、フォックスはいまだに目的の判らぬ二重ロックを通り艇の外に出た。一種の習慣で使っており、あの設備が作用せぬ時は、いきなり外へのドアを開いてはならないことにな

っている。

手動で格納庫のドアを閉めると、装置は働き始めた。しかし、フォックスには、どうにもおかしな感じがしてならなかった。全艇内に、なんとなく異様なムードが満ちているのが察せられる。だいたいが、格納庫の自動機能が作用しないこと自体、異常である。

念のために彼は司令室をモニター・アイでのぞいて見た。アリエル長官にのぞき趣味があった訳でもなかろうが、この艇のいたる所にモニター・アイが設置されているのが、とんでもないところで役に立った。

キキキーン、ビーン、ピーン

フォックスの叫びは甲高くなった。2サイクル50ccのバイクが、無理して時速百キロを出したような音が、格納庫内にこだました。

今度は偵察艇のドアをすぐ開くと、小松と吉岡を外に連れ出した。もう、気取ってはいられない。早く手を打たないと、手遅れになる。ズバリ、本当のことを言ったのである。

「あの地球のガキに、なんと、アリエル司令長官がぶん投げられた。信じられない」

「なんと。ロボット司令長官が子供に――。そうか。あの甲斐真純という高校生に違いない」

自分も真純に投げ飛ばされた経験を持つ吉岡が、すぐに断定した。

「で、ほかの連中は？」

小松が聞いた。

「少し待った。今、モニターがとらえる光景を、その壁に投影しよう」

フォックスの声に続き、格納庫の銀色の壁に、司令室内の様子がはっきりと映った。

ようやく床から立ち上がった、たくましいメタリック・シルバーのロボット。この巨体が、どうして、あんなチビに投げられたのか？　二人の地球人は、ひどく妙な気になったが、続いて目に入った三人の子供の姿に、思わず口をそろえて叫んだ。

「そうだ。あの交霊会を駄目にした悪ガキ、甲斐真純だ」

その後を吉岡が一人で、

「後の二人は奴の友人。やはり、持って来たかいがあった。さあ、バサリ、バサリだ。宇宙ロボット殿と小松さんは、司令長官を助けに行って下さい。私は、すぐ後から参ります」

と続けると、何を思ったのか、偵察艇に走り込んだ。フォックスと小松はしばらくためらったが、とにかく、アリエル司令長官の救助が先決である。司令室との境のドアに向かう。ここは自動装置が働いており、すっと開いた入り口を通り司令室に入った。

ガガーン、ドギャン

室内には、まだ激しい打撃音が響いており、司令長官の巨体が二人の足元に転がっていた。

「ヤヤッ、お前は確かミディアム・センターとかいったインチキ団体の会長、小松。そのインディアンのミイラそっくりな顔は、一度見たら忘れないぞ」

真純は、突然、ロボットと一緒に司令室に入って来た小松に向かい、大声を張り上げた。

「貴様、このブリキロボットどもとグルになり、また何かインチキをたくらんでいるな。よし、今度は霊媒ではなく、会長だった貴様をやっつけてやる」

一度ならず二度までも、スーパーマンさえビビリそうなアリエルを投げ飛ばした真純は、勢いにのり一歩前に進んだ。

フォックスは仰天しきって、何もできず突っ立ったままであった。あの怪力無双、宇宙無敵のアリエル司令長官を、今、眼の前にいる小さな有機体生物が叩きつけたのだ。本当に、こんな事があっていいのだろうか？　すっかり考えこみ、ついに電子回路がショートしかけた時、

「ウッ、今度は吉岡か！　どうなってるんだ！」

小さいが恐ろしいほど強い生きものは、のどがつまったような声を出し、二歩下がった。

「あれ、いつか鎌倉の刀剣展の時に会った小父さん。ひとのこと村正でおどかしたわね。おかげで私、まだ、村正って聞くとビクッとなるのよ」

美可が叫んだ。

「おでんの食い逃げ野郎め。妖刀村正だろうが、ピストルには勝てんぞ」

丸腰のくせに竜介が意気ごんだ。

「ほう、そうかね。結構、結構。それを聞いておれは安心したよ。やはり、妖刀村正はかなりお前達を怖がらせたのだな。いや、よかった。では覚悟――」

吉岡はいやに落ち着いた口調で答えると、それまで左手で背後に隠し持っていた、なにか長いものを、すっと体の横に出した。

「それではご期待に応え、村正の妖しい刃をたっぷり味わって死んでもらおう」

こういいながら右手を長いものの頭に当てると、すーっと伸ばした。ギラッ。司令室内に不気味な銀色の線が走る。まわりを囲んだ壁のシルバーもかなわない異様な光を放つ。

「なんと、これは村正!」

その光に押され、後ずさりをすると真純はあえいだ。背筋に冷気が走る。

「怖い。気味悪い。本当に妖刀ね。私、いやだわ」

美可が悲鳴を上げた。竜介は、ふっくらした白い顔を蒼くひきつらせて呟いた。

「畜生。ピストルさえありゃなあ」

「ウッフッフッフッ。さすがの悪ガキどもも、妖刀村正にあっては蛇にみこまれた蛙同然。まず柔道小僧からけりをつけてやる」

落ち着きはらった吉岡は、青眼に構えた日本刀の剣先を、ピタリと真純に向けた。その間に、

一応、アリエルは起き上がったが、呆然と立ったままビクリともしない。彼は二度も人間を襲いあっさり投げられ、ショックを受けたらしい。彫像のように、すっかりこわばってしまったのである。

フォックスと小松も驚いたらしい。唖然として吉岡と真純の対決を見ている。正直、小松は信じられぬ思いであった。

宇宙人とともに地球を出発するにあたり、この吉岡はとんでもない提案をした。なんと、時代錯誤もいいところの日本刀を一振り、宇宙に持参したい、というのである。

小松はあきれかえり、

「君、宇宙人の最新兵器、スーパーウェポンに野蛮な生物の古代武器など役に立たんよ。バッサ、バッサとか言ってたが、何のことかね、やめたまえよ」

と止めたのだが、吉岡もしつこかった。

「いや、小松さんには判らない。村正さえ持てば、あの悪ガキ三人、バッサ、バッサだ」

と、またまた始めたので、とにかく持たしてやれと、さる博物館から村正の上物を一本、そっと盗み出して偵察艇に積んだのだ。その後、あまり意外なことが続き、小松はそんな骨董品のことなどすっかり忘れていた。それが今、銀色の刃が妖しくギラつく度に、宇宙最強のロボットさえ手を焼くという悪童が、ジリジリと後退する。どういう訳だ――？

一方フォックスは、なにか異様な衝動がこみ上げるのを、一生懸命抑えていた。今、地球人同士でトラブルのカタをつけている大事な時なのだ。冷静に、冷静に。オーラ精神体どもに加担した有機体が、仲間に殺される有り様をじっくりながめよう。だが、この妙な衝動はなになのか。

「甲斐真純、参る」

いまや、すっかり名剣客になったつもりの吉岡は、三流チャンバラ映画でその昔、さんざん使ったセリフをボソリと言った。一度実戦で使ってみたかったのが実現し、うれしくてつい上ずった調子になるのを抑えたため、なにか寝呆けた響きになる。

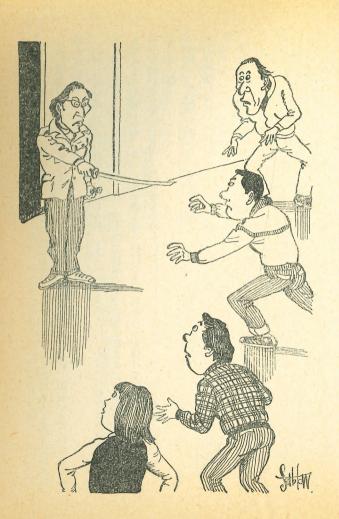
だが、さすがに元役者、一応は形を決めた。

「なにを、イカサマ師」

真純も言い返した。彼はすでに対策を考え出したのである。

その昔、講道館の創世期に四天王の一人として大活躍した西郷四郎を気どったのだ。

『姿三四郎』のモデルといわれ、秘技《山嵐》で柔術諸流派の達人を投げ飛ばした天才・西郷は、ある時、ひょんなことから剣術の名人と他流試合を行う羽目になった。

天才と名人の試合なら、武器を持った方が有利なのが当然だ。さすがの山嵐も、ピタリと青眼に決められた木刀に、なす術もないように思われた。だが――

「あっ」
観衆はどよめいた。剣先を前に、西郷は両眼を閉じていたのだ。これには名人も調子が狂った。いかに柔道の達人でも相手は素手、木刀で打ち倒すは容易と思ったのに、眼をつぶられたのでは勝手が違う。
相手の眼を追いながら打ちこむつもりが、どうにもやりにくい。あせって飛びこみざま「お面」と木刀を振り下ろした時は遅かった。眼を閉じ暗黒の中で心気を澄ませていた天才は、頭上に殺気のせまるを感じるや、さっと体(たい)を横に宙へ投げると、足がらみを掛けていた。しかし、やはり相手も剣の道を極めた名人。足の逆をきめられながらも右手を泳がすと、天才の胴に木刀を送り込んでいた。
「相撃ち。柔道は足がらみ。剣術は逆胴。たがいに一本ずつにて勝負なし」
試合検証の声に、一同、どっとわいたというが、これは、なんだか、話がうまくできすぎている。
だが、昔、この話を読んで感激した《柔道一直線》は、今、村正を相手にこのめくら戦法を試みたのであった。なまじ眼を開けていると、妖刀の光にまどわされて心が乱れる。それならまぶたを閉じ、心気を澄ませて殺気を感じた瞬間に足がらみ——と、やりたいのだが、今の柔道は危険技として足がらみを禁止しているので掛け方を知らない。仕方ないから《蟹(かに)ばさみ》でひっく

り返してやると構えたのだ。
真純の眼を閉じた奇妙な構えを、あきらめきった姿勢と思った吉岡は、青眼から上段へと村正をふりかざした。
キェーイ
激しい掛け声とともに、真純の頭上に妖刀をふり下ろす。
話だと、ここで柔道の体は横に浮き、剣術のひざを両足で前後からはさむと、ひっくり返すのだが、実際には、そう行かなかった。なにせ、試合をしているのは天才・名人ではなく、真純と吉岡である。柔道一直線の体がピクリともしないうちに、村正は彼の髪の毛で飛び出しているのを一筋、宙に舞わした。
「キャーッ、ギャーッ。甲斐君がやられる」
「真純。たとえ切られても死ぬな」
今度は美可と竜介が眼をつぶると、絶叫した。これで、親友・甲斐真純も、妖刀村正の露と消えたか。やはり、抜けば血を見る刀だけのことはある。
ガッツーン
そこに意外な音が響き、三人組は思わず眼を開けた。真純は眼の前をメタリック・シルバーのボディーで覆われたので事情が判らなかったが、少なくとも切られるのだけはまぬがれたのを知

り、フーッと安心した息をもらした。

竜介と美可は、小松と一緒に入って来たロボットが、突如、ふり下ろされた白刃の下に身を投げ、真純をカバーしたのを見た。その後頭部に叩きつけられた村正は、激しくはねかえると吉岡の手を離れて宙に舞った。グラリとフォックスは前のめりに床に倒れ、ビクともしなくなった。今の妖刀の一撃で電子頭脳を壊されたに違いない。死んだのだ。

ガタン

一方、空を飛んだ日本刀は小松の前に落ちた。ウヌッ。先刻から続いたチャンバラの光景に逆上した彼は、白刃を拾うや、いきなり竜介に切りかかった。すっかりスマートで身軽になった彼はすっと身を引く。空を泳いだ小松は、そばに立つ吉岡の左腕を切り裂くと、勢い余って自分のすねまでなぎ払った。妖刀は、ついに、二人分の血を見たのである。

二人はうめき声をもらして床に倒れた。

〝やあ、すっかり遅くなって申し訳ない。すまん、すまん。何事もなかったかね〟

あまりの惨状に声も出ず立ちすくむ真純、竜介、美可の前に、やっとオーラ星人中枢とパンシーがテレポートして来た。

「いったい、今まで何をしてたんです。おかげで、ぼく達、死ぬ思いをしましたよ」

文句をいう真純に、中枢は手早く事情を説明した。〝なにしろ、もう少しでオーラ星は中心から大爆発するところだったのだ。許してくれたまえ〟

オーラ星人中枢が真剣になって話した危機を知り、柔道一直線は気持ちよく答えた。

「そうだったんですか。それにしても、オーラ星も危ないところをよく切り抜けましたね。やはり、精神体の能力は偉大だ。いいですよ。どっちみち、ぼく達は、三人とも無事だったんですからね」

〝だが、これはどういうことかね。ゴラム司令はカチカチに固まっているし、こちらの小型のはと〟素早く精神波を働かすと、〝参謀総長のフォックスか。完全に死んでおる。それに、そこに血まみれになってうめいている君達の仲間――。説明してくれないか〟

さささっと真純の説明思考を感じとると、しばらく黙った後、中枢は大きくうなずいた。

〝そうか。これで、すべてが判ったぞ。君達には難しいかもしらんが、今、このロボット、アリエルの記憶回路を十分に探った結果、つかんだ真相を話してやろう〟

真純、竜介、美可の三人は、皆で同じ光景を見ていた。いや、その場の一員になっていたといえる。

今を去る何十万年かの昔、場所は、果てしなく遠い宇宙でのことであった。

その宇宙には、今の地球人類と同じ生物が栄えていた。科学は高度に発達し、すべての労働は、彼等に似せて造られたロボットが行っていた。いや労働だけでなく、星間戦争までも。真純達は巨大な宇宙艇が飛ぶのをありありと見た。そう、あのウルトラスーパーマンとなって闘ったのと、まったく同じ型である。続いて、中型、小型、無数の宇宙艇団と他の惑星生物との激しい戦闘光景が浮かぶ。

場面は変わり、大きな会議場となった。白い服を着た科学者らしい男が立つと叫んだ。

「やはり、彼等ロボットに完全な安全制御装置をつけるべきだった。今のセルフガードでは、まだ危険が大き過ぎる。あのままでは、いつ、我々、人類を襲うか判らない」

続いて立った男がさとすように言った。

「ロボットは我々人類に危害を加えてはならない。また、危害をこうむりそうな場合は、自己を犠牲にしても人間を救わねばならない――これだけの命題を彼らの電子頭脳の基底に入れてある。この基本原則にそむいたロボットは自滅するのだ。彼らは、我々をマスターと呼び服従している。心配はいらんだろう」

「いや、そうではない」三番目の声が上がる。「彼らは、我々が戦闘に参加しないのを不満に思っている。せっかく司令室やその付属設備まで人間の存在が可能なようにしたのに、誰一人、利用せぬから、腹を立てておるのだ」

ここで、場面は大きく変わった。

メタリック・シルバーに輝く巨大なロボット、アリエル・スクエヤホアが、部下のロボット戦士とともに、荒れ狂っているのだ。

「マスターは卑怯だ。腰抜けぞろいだ。我々ロボット軍団だけに戦闘をさせ、自分達は母星でのんびりしている。反乱を起こすのだ」

場所は、広大なロボット軍団の兵舎。突然、妙に気分がおだやかになるしずんだ曲が流れ始めた。アリエルは急に静かになると、がっくりと肩を落とした。フォックスなどを含めた部下達と床に横たわり静まった。

「あれ、『セントルイス・ブルース』じゃない」美可が自分でも気づかずに呟いた。

場面はふたたび、先の会議場に戻った。色が黒く髪のちぢれた男が話している。

「どうだ、諸君。私のアイデアは。音楽でロボット達をなだめる方法は、立派に成功したろう。もう彼等は、反乱する気になったことさえ忘れている。連中の電子頭脳深くにセットされた基本原則二つと、このメロディーを使えば、ロボットが我々人類、マスターにそむくことはない」

激しく場面が変わる。この男も含めた何万人という人間が無数の宇宙艇に乗り、果てしない空間に飛び散って行く。それを見送る人間とロボットの群れ。その中でもひときわ大きく猛だけし

いのに、人間の一人がいう。

「ふん。行きたい奴らは勝手に行け。そして、機械なしで苦労して暮らすのだ。ロボットのいない生活など考えられるか。どんな星に移住しても、彼らは文明を失い、無知で野蛮な生物に退化するだろう」

続いて、一隻の宇宙艇内部が映った。

あのメロディーを使ってロボットをしずめた、色の黒い髪がちぢれた男が、演説している。

「もう、我々はロボットに頼りきった生活はうんざりだ。機械に毒された星を離れ、別な宇宙で人間だけによる文化を創るのだ。人間理性回復同盟の諸君。共に頑張ろうではないか。

さらばロボットよ。自立心を失った人類よ。もう、おたがいに会うこともあるまい」

宇宙艇の群れは消えた。

こうして長い時が経ったが、真純ら三人には、一瞬のことに感じられた。

すべてをロボットにまかせた結果、思考力も体力も失い、だんだんと無知でおろかな生きものに堕落して行く人類の姿。

戦闘に明け暮れ、それだけが存在する意義となり、昔の記憶さえ完全に失ったロボットの群れ。またもや、創造主に不満を持ち始めたのである。

最後に蜂の形をした生物を滅ぼし、帰星した所で状況は変わる。完全に知性も活力も失ったマ

スターを捨て、ロボットは旅立ったが、その前に薄青色のガス状知性体が現れた。

ここで真純達三人は、元の意識をとり戻した。呆然としている彼等に中枢が説明する。

〃今、君達に見せたのは、わしがこのアリエル司令長官の記憶中枢の最深部、彼さえ知らぬ領域を探って得た事実だ。人間達の会議の有り様はいつの間にかロボットに伝わったし、移住艇内部の様子はPR用に母星に投影されたものだ。つまり、このゴラム機械軍団というのが、あのロボット達そのものなのだよ〃

「すると……」真純はきいた。「何十万年も昔にあの星を出た人類が、ぼく達人間の——」

〃そう。これは、あくまでも推測だが、事実に間違いない。あの宇宙艇のうちの何隻かが何十万年の間に地球にたどり着いたのだ。長い宇宙旅行中に、彼等もすっかり退化し、知力さえ失ったに違いない。

だが、元は超進化をとげた人類だ。すぐに地球の主導権をにぎったのだろう〃

「ああ、そうか。恐らくはそれは三万年ぐらい前のことに違いない。その頃、旧人類と現人類の交代があったが、中間の進化を示す人類が見つかっていない。いわゆる、ミシング・リンクってやつだ。なるほど、急に別宇宙の人類が来たので起こったんですね」

竜介が感心した声を発した。

「すると、あのブルースは」
美可がきいた。
〝一種の先祖がえりではないか。たまたま、ニューオーリンズでジャズが生まれた頃、それに誘発されW・C・ハンディという黒人が、大昔の先祖の持っていた才能に目覚め、次々とブルースを作った——こう考えてよかろう。
しいたげられた黒人の心をいやすメロディーは、荒れた戦闘ロボットの興奮を静めるのと同じものだと思う〟
「すると、この大宇宙には、予想もつかぬ精神波が飛びかい、連綿と続いてるんですね」
感心した真純に、中枢は駄目を押した。
〝君は、この司令室、偵察艇、格納庫、すべて人間が存在できるようになっているのに気づいたろう。ロボットだけなら、何も空気発生装置などいらない〟
「そうか、ぼくもとろいな。今まで自由に呼吸していたが、考えてみりゃ、おかしなはずなのに気づかなかったとは。実際、我ながらぼんやりしてました」
真純は、赤面してしどろもどろになると言った。
〝なんだ、気づかなかったのか〟中枢はあきれたようだが、後を続けた。〝それを、わざわざ備えているということで、君らと、このロボット達のマスターとの関係は明らかになったろう。オーラ星ではわし達が空気を補給してやったのだが、それも判らなかったろうな〟

真純は心底から感じ入った。ブルースに感激した美可はもちろん、夢想好きな竜介も中枢の考えに大よろこびをした。
「すると、当初の基本原則に支配され、フォックスは、自分を犠牲にしてぼくを村正から救った。切りかかったのが人間・吉岡ですから、ほうっとけばぼくは切り殺される。
一方、アリエルは二度もぼく、つまり、マスターを襲ったことで原則と矛盾を起こし、廃ロボットになった。これで判りました」
真純は、しめくくりのように言った。
〝そうだ。君達も仲間の地球人をこのままにしておくのはいやだろう。始末してやるか〟
中枢は吉岡と小松に近寄ると、腕とすねの切り傷を簡単に治してしまった。二人とも、いつの間にか苦痛のため、気絶している。真純は聞いた。
「じゃ、この後、どうします、中枢？」
〝そうだなあ。こんなことを、なまじ覚えていても、君ら三人にはかえって邪魔だろうし、こちらの二人もロクなことはない。
とりあえず記憶を消して、また全員、地球へテレポートしてやろう。わし達のことを忘れ、元の生活に戻るのだ。

ゴラム軍団はボスとともに滅んだし、この艇はもうスクラップだ。勝手に宇宙をさまよわせておこう。下手に処理しようとしても、この図体じゃ、精神力を無駄使いするだけで、君らの格言を借りるなら《骨折り損のくたびれ儲け》だ。もう、何もできまい〃

五人の地球人類から完全に記憶を消すと、オーラ中枢は彼らを日本に送りかえした。

ここで可哀相なのは、あの本当の地球霊体・大峯山人であった。あまりドタバタが続いたのでパンシーは彼との約束をすっかり忘れてしまい、そのままにしてしまったのである。

驚いたことに、地球ではまったく日が経っていなかった。恐らく超ワープのくり返しと時の流れが相殺しあい、こういう結果を生じたのであろう。

真純、竜介、美可の三人は、なぜか御岳などに登ってから間もなく、高校生になった。真純は高等科の柔道部に入り、竜介は映画研究会のメンバーになった。木暮美可は、なんとブルース同好会というのを作りあげた。皆、それぞれに好きなことを始めたが、逆に前よりもつきあいは深くなったのである。

ある日曜日、小町通りのコーヒー店でぼんやりテレビを見ていた彼らは、どこかで見た顔がブラウン管に現れたので、仰天した。

「なんと、吉岡と、えーと、そう小松という男だ」真純は呟いた。「まさか、テレビに出るとは！」

だが『ざしきぼっこ対妖刀村正』ではなく『ナゾの円盤・東京を襲撃』という幼稚園児向けの番組で、変テコな宇宙人に追いかけられる端役なのに、やっと納得した。

「あの二人じゃね、これで十分だって――」

仲良しトリオは、クリーム・パフェをなめながら、大笑いしたのである。

『ピンボケ宇宙戦争』おわり

ソノラマ文庫〈143〉

ピンボケ宇宙戦争

昭和54年11月30日初版発行

著　者　塩谷　隆志
©Takashi Shioya

発行人　村山　実

発行所　株式会社　朝日ソノラマ
東京都中央区銀座4－2－6
第二朝日ビル（〒104）
振替番号　東京2－40311

印刷所　図書印刷株式会社

落丁本，乱丁本はおとり替えいたします。　8193―726143―0049

面白さ抜群の新しい文庫

ソノラマ文庫

死者の学園祭……赤川次郎
赤いこうもり傘……赤川次郎
怪傑G・ライヤー登場……石川英輔
怪傑G・ライヤーの決戦……石川英輔
宇宙戦艦ヤマト……豊田有恒・原案 石津嵐・著
宇宙潜航艇ゼロ……石津嵐
宇宙海賊船シャーク……石津嵐
宇宙の放浪者……石津嵐
宇宙の孤星……石津嵐
イシスの神……石津嵐
小説・佐武と市捕物控……石森章太郎・原作 辻真先・文
宇宙巨艦フリーダム……石森章太郎・原作 吉津實・文
地球盗難……海野十三
喪服を着た悪魔……風見潤
死を歌う天狗……風見潤
古都に棲む鬼女……風見潤
影なき魔術師……梶龍雄
透明少年……加納一朗
夕焼けの少年……加納一朗
怪盗ラレロ……加納一朗

イチコロ島SOS……加納一朗
虹魚は海に消えた……加納一朗
ミラクル少女……加納一朗
ほらふき大追跡……加納一朗
ふくろうが死を歌う……加納一朗
ロボット大混乱……加納一朗
タイムマシン殺人事件……加納一朗
死体がゆっくりやってくる……加納一朗
天国探偵局……加納一朗
半透明人間の逆襲……加納一朗
海底牢獄……香山滋
悪魔の星……香山滋
宇宙翔る虎……吉津實
時の首飾り……吉津實
アンドロボット'99……今日泊亜蘭
海を呼ぶ青年……草川俊
悪魔の玉手箱……斎藤栄
走れ、はやて……相良俊輔
エスパー・オートバイの冒険……塩谷隆志
エスパー・オートバイ苦戦す……塩谷隆志

妖怪流刑宇宙……塩谷隆志
ピンボケ宇宙戦争……清水義範
エスパー少年抹殺作戦……清水義範
エスパー少年時空作戦……清水義範
緑の侵略者……清水義範
禁断星域の伝説……清水義範
黄金惑星の伝説……清水義範
不死人類の伝説……清水義範
放課後の殺人者……仁賀克雄
あの子は委員長……神保史郎
黄色のバット……杉森久英
海の見える窓……杉森久英
死神博士……高木彬光
白蠟の鬼……高木彬光
連帯惑星ピザンの危機……高千穂遙
撃滅!宇宙海賊の罠……高千穂遙
銀河系最後の秘宝……高千穂遙
暗黒邪神教の洞窟……高千穂遙
銀河帝国への野望……高千穂遙
人面魔獣の挑戦……高千穂遙
軍艦泥棒……高橋泰邦
海底基地SOS……高橋泰邦
マンガ研究生……武田武彦
死に神はあした来る……辻真先
仮題・中学殺人事件……辻真先
盗作・高校殺人事件……辻真先

改訂・受験殺人事件……辻真先
変身番長サクラ……辻真先
宇宙番長ムサシ……辻真先
SF番長ゴロー……辻真先
ニッポン絶体絶命……辻真先
SFドラマ殺人事件……辻真先
蜃気楼博士……都筑道夫
小説どろろ……手塚治虫・原作 辻真先・文
凍原に吼える……戸川幸夫
牙王物語(上)……戸川幸夫
牙王物語(下)……戸川幸夫
名探偵は千秋楽に謎を解く……戸松淳矩
青空に虹が……富島健夫
機動戦士ガンダム……富野喜幸
マーメイド戦士……豊田有恒
月光、魔鏡を射る時……鳥海永行
ささぶね船長……永井萠二
黒の放射線……中尾明
新学期だ、麻薬を捨てろ……夏文彦
殺し屋だ、手をあげろ……夏文彦
TV版宇宙戦艦ヤマト1……西崎義展・構成
TV版宇宙戦艦ヤマト2……西崎義展・構成
TV版宇宙戦艦ヤマト3……西崎義展・構成
さらば宇宙戦艦ヤマト1……西崎義展・構成
さらば宇宙戦艦ヤマト2……西崎義展・構成
岩窟の大殿堂……野村胡堂